598-5
1200501528789

小酒井不木全集　第四卷

探偵小說長篇集

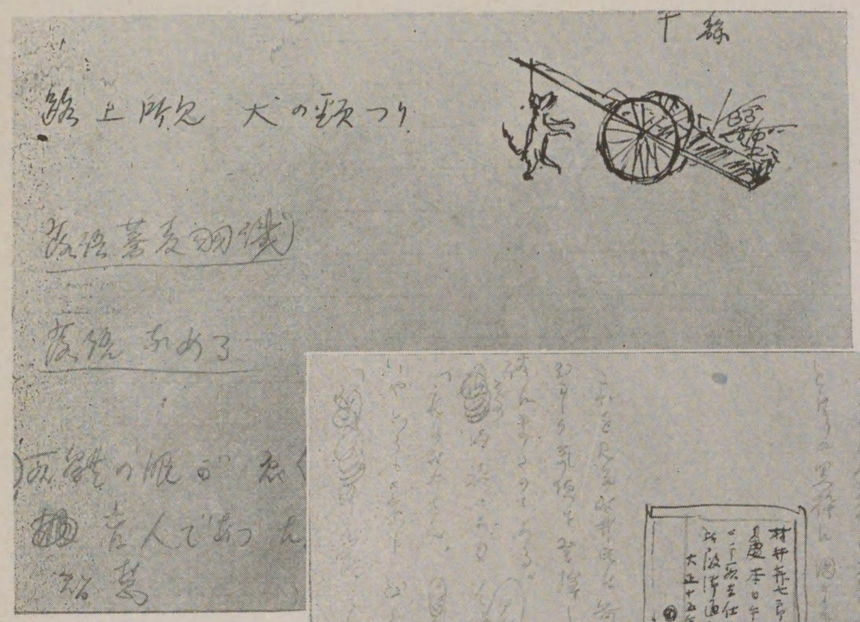
改造社版

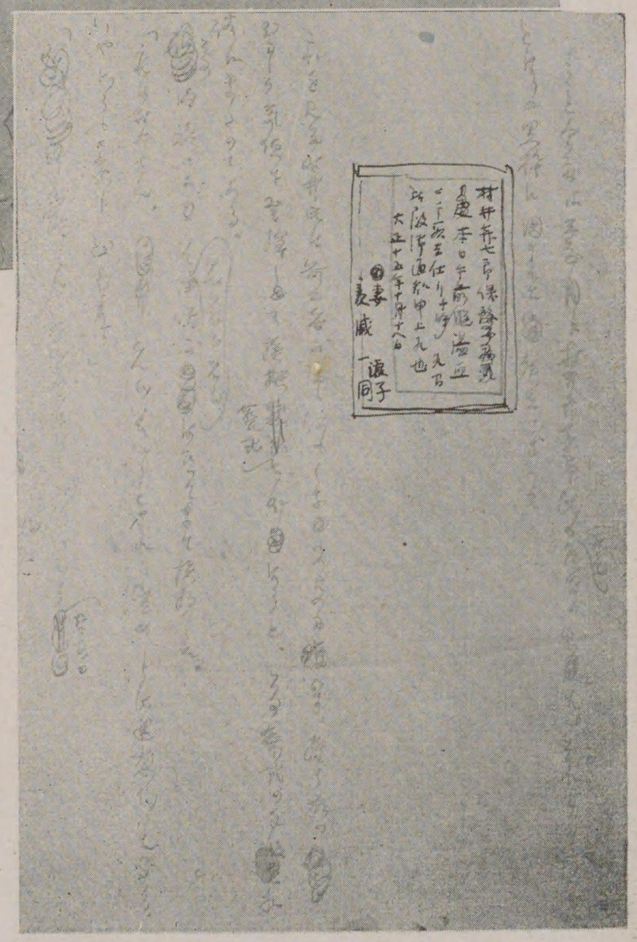
（氏伸川谷藤・氏鹿東校園・氏巷龍川門江・氏二清師主・氏木木井潤小・氏一卓田岩・氏江盛山平ゆとたて向）……り集の人辰鉛鉄

横浜市図書館
63. 2. 25
横浜市図書館蔵書

87W73131

J96
チ1





〔上〕 短篇小説テーマ帳のある頁

〔下〕 「疑問の黒枠」の草稿の一部

第四卷目次

疑問の黒枠……一
大雷雨夜の殺人……二八二
戀魔怪血……三七一
孔雀の樹……四八九

疑問の黑枠

プロローグ

泣きたい秋だと榮養不良の詩人は言ふであらう。擽つたい秋だと頭の尖つた常習犯罪者は言ふであらう。もどかしい秋だとうぶ毛の多い戀の女は言ふであらう。昨夜JOCKで『西の風曇り』と報ぜられた空が、皮肉にも精巧なカットグラスを見るやうに澄んで、紫外線に富んだ十月の午後の陽は、人の心をとりぐに興奮せしめずには置かない。たゞ、科學者の世界だけには、秋に拘らず、空に拘らず、冷靜と沈着と、歸納と演繹とが、嚴然として存在するばかりである。

顯微鏡、試驗管、孵卵器、各種の標本……かうしたものが處狹きまでに、机の上四圍の棚にならべられた研究室で、先刻から法醫學者小窪介三教授と、助手の肥後俊助君とが對座して居た。

『……ですけれど先生、法醫學の領分を、犯人捜索、犯罪の科學的研究にまで擴げることは、寧ろ、

法醫學の發達を遲らせることになりはしませんか』と、少壯氣銳の青年學者が訊ねた。

『これまで、法醫學者は皆さういふ考へで居たよ』と、老教授は硝子越しに庭を眺めて答へた。其處には無花果の大きな枝のところ〴〵に、面疔のやうに紫に染つた果實が、巨大な蛭の喰ひ跡でもあるかのやうに紅く裂けて生つて居た。

『然しそれは誤りだよ。法醫學に限らず、醫學乃至一般科學は、從來あまりにも分析といふことばかりに力を入れて來た。卽ち幹から枝、枝から葉、葉から葉脈、葉脈から氣孔といふ風に微に入り細を穿つといふ方針で研究されて來た。だから多くの科學者の室には顯微鏡がある。現に此處にも顯微鏡がある。けれど、顯微鏡で研究された結果は、要するにネアンデルタールから發掘された石器時代の人骨のやうに、ばら〳〵の纏りのないものばかりだ。すれば結局、今の科學は一種の寸斷遊戯に過ぎないのだ。卽ち、顯微鏡は一種の玩具に過ぎないのだ。尤も、人生そのものが一種の遊戯ではある。たゞ然しその中に死のみは嚴肅な事實だ。だから、その死を研究する法醫學では、少くとも遊戯を避けたいと思ふ。我々はもう分析をやめて合成に移らなければならない』

『けれども、まだ法醫學の領域には、わからぬことが澤山あるではありませんか』

『わからぬことは澤山あるけれども、その多くは、分析によらず合成によつて解決すべきものだ。それをいつまでも分析によつて說明しようとするから、永久に失敗に終るのだ』

『すると具體的にはどうすればよいのですか』

『それが繰返して言ふところの、法醫學を犯罪搜査にまで擴げることだ』

『といふと例へばあのフリーマンの小說に出て來るソーンダイク博士のやうに法醫學者が探偵として活動すればよいといふのですか』

『違ふ、違ふ、ソーンダイクの方法は、あれは、たゞ物的證據を分析するだけだ。卽ち、從來の法醫學的知識を犯罪搜査に應用したといふに過ぎない』

『では、先生の仰しやるのはどんな風にするのですか』

『まづ何より先に人間の心を研究するのだ』

『ミュンスターベルヒの心理的探偵法といつたやうなものですか』

『違ふ、違ふ。心理的探偵法も、やはり淺薄な分析に過ぎない。……僕はいつも考へて居るのだよ。今の科學者は、あまりにも人間の心を無視して居るとね。例へば醫學者は病人の心を無視して居る。だから病は治らない。裁判官は罪人の心を無視して居る。だから正しい裁判は出來ない。それと同じやうに犯罪搜索者は、犯罪者の心を無視して居るから、容易に犯人がわからないのだ。いかに冷酷無情の犯罪者でも、木や石で出來て居る譯でないから、必ず心がある筈だ。だから、その心を搜索の對象とするのだよ。今こゝに一つの犯罪が行はれたとする。例へば殺人がね、從來は現場の死體の位置を

觀察したり、死體を解剖したり、或は血痕を分析したり、指紋を採取したりして犯人を推定したのであるが、うまく推定の出來るときは稀で、推定の出來ない場合が大部分を占めたものだよ。して見ると、これまでの科學的捜索なるものは、まつたく偶然に支配されたのだ。犯人逮捕に成功したのはまぐれ當りに過ぎなかつたのだ。それでは何にもならない。これが所謂分析の罪なのだ。で、これからは、どうしても犯罪捜査に必然性を持たせなければならない、如何なる場合にも必ず成功する探偵法に工夫を凝らさなければならない。それがためには我々は從來の分析法を捨てるべきだよ。言ひ換へれば顯微鏡を捨てるのだ。さうして、もつぱら犯人の心を研究するのだ……わかつたかね？』

『どうもよくわかりません』

『わからない？　さうだらうとも、わからぬは當然だよ、まだ世界の何人にもわからないのだから。それがわかつたら、未解決の犯罪といふものはない筈だ。ところで、犯人の心の研究は何によつて行ふかといふに、いふ迄もなく、社會そのものを研究することなのだ。犯罪は社會の反映であつて、社會の矛盾と缺陷は犯人の心によつて代表されて居るのだ。然らばその社會の矛盾と缺陷とを何によつて一番手短に研究するかといふに、それは被害者の心を研究すればよいのだ。そこで僕はかねてから犯罪方程式なるものを考へて居るのだよ。例へば殺人に就いていふならば、

殺人＝犯人の心―被害者の心

といふのがこれだ。極めて平凡な式であるけれども、この方程式を十分理解し得たならば、どんな犯罪も解決されるのだ。勿論探偵がこの方程式を應用するに當つては、探偵自身の心をもつて活動しなければならない。從來の探偵の際には、主として知識のみを使用して事足れりとして居たのであるが、この方程式を以て解決に當る場合は、全人格を働かせねばならぬのだ……わかつたかね？』

『わかつたやうな、わからぬやうなものです』

『ふむ』と教授は微笑した。『抽象的な議論といふものはとかくわかりにくいものだよ。假りに君が僕のこの說を、ある探偵小說の中へでも書いたとしたら、讀者はきつと厭いてしまふだらう。だが、もう少し辛抱して聞きたまへ。從來の犯人捜索といふことは、犯人を發見逮捕するといふ單なる興味を以て行はれようとしたのだ。然し、それは根本的な誤りだ。探偵が全人格をもつて活動するときは、好奇心などの浮ぶ筈がない。全人格をもつて活動した結果、どうにも逃れられぬ破目になつて犯人がこちらの手のうちに飛び込んで來たとき、やむを得ず逮捕すればよいのだ……』

『すると、犯人が巧に逃げれば逃がして置いてもよいといふのですか』

『まあ待ち給へ。必ずしも一概に言ふことは出來ぬよ。智慧があつて逃げかくれる奴は、より以上の智慧を出して捕へればよいが、心をもつて逃げかくれる奴は、先方から飛び込んで來る迄は逃がして置くべきであらうよ』

『すると先生は悪人の味方をされるのですか』

『何？　悪人？　悪人なんてこの世の中にはめつたにあるものではないよ。たゞ書物の中に澤山あるだけだ』

かういつて教授は髭の多い顔を歪めてにこりと笑つた。ホイスラーの描いたカーライルそつくりの顔をした小窪教授は、先年學位を辭退して問題となつた。教授はそれについて何の理由をも説明しないが、日本否、世界有數の學者でありながら東京に住まぬのは、東京がうるさいからださうである。學問研究は田舍の町に限る。かう主張して、教授はこの名古屋の大學に籍を置き、それが今では名古屋の誇りの一つとなつた。助手の肥後君はこの九月に東京大學を去つてわざ〳〵小窪教授の門に入つたのであるが、今日は土曜日であるにも拘らず午後まで居殘つて、はからずも教授に犯罪方程式の説明をきいた譯である。

中央線を走る列車の音が秋の空氣に強く響いて來た。今まで論議に熱中して居た教授は突然言葉の調子を變へて、

『秋だねえ』と言ひ放つた。

『まつたく秋になりました。これからは犯罪の數が減じます』

『さう、統計上犯罪は春から夏にかけて一番多く、秋から冬にかけて漸次減ることになつて居る。けれどもそれは突發性の犯罪にのみ當てはまる統計だよ。計畫された犯罪は、却つて秋から冬にかけて多いものだよ。即ち、先刻話した犯罪方程式に當てはまる殺人の如きは、この季に最も多く行はれるのだ。何しろ、秋から冬にかけての氣候は、冷靜に事を計畫するには都合がよいからね』

『然し、兎に角、ことしも、秋になつてから犯罪の數が少くなつて來たやうにおもはれます』

『それはそうだ。だが、僕には近いうちに何事か起りさうに思はれるね。少くともこの名古屋　平和を攪きみだすやうな事件が』

肥後君は一寸驚いて教授の顔を見つめた。

『それには何か據りどころがありますか』

『あるね』

『どんなことですか』

『例へば先日來二回市中をさわがしたあの死亡廣告事件のごときものだ』

『あれは、單純な悪戯ではないでせうか』

『さうかも知れない。けれど世間を騒がす悪戯といふものは、必ず悲劇に終るものだよ』

『すると先生は、あれを何か犯罪事件の前驅と見られるのですか』

『さあ、僕は豫言者ではないからそれを斷定する力はない。然し、すべて珍しい現象といふものは、

天然的のものであつても、人爲的のものであつても、或は客觀的のものであつても、なほ又主觀的のものであつても、多くの場合悲劇に終るのがこれまでの慣例となつて居る。君も歴史を繙き物語を讀んで思ひ當ることが澤山あるだらう』

『では、大事件の發生を待ちますかな』

『待たなくてもよい。期待といふことは科學者に禁物だよ』

『すれば、事件をしてそれ自ら發展せしめよですか』

『さうだ。さうして事件が起つた時……』

『我々をして犯罪方程式を應用せしめよですか』

かう言つて肥後君が、好奇心に滿ちた眼をもつて教授の顔をながめると、教授は微笑のまゝ輕くうなづいて、再び窓外の秋色に眼を移すのであつた。

第一章　死亡廣告

『……何しろ驚きましたよ、自分の死亡廣告を自分の眼で讀むなどといふことは六十年の生涯にはじめての氣味の惡さでした』

と、訪問の客は、出張つた、厚い然し血の氣の少い下唇を、變にねぢらせて苦笑しながら更に言

葉を續けた。

『前に二回かういふ惡戯があつたから、同じ驚くにしても、まあその程度は割合に少かつたのですがもし拙者が眞つ先に槍玉に上つて居たとしたら心臟のよくない拙者は、本當に死んでしまつたかもしれません。いやもう、とんでもない惡戯をする人間が世の中にはあるものです。お蔭で昨日今日は弔問の客や弔電が引きも切らぬ有樣で、やつと今、少し暇が出來たので御邪魔にあがりました』

客は名古屋でも指折りの富豪で、村井商事會社を經營して貿易界に羽振りをきかせて居る村井喜七郎氏である。氏は今、檀那寺なる中區老松町の東圓寺をたづねて、昨日、新聞に自分の死亡廣告を出された顚末を、住職の友田覺遵師に語るのであつた。

『いや、定めし御迷惑のことで御座いましたらう。愚僧も新聞を拜見したときびくつとしましたよ。牛肉の罐詰だと思つて開いた中から、石ころが出たといふやうな驚きよりも數倍强いものでした。取りあへず人を走らせて眞僞を御たづねに上らせた譯ですが、豫期したことゝいひ乍ら、詐りだと聞いた時は胸を撫下しました。だが村井さん、人間は出る息入るを待たぬ習ひ、今回のことにつけても、後生の一大事を御心掛けにならねばなりません』

がつしりした體格をもつた、いはゞ大入道といつた感じのある友田師は、小柄な村井氏とはよい對照をなして居た。かういふ僧侶の口から、後生話が出るのは、ちよつと不似合なものであるが、强大

な信仰といふものは、かうした不似合な人に存在し易いもので、似合な、尤もらしい僧侶には、信心は通常縁遠いものである。

『ありがたう御座います』と、村井氏は平素の態度に似合はず、しんみりとした調子で答へたものである。すでにその顔附からが助産婆を思はせるやうな滑稽に満ちて居るとほり、その性質も極めて滑稽味を帯んで居る村井氏は、及第點に達せぬ狂歌や俳句を弄び、色々人前で滑稽なことを演じて相手を笑はせ、或は途方もないことをして人の度膽を抜くことが好きであつた。たま〳〵念佛は申すけれども、何のために申す念佛であるかを知らず、時には朝夕の勤行に佛壇の前で阿彌陀經の一卷ぐらゐ讀み上げるけれども、淨土眞宗がどんな宗派であるかを知らなかつた。從つて信心も安心も未だ嘗て獲得したことなく、『朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり』の御文章にも一度も感動を催さなかつた。その村井氏が、いまさも〳〵心から『無常迅速』を悟つたかのやうに發した言葉は、むしろ、村井氏の平素を知つて居る住職に取つては意外であつたが、宿善開發とはこんなことを言ふのであらうかとも思つた。

『この死亡廣告が機縁となつて決定が出來ればあなたはまことに御仕合です』

『左樣、やつぱりこれは阿彌陀樣の御方便とでもいふので御座いますかな』と、村井氏は羽織の襟を正して言つた。

明け放たれた障子のむかふには、幅の廣い板縁を隔てて、閑靜な、奥深い庭があつた。老松にからむ蔦の蔓は瀧のやうに垂れさがつて亡者の血の色かと思はれるやうな雁來紅と接吻しつゝ、やがて程なくどうだんと共に、焔のやうな紅葉の幕を飾るべき下準備をして居るかのやうに、忙はしくその葉をゆすぶつて居た。緑の波のうねりを思はせる地面一ぱいの苔の中から、津波の前に姿をあらはす海中の奇巖のやうに突き出て居る庭石の蔭には、蟷螂の脚のごとき幹をもつた秋海棠が、さびしさうに花を開いて居た。

村井氏は西方に傾いた日かげに照された庭の面を、暫らくの間放心の態でながめて居たが、折から一疋の蝶が迷子のやうに縁の方に踊つて來たのを見るなり、急に思ひ出したやうに言つた。

『時に和上、今日は御相談があつてまゐつたので御座います』

『御相談とは？』

『和上に叱られるかも知れませんが、死亡廣告の中に、明後日が葬式の日であると書かれて居りますについて、いつそ葬式をやつて見ようと思ふのです』と、村井氏はいつものにこ〳〵顔を取りかへして言つた。

『葬式をやつて見るとは？』と、友田師は不審な面持でたづねた。

『なに、例の拙者の十八番ですよ。拙者もどうせもう長いことは生きて居れぬと思ひますが、まだま

だ死なれません。娘によい聟をあてがはねばならぬし、會社の方にも、すつかり任してしまへる人物が見つかりませんからな。和上に迷信を語つては相濟まぬが、死亡廣告を出されるなどは、あんまり緣起がよく御座いませんのぢや。そこで拙者はこの際緣起なほしがしたいものだと、昨日からいろいろ考へました結果、これはやつぱり、死亡廣告どほりに、いはゞ模擬葬式をやつて見ようと思ひついたので御座います』

住職は田螺のやうな眼をむいて村井氏の語るところを聞いて居たが、

『模擬葬式！　なる程な、愚僧も長い間多くの葬式をやつて來たが、模擬葬式といふ言葉は今日始めて聞くし、まだ一度もやつたことはありません。ですが、模擬葬式をやると、それが、どういふ譯で緣起なほしになりますか』

『實は恰度、來月の二十日が拙者の誕生日に當りまして、今年は還曆なので御座います。そこで還曆の祝を一ヶ月早めて模擬葬式のあとで、本卦がへりの宴を開かうと思ひますのぢや。世間では赤兒にかへるといふところから赤い繻袢を着ますが、拙者はその死んで生きかへるところを徹底的にやらうと思ひます。往生は生れるといふ文字を書きますから、死ぬことは生れること。これまでの村井喜七郎を模擬葬式で葬り去つて、新しく村井喜七郎が生れようといふ趣向です。なんと和上、これで緣起なほしは出來ますまいか』

『なるほど、これは珍趣向。阿彌陀樣も御贊成下さるかも知れません』と、住職も相好を崩して言つた。

『では勿論、和上は御贊成下さいますな？』

『贊成します。世間ではたとひ眞似事でも葬式などをやることは、大へん緣起を惡がるにちがひありません。それを敢てせられるあなたの度胸には感心します』

『これは有難い、實は、葬式の眞似事をするなどといひ出したら、きつと和上に反對されるものと思つて居ましたよ』

『なに、この世の中の人は、みんな眞似事しかやつて居りませんよ。坊主は坊主の眞似事、醫者は醫者の眞似事、學者は學者の眞似事をして居るだけです。末法五濁の世とは、言ひかへて見れば眞似事の世の中といふ事です。ですから、この際、知名のあなたが模擬葬式を御やりになるといふことは、世間に對する一種の諷刺になりませう。御開山聖人は「愛慾ノ廣海ニ沈沒シ、名利ノ大山ニ迷惑シテ定聚ノ數ニ入ルコトヲヨロコバズ、眞證ノ證ニチカヅクコトヲタノシマズ」と仰せられましたが、名利と愛慾に眼のくらんで居る今の世の中では、なるべく大がかりな方法をもつて、諷刺し警告するより他はありません。模擬葬式はまことに時宜を得たものと思ひます』

『いや、別に拙者には、それほどの深い考へがあるのではありませんが、和上の贊成を得て大に意を

強うしましたのぢや、家内などはそれこそ縁起を一そう悪くするから、およしなさいと病床に居りながら頻りにとめますので、少々閉口致しましたが、和上が味方になつて下されば拙者も快くやることが出來ます。そこで申すまでもなく模擬葬式には和上自身おいでが願へませうか』

『參りますとも。葬式の時間は何時と出て居ましたか。さう〳〵新聞を取り寄せればわかりますなあ』

かう言つて住職は、後の襖を顧みて、隣室に向ひ、

『おい了諦、昨日のN新聞をもつて來てくれないか』と大聲に叫んだ。

間もなく、三十ばかりの伴僧山場了諦が襖をあけ、新聞紙を手にしてはいつて來た。彼は先刻村井氏にお茶を出してから隣室に伺候して、住職の命令を待つて居たのである。

新聞紙を受取つた住職は最後の頁を見て言つた。

『うむ、こゝにありますな』

其處には二段に亘つた黒枠の中に次の文句が書かれてあつた。

村井喜七郎儀本日午前十時腦溢血ニテ死去仕リ候間此段御通知申上候

追而葬儀ハ來ル二十日午後七時自宅ニテ相營ミ申スベク候

大正十五年十月十六日

妻　浪子

親戚一同

こゝで作者は先日來、中京の地を騷がせた死亡廣告事件なるものを簡單に紹介して置かうと思ふ。

十月六日の朝、S新聞を見た一部の人々は知名の吳服店主谷村英三氏の死亡廣告に少からず驚かされた。谷村氏の親戚一同は廣告主となつて居ながら谷村氏の死を知らなかつたので、その驚きは世間の人のそれよりもはげしかつたが、何といつても一番驚いたのは生きて居る谷村英三氏その人であつ

た。それから大騒ぎとなつて、警察では、誰が廣告を依頼しに來たのか嚴重に取り調べたけれども、何しろ新聞社の廣告係は多忙のためよく記憶して居らず、たうとう有耶無耶のうちに過ぎてしまつて、たゞ迷惑したのは谷村家だけであつた。然し世間の好奇心といふものは妙なもので、このことがあつてから、今まであまり繁昌しなかつた谷村吳服店が急に賑ひ出し、いはゞ谷村家にとつては、禍が轉じて福となるに至つた。ところが、十月十二日の朝、S新聞は又もや生きて居る人の死亡廣告を載せた。死亡したと廣告されたのはやはり知名の人で藥種商を營んで居る市川長兵衛氏であつた。警察では時を移さず取調べにかゝつたが、やはり誰が廣告を依頼しに來たのかさつぱりわからず、たゞ市川家が迷惑をしたといふ外、別に他に累を及ぼさなかつたので、恐らく、惡戯好きな人間が、單に世間を騒がせるために行つたことに過ぎないであらうと解釋されたのである。

するとこんどは、N新聞に、村井喜七郎氏の死亡廣告が出たのである。それは昨日卽ち十月十七日の朝のことで、谷村英三氏も市川長兵衛氏も、別に死亡廣告を出されたからといつて何事も行はなかつたのに反し、村井喜七郎氏は、冗談好きの性質が、じつとして居ることを許さず、模擬葬式を計畫して、今日、東圓寺住職にその執行を依頼しに來たのである。

『午後七時ですなあ。夜の葬式とはめづらしい。俗に、貰ふものなら日の暮の葬禮でもよいといふ諺がありますが、これはもう一歩進んで居りますわい』と住職は笑を含んで言つた。

『然し、午後七時と書いてくれたので、こちらの趣向をこらすには大へん好都合でした』と村井氏は答へた。

傍に坐つて居た伴僧了諦はこの時村井氏に向つて、不審さうな顔をして、

『廣告通りに葬式を御やりになるのですか』

とたづねた。

住職は簡單に村井氏の計畫を說明して聞かせた。

『さういふ譯だから、明日はお前と二人で村井さんのお宅へ伺つて、色々準備をして、極めて嚴かに式を營むことにしよう』

『それはよい思ひつきです』と、了諦は村井氏の方を向いて諛びるやうに言つた。『村井さんなればこそ、一寸普通の人には考へつかぬことでもあり、たとひ考へついてもその實行を躊躇するだらうと思ひます。よほど太つ腹の人でなければ、死人の眞似をすることは出來ますまい』

『いやなに』と村井氏は頗る上機嫌になつて言つた。

『太つ腹も何もない。たゞ拙者はかういふ冗談をすることが好きなだけで、この年になつても子供氣が抜けないのですよ。尤も赤ン坊に還るのですから、それも無理はないかも知れぬが、はゝゝゝゝ』

蒼白い面長の顔をした了諦は、この時お附合ひに少し笑つて、急に眞面目顔になり、

『それにしても、「腦溢血ニテ死去仕リ候」とは思ひ切つたことを書いたもので御座いますねえ』と村井氏の顔をぢつと見つめて言つた。

この時村井氏は、突然、

『おゝ、さう〳〵』といつて袂の中に手をやり、圓形のボール紙製のケースを取り出して蓋をあけ、中の褐色の丸藥數粒を掌の上に受け、それを頰張つてから、膝元に置かれてあつたお茶をもつてのみ下した。

『いや、本當にこれだけは圖星をさゝれましたよ。實は腦溢血になるのが怖さに、かうして、毎日豫防の丸藥を用ひて居るのです。お醫者さんに見て貰ひましたら、血壓が百何十やらあつて動脈が硬化して居るさうで、その上心臟もあまり丈夫でないといふので、これを處方してもらひましたよ』

『今のお醫者さんは取越苦勞をしますな』と、この時友田師が口を出した。『病氣を治すことさへ出來ぬものが、病氣の豫防をするなど、ちと、烏滸がましくはありませんか。一たい、佛性の具はつて居る勿體ない身體を下根の醫師に見せるといふことがそも〳〵間違つて居ると思ひますよ。村井さんも明日は生れ變りになるのだから、せめて生れ變つてからは、醫者なんどに身體を御見せにならぬのがよろしからう』

『いや、さう仰しやればその通りですが、拙者はまだ和上のやうに悟り切れませんので』

村井氏の聊か閉口した體を見た了諦は、話題をかへるために、

『それにしても、この廣告を出したものはどういふ人間でせうか』とたづねた。

『さあ』と、村井氏は元氣づいて言つた。『警察でもさつぱりわからないのださうです。わざ〳〵金を使つて、一文の得にもならぬ惡戯をするなんて、よほどの好事家でせうな』

『始め二回はS新聞に出し、こんどはN新聞に出したところを見ると、發覺しないやうにと注意して居ることが、わかります。けれど、警察も警察ですねえ、同じことが三度重なつても、惡戯の主をつきとめることが出來ぬとは、人民保護が聞いて呆れます』

『なに！　と住職が口を出した。『警察は人民を保護して居ればこそ、さうしたことがわからないのだ。どこの警察でも死亡廣告保護といふことはやつて居らんからな』

『御冗談は兎に角』と、村井氏は住職の眞面目顔に、一寸吹き出しさうになつて言つた。『警察でも調べられるだけの事は調べたでせうが、やつぱり廣告主の方が役者が一枚上なのでせう』

『さういふ廣告主を相手にして、模擬葬式をやるといふことは、少し氣を附ける必要がありますまいか』と了諦は何となく興奮した口調でたづねた。

『大丈夫だらう。村井さんは、その廣告主よりも、更に役者が一枚上だからな。どうしてこれだけの役度胸のある人は、恐らく日本中に無いよ』と、住職は相變らず、とぼけたやうな顔をして言つた。

『それについて、實のところ、明日の晩はまだ、もつと外に計畫して居ることがあるのです。このことは、失禮ながら和上だけに……』

『謀は密なるを要すといふのですな』と、住職は村井氏の言ひにくさうにして居るところを察して言つた。『では了諦、お前は庫裡の方へ行つて居てくれ、用があつたらまた呼ぶから』

了諦が去ると、住職と村井氏は一しきり、低聲で何事をか話し合つた。さうして、村井氏が歸宅すべく席を起つたときには、秋の日は暮れてあたりが薄暗くなつて居た。

かくて、法醫學者小窪教授がその研究室で中京の平和を攪きみだすやうな事件を起すかも知れぬと言つた二回の死亡廣告の謎は、恰度その翌日、第三の謎を生みその謎を基として、模擬葬式といふ、世にもめづらしい計畫が建てらるゝに至つた。然らばはたしてこの計畫が、教授の推察のごとく大事件に至る階段となるであらうか。

第二章　戀人同志

『いけないですよ。斷然中止しなければいけませんよ。なぜあなたはお父さんに忠告してやめさせないのですか』と、青年は言つた。

『だつて父は一旦言ひ出したら、決してあとへ引かない性分ですもの』と、女は答へた。

鶴舞公園を連立つて歩いて居るのは、村井喜七郎氏の一人娘富子と、富子の戀人なる村井商事會社社員中澤保とであつた。中澤は今日會社で、明日の晩村井氏邸で模擬葬式が行はれるといふ通知を支配人から受けて、八幡山下の村井氏邸に駈けつけ、富子を誘ひ出して公園を散歩し、富子に諭して、明日の模擬葬式を中止せしめようと企てたのである。

『模擬葬式といふ言葉を、聞いたゞけでもぞつとしましたよ。孟子ではあるまいし、葬式の眞似事などあまりに大人げないぢやありませんか』

『父のすることはいつでも、子供くさいですわ。けれどもそれは生れつきだから、仕方がないではないの。父は子供くさいことをやりながら、兎も角今日を築いたのですもの、强ち、父の子供くさい行爲を排斥するには及ばぬと思ふわ』

『けれども、同じ子供くさいことゝいつても、その事によりけりです。葬式は一生に一度ときまつたものですよ。たとひ模擬葬式でも、それを行ふといふのは、恐ろしさに堪へられぬことです。お父さんは、あなたの言葉なら、きつときゝ入れます。ね、お父さんにさう言つてやめて貰つて下さい』

二人はいつの間にか、ヒマラヤ杉の密生して居る低い丘の間の、人通りの少い路を歩いて居た。どこからともなく漂つて來る木犀の香にも氣づかぬらしく、保はステッキを力强くにぎつて富子の返事を待つのであつた。

が、富子は眞面目な態度とは反對に微笑さへうかべて答へた。

『ですけれど、模擬葬式のあとで還暦の祝をするのですから、何もそんなに恐ろしがらなくてもよいわ』

『それがいけないですよ。還暦祝なら還暦祝だけを世間に普通行はれて居る方法でやつたらいゝではありませんか。それも、普通の時に、還暦祝だけでは平凡だから、その前に葬式の眞似をやるといふのなら、まだ許さるべきですが、誰ともわからぬ人間に死亡廣告を出されて、その死亡廣告に書かれてある時間に模擬葬式をやるといふことは、恐ろしい罠の中へ飛び込むと同じことだと思ひます。實際何處にどんな恐ろしいことが潜んで居るかわかりません。本當に想像するさへ全身の神經が痺れるやうです』

『まあ』と、富子は保の顔を見上げた。『それはあんまり杞憂過ぎるわ。前に二回出された人たちには別に何事も起らなかつたではありませんか』

『その人たちは何事も企てなかつたから、何事も起らなかつたのです。人が惡戯をしかけたとき、笑つて過せば、二度と何事もしないのですが、その惡戯に相手になれば、きつとむかふがより以上の惡戯をしかけて來るのは世の中の通則です。だからどんな惡戯にも相手にならぬに限るのです』

富子は答へないで、暫らくの間地面を見つめて歩いた。

『するとあなたはお父さんの計畫に賛成したのですか』と保はいら〳〵しながらたづねた。

『賛成しましたわ。だからあなたも賛成して下さい』

『いけません。絶對にいけません』と保は頗る興奮して叫んだ。

富子は、それにも拘らず、相變らずにこ〳〵して居た。

『實はねえ。明日の晩には、模擬葬式と還暦祝の他にまだ色々のことをするのですつて。私はそのうちたつた一つだけ父から聞かされたのですが、それをきいてすつかり賛成してしまつたわ』

保の眼は好奇の色に輝いた。

『どんなことを聞いたのですか』

富子は一寸狡猾めいた笑ひを浮べた。

『それは今、御話しない方がいゝわ』

『あなたは僕にまで祕密になさらうとするのですか』と、保は更に興奮した。

『まあ、怖い顔』と、富子はやさしく言つた。『そんなにむきにならないで下さい。さあ、暫らくあそこで休みませうよ』

かう言つて富子は保の手を引いて、道ばたのベンチの方へ歩き寄り、相並んで腰をかけた。富子は依然として保の手を握りながら、

『ねえ、あなただつて、祕密といふことはお好きではありませんか』と、媚びるやうに身體を保の方へ捩ぢ向けて言つた。『あなたはいまだに、あなたの素性を仰しやらないではありませんか。たゞ、長い間アメリカに居たことがあると仰しやるきりで、過去のことを少しも聞かせて下さらないではありませんか』

保は兩頰を心持ち紅くして言つた。

『それを言はれると僕は困るのです。僕はたゞ自分の過去を語りたくないから語らぬのです。かといつて別に人に語つても恥づべき過去ではありません。たゞ僕は過去に於て自分の好まぬ生活を餘儀なくされたので、過去を語る興味がないといふに過ぎません。人は兎角、自分の過去を語りたがります苦しかつた過去を持つ人は、過去を語つて同情を求めようとします。花やかだつた過去を持つ人は、過去を語つて示威運動を試みます。さうしたことが僕には到底出來ないのです。無論、そのうちには僕の過去を語る時が來るでせう。それまで待つて居て下さい。然し、僕が過去を少しも語らないにも拘らず、あなたのお父さんは僕を任用して下さいましたし、あなたは僕の戀を受け入れてくれました僕はそれを何ものにも劣らぬ強い心で感謝して居ます』

『そんなにやさしく仰しやらなくてもよいわ』と富子は少しく狼狽して言つた。『お互に素性や過去がわからなくては戀が出來ぬといふやうな、窮屈な、舊時代的な戀ならば、そんな戀、犬に喰はれてしまへですわ。お互に出來る限り大きな祕密を包んで戀をしたら、どんなに熱烈なものだらうと、私よく考へることよ。だから、私はあなたが、なまじ過去を打ちあけて下さらないことを寧ろ望んで居るの、幻滅は如何なる場合にも附きまとふものですものねえ。たゞ、殘念なことは私があなたの好奇心をそゝるに足るだけの祕密を持つて居ないことですわ、けれど、これは今更どうにも仕樣がない』

保は富子の手を強くにぎり、富子の顏を見つめて言つた。

『祕密など、僕はほしくありません。その眼だけで澤山です』

かう言つて保は、暫らくの間、富子の眼を接吻したいやうな顏をして、ぢつとながめて居たが、何思つたか輕い太息をついた。

『それにしても、お父さんが、僕等の結婚をまだ許してくれぬのはどういふ譯でせう』と保は心配さうな調子を帶ばせて言つた。

富子は何とも答へないで俯向いたが心配して居るやうな樣子は更になかつた。

『ねえ、富子さん』と、保はのぞきこむやうにして言つた。『僕はそれが昨今氣がかりになつてならないです。あなたと僕とが、この公園で、はじめて戀を語つたのは八月十日の夜でしたでせう。あの時分は本當に僕の一ばん樂い時でした。ところが間もなく、會社へ押毛治六といふ男が雇はれて來ました。何處から來たのか、まるで地から湧いたやうに突然あらはれて、而も重要な地位を與へられまし

た。あの押毛の人相の悪さ！　僕は恐ろしくて彼の眼を正視することさへ出來ません。尤も彼は眼鏡をかけて居ますが。ことに彼の八字髭は人を愚弄する道具であるかのやうに、尖つた唇の上に陣取つて居ます。ところが、さういふ男であるにも拘らず、お父さんは彼を誰よりも大切にして居ます。といふよりも、お父さんは何だか、彼を大切にすべく餘儀なくされて居られるやうに思はれます。僕はお父さんが僕たちの結婚を許してくれないのが、何だか、あの押毛のせゐだといふ風に思はれてなりません。ことによるとお父さんは、あなたを押毛に與へるつもりがあるのではないかと、僕は氣が氣でないのです』

『まあ』と富子はびつくりしたやうな顔つきをして言つた。「それはあんまりな邪推だわ。父は一度も私にそんなことを話したこともなく、あなたの今の言葉は全く寢耳に水でしたわ。けれどたとひ父が何といはうとも私の心が動かねばいゝではないの？　それに……』

『本當ですか。押毛はあなたに逢つても、一度も、それらしいことをほのめかしたことはありませんか』

『ありませんとも』

『屹度ですね？』

『えゝ屹度』

『それで安心した』と、保はほつゝとして言つた。『けれど、あの押毛といふ人物があればこそ、僕は明日の模擬葬式に一層の恐怖をいだくのです。あゝいふ人物がうろついて居るところへは何人も足をふみこむものではありません。ですからやつぱり模擬葬式をやめてほしいと思ふのですが。一たいお母さんはこんどのことをどう思つておいでになるのですか』

『母はあのとほり身體が悪くて寢たり起きたりですし、それに父には絶對服從なのですから、こんどのことでも、母は反對でしたに拘らず、父の意に任せましたわ。本當に母はよく出來たものだと思ふわ。父の言ふことには何一つさからはず、それで居て、父のためならば自分の身を犧牲にしても敢て辭せぬといふ態度ですもの。私時々涙ぐましくなることがあるのよ。尤も母は若い時隨分苦勞して父に救はれたのださうで、それを恩に着て父のために盡すといつて居るのですが、近頃は少し病氣が重つたやうで、本當にかはいさうです』

富子のしんみりした口調に、保は一種の哀愁を催した。

『弱りましたねえ』と、保はじつと考へこんだ。『ではやつぱり、模擬葬式は行はるべき運命にあるのですね』かう言つてから急に元氣づき、『さう〳〵、先刻何やらあなたに、きく筈になつて居ましたねえ。さうだ。あなたが模擬葬式に贊成した理由といふのは一たい何でしたか』

『さうねえ。どうせ明日になればわかることですからお話しませうか、では一寸耳を貸して下さい』

保は首を傾けると、富子は吸ひ附くやうに口を寄せて、長い間何事をか囁いた。見る見るうちに保の顔はあかるくなり、その小さな口もとから喜びの色が起つて、波紋のやうに忽ち顔一面に擴がつた。

『やあ、大へん御親密ですねえ』

突然ベンチの後の小高いところから叫んだものがあるので、二人は彈かれたやうに立ち上つて、聲のした方をながめた。其處には一本の太い松の樹の傍に、つい今しがた、保と富子との話に上つた押毛治六が、銅像のやうにつゝ立つて居た。彼は帽子をとつて、にこ〳〵しながら富子のそばに近づき、保の方には目もくれず、

『今日は大へんよい天氣なので、ぶら〳〵散歩にやつて來て、はからずも御目にかゝつた譯ですっ時にお父さんは今回大へんな御迷惑なことでした。然しお父さんはこれを利用して、模擬葬式と還暦のお祝をなさるさうで、實に奇拔な計畫だと感心致しました。明晩は私もお招きに預づて居りますから是非參上して、大にお喜び申し上げたいと思ひます。どうぞお歸りになりましたら、お父さんによろしく仰しやつて下さいませ』

言ふだけ言ふと、押毛は、もぢ〳〵して返答をしかねて居た富子に活潑に御辭儀をし、保の方に輕い會釋をして、さつさと、むかふへ歩いて行つた。

『厭な奴だ！』と、保は吐き出すやうに言つた。『折角、いゝ話をきいて喜んだ甲斐もなくあいつのためにすつかり不愉快にされてしまつた』

かう言つて保は憎惡に充ちた眼をして、だん〳〵小さくなつて行く押毛の姿をぢつと見送るのであつた。

『ね、中澤さん』と、富子は宥めるやうに言つた。『さういふ譯ですから、あなたも明日の計畫には贊成して下さるでせう？』

保はなほも、押毛から眼を離さなかつたが、やがて押毛が横道にまがると、はじめて我にかへつて言つた。

『贊成します。だが、あいつが來るとなると、模擬葬式のすむ迄は油斷がなりませんよ』

第三章　模擬葬式

さて讀者諸君、想像力の豐富な諸君は、當然の順序として、筆者がこれから模擬葬式の場面を描くことを祭せられるであらうと同時に、探偵小說の筆法に通曉せられる諸君は、筆者が、模擬葬式の當日、村井喜七郎氏邸に起つた出來事を順序正しく述べないで、いきなり葬式の場面から叙述しはじめることをも知つて居られるであらうと思ふ。

十月二十日午後七時、模擬葬式は村井家の一ばん奥の十二疊の室で、極めて嚴肅に執行された。朝から空が曇つて何となく陰鬱な氣分を起させるやうな日であつたから、中澤保は、ともすれば暗くなりたがる心を抱きながら、六時半頃に村井家を訪ねると、すでに玄關脇の應接室には村井家の親戚の老若男女と、商事會社々員併せて二十數名のものが、談笑にふけり乍ら煙草をふかし、茶を飲んで、葬式氣分など毛頭もなき陽氣な光景を作つて居た。勿論その中には、彼の一ばん嫌ひな押毛治六も居たが、保は治六を見るなり、胸を強く毆られたやうな感じを起した。

『村井さんはどうしたであらう。富子さんは何をして居るのであらう』

主人側から誰一人挨拶に來ないのを保は不審に思つて、かうした疑問を胸に浮べつゝ、堪へられぬやうな不安に沈んで行くのであつた。

『早く模擬葬式の一幕がすんでくれるといゝ』保は言ふに言へぬ焦燥に驅られながら、時々押毛の方に眼をやつたが、押毛は如何にも快活に何の屈託もなささうに人々と語つて居た。

七時になると、應接室へ、異樣な服裝をした女がはいつて來た。見るとそれは、先日まで大須の寶生座で魔術奇術を興行して居た旭日齋松華であつた。彼女は舞臺に出るそのまゝの濃い紫色の洋裝をして、後ろに二人の少女弟子を從へて居た。

人々は、この突然なる魔術師の出現に、あッと思つて、暫らく呆然としたのか、

『御案内致しますからどうぞこちらへ』

といふ松華の言葉をきいても、すぐ樣立ち上るものはなかつた。

松華の來會は保にも知られて居なかつたので、彼も少からず驚きながら、村井氏は今晩一たい何を演るだらうかとしきりに好奇の心を湧かした。が、それと同時に拂へども拂へども力強くもどつてくる不安を感じないでは居られなかつた。

『恐らく人々の意表に出る計畫がめぐらしてあることだらう。だが果して豫定どほりにその計畫は遂行されるであらうか』

彼は人々にまじつて長い廊下を歩む間、ともすれば脚が顫へて、走り出したいやうな衝動に驅られた。

十二疊の室には五十燭光ぐらゐの電燈があかるく、室内の人と物とを照して居た。床の間には誰の筆になるのか、『二河白道』の繪がかゝつて居た。左に火の河、右に水の河、その二つの河を境して一本の細い白い道が横たはる。その白道の上を一人の亡者が、こちらの岸からむかふの岸へ渡らうとして居る。むかふの岸には五彩の雲がたなびいて光明十方に普ねき阿彌陀如來が出現したまひ、こちらの岸には火龍、虎狼の群及び鉾を携へた魔性の人物が亡者の後を追はうとして居る。保はこの繪が何を意味するかを知らなかつたが、炎々たる焰、まん〳〵たる水に迫られて居る亡者の姿に一種の

恐怖を感ぜざるを得なかつた。

亡者！　さうだ。その亡者の眞似をしようとして、村井喜七郎氏は今座敷の中央に据られた棺の中に座を占めて居るのだ。普通の棺桶ならば白木の板であるべき筈であるのにこれはまた一種異樣な體裁を具へ、一寸見たところ、あの奇術師の用ひる「不思議なトランク」を思はせるやうなものであつた。通常の棺桶の代りにかやうな、棺桶が用ひられて居るのは、何か其處に村井氏の計畫が潜んで居るにちがひなかつた。さればこそ、人々を案内した奇術師松華は、棺桶のそばに近寄るなり、その蓋――それも普通の棺桶のそれとちがつて、トランクの蓋のやうに作られて居た――に手をかけたのである。さうして松華の少女弟子二人はさも意味があるといはんばかりに、彼女の後ろにぴつたりと控へた。

棺桶の中には村井喜七郎氏が經帷子とは見えぬ白無垢の衣裳をまとひ脚を折り、手に珠數をかけて桶にもたれながら唇に微笑をうかべ、大きく瞬をして、いかにも氣樂さうな樣子で、はいつて來る人に輕く目をもつて會釋し、一言も發することなしにうづくまつて居た。保は村井氏の無言で瞬く姿を見て、大聲で叫びたいほどの恐怖を覺えるのであつた。たとひ模擬葬式とはいへ棺桶の中で白無垢を纏まつた人が瞬きをするのは、彼の纖細な神經の堪へられないところであつた。むしろ村井氏が本當に死んで居る姿を見た方がどれだけ恐怖が少いであらうかと思つた。

眞實の葬式ならば、花が飾られ、香が焚かれるのである。けれども模擬葬式であるだけにさうしたものは、その室の何處にもなく、たゞ奇術師松華のつけて居る香水の匂ひが、いやに強く保の鼻を襲ふだけであつた。然し、たとひ香も花もないとはいへ、又、電燈の光があかるくあたりを照して居るとはいへ、沈默から起る恐怖の感が、保に一種の悲しさを植つけないでは置かなかつた。ことに棺桶のうしろに立つて居る二人の僧侶の姿を見て、彼は泣きたいやうな衝動にかられた。

東圓寺住職友田覺遵師は緋の衣に水色の袈裟をかけ、右手に中啓を持ち、左手に珠數をかけ床の間に背を向けて棺桶の頭部に立つた。續いて伴僧の山場了諦が黑の衣に白の袈裟、左手に「リン」を持ち、右手に小さな棒をもつてつゝ立つた。松華によつて案内された客は、松華の無言の指圖によつて棺桶をなるべくせまく取り卷いた。保は住職と松華の間に立つたが、恰度自分のむかひに、彼の一番嫌ひな押毛が立つて居たので、言ふに言へぬ氣味の惡さを感じた。さうして早くこの陰氣な場面が經過してほしいと思つた。模擬葬式さへすめばあとは極めて樂しい場面となるのだ。さう思ふと、一層時間のたつのがもどかしくなつて來た。氣のせいか、押毛は一種の皮肉な笑をもつて村井氏の顏を見つめて居るやうである。押毛の胸の中には果して何のたくらみも存在せぬであらうか。或は何かおそろしいことを包んで居るであらうか。

容の一同が室にはいりきつてしまつたに拘らず、令孃富子のあらはれぬのが、保には頗る物足らな

かつた。富子は一たい何處に居るであらう。昨日富子と公園を散歩したとき、歸り際に彼女は、あなたはたゞ皆さんのおいでになる時刻においでになればよいといつただけで、その外のディテールに關しては何事も告げなかつた。否、告げられなかつたのである。卽ち今日村井家で行はれることは、富子にもわかつて居なかつたのである。恐らく、富子が模擬葬式の場に出ないのは今晩の豫定の行動の一つであらうが、それにしても彼女の快活な姿が今の保にはしがみつきたいほど欲しかつたのである。

應接室で盛んにはしやいで居た人々は、小咳一つしないくらゐだまりこくつてしまつた。保はこの餘儀なくされた沈默に一種の壓迫を感じ、若し、一二分間餘計にこの沈默が續いたならば彼はきつと『わッ』と叫び出したにちがひなかつた。

が、この沈默は伴僧の叩いた二つの「リン」の音に破られ、續いて、二人の僧侶によつて正信喝の合唱が始まつた。住職はさすがにどつしりした體格をして居るだけ、少しの興奮も見せなかつたが、伴僧は年の若いせゐか、何となく落つかぬ樣子をして居た。

讀經が始まると共に、今まで眼をあいて、周圍に氣を配つて居た村井氏は、眼を閉ぢて死人を裝つた。さうして正信喝が終つて念佛に移る頃には、首ががつくりと前に垂れて、さも〳〵死んでしまつたかのやうに振舞つた。保はその姿を見て、更に新しい恐怖に襲はれた。何といふ氣味の惡いことを

する人であらう。これほどまでに眞に迫つた冗談をしなくてもよいのにと、眼をつぶつてすましこんで居る、村井氏の態度に腹を立てざるを得なかつた。

念佛が濟むと和讃に移つた。

裟婆永劫の苦をすてゝ
淨土無爲を期すること……
讀經の聲は高く澄んで、人々の心に哀愁の情が浮んだ。
……本師釋迦の力なり
長時に慈恩を報ずべし

哀調につれて人々は思はず、棺桶の方ににじり寄つた。見ると村井氏は、人々の哀愁をあざけるかの樣に讀經を子守唄と間違へてでも居るかのやうに、氣持よく眼を閉ぢて居た。或は、ことによると、眞に睡氣を催して眠つて居るのかも知れなかつた。

讀經は最終に近づいた。

願似此功德
平等施一切
同發菩提心

往生安樂國

「リン」が三つ鳴らされた。

と、同時に棺桶の蓋は松華の手によつてバタリとしめられた。保は突然の物音にびくつとして、少しくとび上つた。

普通の人間ならば棺の中の息づまるやうな感じに、何事かを口走るにちがひない。が、さすがに樂天家の村井氏のことゝて棺の蓋がしまつても、何事も言はなかつた。

三十秒

一分！

松華の顔にはにわかに緊張の色が漲つた。彼女は棺桶の方に首をかしげて、恰も中から合圖のあるのを待つて居るかのやうであつた。が、中からは何の物音も聞えなかつた。

二分！

三分！

松華の顔には不安の色が湧き起つた。人々も異常に緊張した。保は手に汗をにぎつた。

時間が一秒一秒たつにつれ、人々の胸には當然の恐怖が起つた。

窒息！

村井氏が窒息の危險に迫られて居るのを見ることは到底堪へられぬところであつた。人々は期せずして、松華に目くばせして早く蓋をあけよと催促した。

松華の心にも同じ恐怖は起つたらしかつた。彼女はもはや我慢がならぬといつた風に、徐々に蓋をあけにかゝつた。

男女の首が一齊に差し出された。

バンドーラ姫がジュピターから貰つた黃金の匣を開いたときも、恐らくこのやうであつただらうと思はれる姿で、松華は棺の中をのぞきこみ〳〵して、蓋を開けた。

保は村井氏の滑稽に充ちた聲の起るのを期待した。が、期待したことは起らなかつた。恐らくすべての人が、各々その期待を裏切られたにちがひなかつた。

中には、先刻の儘の村井氏の睡り姿があるばかりであつた。松華は、恐らく、最も多くその期待を裏切られたのであらう。輕い驚きの叫び聲を發して、つと右手をのばして村井氏の手を握つた。が、次の瞬間彼女は彈かれたやうにその手を引いた。それを見た住職は、その面積の廣い顏面の筋肉を痙攣せしめながら、村井氏の肩に右手をかけ、強くゆすつて、

『村井さん、村井さん』と搖り起した。

けれども村井氏は返事をしなかつた。

人々は期せずして村井氏の名を呼んだ。

保は我を忘れて棺を叩き村井氏をその深い眠りからさまさうとした。

棺の横側にまはつて、村井氏の口元に手をあてゝ呼吸をうかゞつた住職は、

『やッ』と叫んで立ち上つた。その顔を見た一同は、住職が何を發見したかをたゞちに悟つた。伴僧は驚駭のあまり、疊の上にバタリと「リン」を落した。

其處には……その不思議な棺桶の中には、つい今し方までにこ〳〵して居た村井喜七郎氏が眠つた姿そのまゝに、滿六十年を一期として、眞實の死骸となつて蹲つて居るのであつた。

第四章　病める夫人

暫らくの間、十二疊の室には、村井氏の死體を中心として、メタン瓦斯を發生する古沼のやうな沈默が、むごたらしく渦卷いた。電燈の光が段々暗くなつて行くかと思はれるほど、並び居る人々の感覺は、眩暈と痲痺とを併發したやうな狀態に置かれたのであつた。二十數人のものは、たゞ其處に、春をぬき迷ふ土筆のやうに、身動きもせずつゝ立ちながら、息をこらしてひたすらに、棺の中の、眠つたやうな主人公を見つめるばかりであつた。つい今し方まで、氣味惡く瞬いた眼瞼がそのまゝ永遠に瞳に蓋をしたとは誰が信じ得よう。それかといつて眼の前の、がつくり首を垂れたその姿は、誰の

眼にも、生ある人とは思はれなかつた。されば、人々は程度の差こそあれ、それ〴〵はげしい恐怖に舌筋を固ばらせて、誰一人言葉を發するものはなく、リンを落した伴僧は、リンを拾ひ上げることすら爲なかつた。況んや模擬葬式の當初より不吉な豫感に惱まされて居た中澤保は、その豫感が水の中から氷が出來るやうに實現して、まのあたり不吉の結晶を見せつけられたのであるから、もがいでも及ばぬ底無し沼に吸ひ込まれた時のやうに、あだかも全身の血液が今にも水垢のやうに血管の中で凝固しはすまいかと思はれるほどの、恐怖につゝまれたもどかしさを感じたさうして、その感じの中に煙のやうに渦をまいて、彼の理性を司る腦細胞をうづ〳〵刺戟したものは、「押毛治六」の名と、その名を有する當の押毛治六の姿であつた。

彼は、恰もその頭が鉛に化したでもあるかのやうに、重さうにあけ乍ら、村井氏を見つめて居た眼を離して、自分の前方に立つて居る押毛の顔を見た。若し押毛が村井氏の死に關係して居るならば、たしかに勝利の色を讀むことが出來るであらう。若し反對に彼が村井氏の死に少しも關係して居ないならば、人々と同じく驚駭の色を漂はして居るだらう。振り向く途端にかう思つた保は、以外にも、押毛の顔に、勝利の色も驚駭の色もなく、たゞ憤つたやうな固い決心の色のみが漲つて居るのに驚かされた。さうしてその驚きは、恰度その時押毛の發言に伴ふ唇の動きによつて、一層強められたのであつた。

『松華さん』と、押毛は奇術師の方を向いて言つた。『今晩、こゝへお醫者さんが來て見えるのでせう？』

『はあ、たしか離座敷の夫人の病室においでになる筈です』

『すぐ。呼んで來て下さい』

先刻から松華の腰に蝸牛のやうにすがつて居た二人の少女弟子を押しのけて松華は、そのまゝ物をも言はず廊下へ出た。

『あ、一寸』と押毛の金屬性の聲が松華を呼びとめた。『夫人には何も言はないで、殿山先生に大至急來て下さいといつて。わかりましたか』

松華はうなづいて、廊下に出て十二疊の座敷の、もつと先の方へ歩いて行つた。

松華の足音が聞えなくなつてからも、人々はまだ物を言はうとしなかつた。保はいまの押毛の態度によつて、自分の豫想が、何となく裏書されたやうな氣になつて、全身がひやりとした。

突然、再び押毛の聲が走つた。『住職！實に大へんなことになりまして』

住職は先刻から中啓をもつて胸を壓しながら、眼だけを左右に動かして居たが、この言葉にさつと中啓を離して言つた。

『さて〳〵、思ひもよらぬことが出來たものです。一昨日、模擬葬式の相談を受たときに、きつぱり

拒絶したならば、或はかうしたことにはならなかつたかもしれませぬ』

『すると、住職は、村井社長が模擬葬式を行はれたために死なれたとお考へになりますか』

住職は聊かあわてゝ答へた。『さ、それは、もとより、お醫者樣の診斷を待つてからでなくては、何とも言はれませぬが、死ぬ眞似をして本當に死ぬといふことは、よくある世間の習ひ、何事にも世間をあッと言はせようとなさつた村井さんが、平凡な世間の習ひに從はれたのは、定めし無念のことであつただらうと思ひます』

この時廊下にどさ〳〵と足音が聞えて、

『何事が起きたのですか』

と、甚だ取り亂したやうな態度をもつて、松華に伴はれてはいつて來たのは、村井家の家附の醫師殿山六造であつた。彼はまだ三十を越したばかりの、色の淺黑い、あまり風采のあがらぬ、鼻下に短い髭を貯へて、フロックコートを着た小男であつた。

殿山醫師は人々に輕く會釋をして、つか〳〵と棺のそばにより、

『どうしたのです？一たい』

と、誰に言ふともなく言つて、村井氏の手を握つた。

『どうも頓死されたものではないかと思ひます』と、住職は、田螺のやうな眼を力一ぱい開いて

答へた。

醫師は脈を診てから、村井氏の額に手を觸れたが、さすがに、驚きの色を蔽ふことが出來ず。

『をかしいですね。やつぱり死なれたやうですね』と、幾らか顫へを帶た聲で言つた。

『いけませんか。もう助かる見込みはありませんか』と、押毛は少しく急きこんでたづねた。

『もう駄目です。冷たくなつて居るのですもの。それにしても、いつ頃死なれたのですか。もつと早くわからなかつたのですか』

『さあ、それがよくわかりません』と押毛は言つた。『先刻、讀經の始まる前まではたしかに生きて居られたのですが、讀經の半に眼をふさいだまゝ、いつの間にやら死んで行かれたやうです』

『不思議ですねえ』と、醫師は首をかしげて言つた。『顏をしかめるとか、又は唸り聲を發するとか、さうしたことはなかつたのですか』

『私には氣がつきませんでしたが、どうです皆さん』と、押毛は人々の顏を見渡した。

然し、誰もそのやうな異常に氣附いたといふものはなかつた。さういふことを氣附き易い婦人連も、たゞ悲しさうな顏付をして居るだけで、何とも答へなかつた。中には、しきりに手巾を眼元に運ぶものもあつた。

『兎に角、このまゝでは十分檢査することが出來ませんから、この箱から吊り出さうではありませんか』

『待つて下さい』と押毛は言つた。『疊の上へ吊り出すのも變ですから、女中を呼んで來て敷布團を敷かせませう』

押毛はつかく〳〵と玄關の方へ歩いて行つたが、程なく、女中のお竹を伴つて來て、隣の室の押入れから敷布團を出させた、お竹は、主人の突然の死にあつても少しも取り亂した樣子がなく、靜かに蒲團を棺桶のそばに敷いた。

『では、どなたか一人、手をかして下さい』

かう言つて醫師が死體の兩脇に手をかけると、傍に立つて居た住職は、伴僧を顧みて、

『おい了諦、お前、足の方を御手傳ひ申せ』と命じた。

リンを落したよゝ拾ふことの出來なかつたほど恐怖に襲はれて居た伴僧は、住職の命令を受けても手を出さうとはしなかつた。

『僧侶に似合はぬ臆病な性質だな』かういつて、住職は、中啓を頸筋の襟にさし、法衣の袖をまくつて、村井氏の膝の下に手をかけ、醫師と二人で持ち上げて、敷布團の白い敷布の上に寢かせた。

『棺桶をどうしませう？疊んでしまひませうか』と、松華は押毛にむかつてたづねた。

『まあ』と押毛は手をもつて制した。『今暫らくそのまゝにして置いて下さい。それよりも社長の着て

居られる衣服を脱がせて下さい』

松華はつか〳〵と歩みよつて、村井氏の手から珠數をとり、村井氏の纏つて居た白い木棉の衣服の一隅に手をかけたかと思ふと、眼にもとまらぬ早さで、引張り取つてまるめてしまつた即ち、その白い衣服は、その實衣服ではなくて、上面から蔽ひかぶせてある布片に過ぎなかつた。

白い衣服が取り去られると、こんどは眼の眩むほど鮮かな緋色の絹の衣服があらはれた。松華は同樣にして、手早く剝ぎ取り、手の中にまるめてしまつた。

その緋色の衣服の下には、羽織袴の村井氏の禮服姿があつた。醫師は羽織の紐を解き、ふくらんだ懷中に手を入れたが、引き出された手には、意外にも一對のまだ買つたばかりの、黑い鼻緒をつけた麻裏草履がつかまれて居た。醫師はそれを疊の上に置き、更に手を入れて、こんどは鳥打帽子を取り出した。

鳥打帽子に麻裏草履！

『ふむ』といひ乍ら、醫師は暫らく手をやすめて考へて居たが、又もや手を入れて、金側の懷中時計と、鰐皮のずつしりした財布とを取り出した。然しそれ等のものは、それ〴〵鎖と黑い絹紐によつて帶に結びつけられて居た。

醫師は着物の胸を開き、更に繻袢を開き、シャツのポケットから、丸藥のケースを取り出した。

『あ、これは、私の差上げた村井さんの持藥だ』

かう低聲で言つて、ケースの蓋を開き、暫らく、手で搖り動かしながら、中の丸藥を檢ためて居たが、再び蓋をして草履のそばに差し置いた。さうして、シャツのボタンをはづし、出來るだけ胸を露出せしめ、ポケットから聽診器を出して、心臟部にあがひて、息をこらして聽くのであつた。

保は先刻から、化石したやうに突つ立つたまゝ、醫師の檢査の一々を恰も海濱の砂の中に落した眞珠をさがすやうな熱心さをもつてながめて居た。白い衣服が取り去られて緋色の衣服があらはれたとき、模擬葬式の後に還曆祝ひをするといひふらした村井氏の言葉をよく理解することが出來たけれど麻裏草履と鳥打帽子を見るに及んで、彼の想像ははたと行きづまつた。

彼はこの小さい、然し乍ら、何か重大な意義をもつて居さうな謎に出逢ふなり、もはや醫師の檢査は眼に入らなかつた。といふのは、彼はこの謎が、何を意味するかを理解し得なかつたと同時に、彼の想像が突然富子の上に及んだからである。

富子は一たいどうしたといふのであらう。模擬葬式の場に來なかつたばかりでなく、今に至るもその姿をあらはさないのは何故であるか。故意にどこかに隱れて居ない限り、彼女は飛んで來て然るべきである。彼女はそれともこの家に居ないのであらうか。急用が出來て外出でもしたのであらうか。彼女は今もなほ還曆の祝ひの後に行はるべきことを樂しみにして居るであらうか。が、この鳥打帽子

と麻裏草履の謎は、恐らく彼女にも解き難いであらう。それにしても、彼女はこの重大な異變を知らないのにちがひない。一刻も早く彼女に逢つて、出來るだけ驚きの少いやうに知らせてやらねばならない。かう思ふと保はぢつとしては居られないやうな氣持になつた。けれども、村井社長の突然の死が、普通の死とちがふことを確信して居る以上その場を去るのは、永久にチャンスを失ふやうな氣がして、焦燥を抑へてそこに止まつた。

突然、保の想像は殿山醫師の聲に破られた。

『いけません。絶望です』

人々は今更ながら異樣な悲哀に打たれるのであつた。

『死因は何でせうか』と、押毛は醫師の顔をのぞきこむやうにしてたづねた。

『よくわかりません』と、醫師は二三度、頭を掉つて答へた。

『窒息では御座いませぬか』と、松華はおづ〳〵しながらたづねた。

『窒息？何か窒息の疑ひを起すやうなことがあつたのですか』

『實は、讀經がすみました時、三つのリンを合圖に、村井さんと生前の御約束通り、棺の蓋をしめたので御座います。さうすると、すぐ中から合圖がある筈でして、合圖があつたら蓋を開くことになつて居りました。ところが合圖がないものですから、つい、三四分間蓋をして居たので御座いますが、

もしやその間に窒息して死なれたのではありますまいか』

『さあ、二三分ぐらゐで窒息が起るとも思はれません』と、醫師は棺をのぞき、更に死體をながめて言つた。『それに、窒息らしい徵候はあらはれて居らぬやうに思ひます。尤も僕は經驗も少いし、それに夜分のことですから、こまかいところがはつきりわかりかねます』

『すると、やつぱり解剖に附せなければなりませぬか』と、押毛は幾分か顔を曇らせて言つた。

『解剖？』と醫師は反問した『こんなことを表沙汰にするのですか』

『さあ、私もなるべくなら、村井家のために事を穩便に運びたいと思ひますけれど』

かう言つて押毛は並居る人々の顔をながめた。

保はこの言葉をきくなり、全身の血液が一時に逆上するを覺えた。

『それはいけないと思ひます』と、彼は干高い聲をふるはせて言つた。『若し、若し、社長が、萬が一にも他人の手にかゝつて死なれたやうなことがあれば、それを明かにするのは社長に對する我々の義務だと思ひます』

『えゝ？』と醫師は叫んだ。『それでは村井さんは誰かに殺されたのですか』

『さあ』と保はどぎまぎして言つた。『それはもとより、まだ誰にもわかりませんけれど、この模擬葬式は、誰が出したともわからぬ死亡廣告が動機となつて行はれたものです。ですから、其處に、疑へ

ば疑ふべき餘地があると思ひます』

醫師はぢつと考へこみ、押毛も默つてしまつた。暫くは一種の殺氣が室内に滿ち渡つた。

『愚僧が口出しするのもをかしいですが』と、住職はどつしりした聲を出した。『どこまでもはつきり死因をわからせた方が佛に對する唯一の供養かと思ひます。どうです親戚のお方々？』

すると、白髯を生やした老人が靜かに口を開いた。『私は村井喜七郎の從兄に當りまして、而も私が一番濃い親戚なので御座います。若し、何か怪しい事情があれば、むろん、表沙汰にすべきでありますが、それについては、先づ、村井の家内と、娘の富子に一應相談して頂くのが順序であると思ひます』

この言葉には、何人も異存がなかつた。

『中澤君！』突然、保は押毛に我が名を呼ばれてぎよつとした。『君は富子孃とは特別の關係がある。將來富子孃と結婚すべき人である、社長がなくなつた今、君は當然、この家の相談役とならねばならぬ人だ。早く離座敷へ行つて、夫人に、異變の次第を告げ、警察へ屆けるべきか否かをきいて來てくれたまへ』

死體の方を向いて居た殿山醫師は、押毛のこの言葉をきくなり、くるりと頭を振り向けて鋭い眼付をしながら保の顔をじろりと見つめた。醫師ばかりでなく、その他の人々も、始めてきくこの言葉に

好奇の眼を輝かせながら、一齊に保の方に視線を投げた。

保はさつと顔をあかくし乍ら、逃げるやうに廊下に出た。彼はあまりに意外な押毛の言葉に前後の考へもなく、廊下へ踏み出したものゝ、さて、自分の使命が、容易ならぬものであることに氣づいて思はずも、離座敷に通ずる渡り廊下の中に立ちどまつた。自分は、如何なる言葉をもつて、夫人に、この恐るべき眞實を傳ふべきであるか、思ひもよらぬ報告によつて夫人の病氣が一層重くなるであらうことを考へると、彼は到底自分の役目を果すに足るべき神經の持主でないことを自覺した。

彼はいつそ引き返さうかとも思つた。けれども、彼は押毛のことを思ふと、引き返して再び押毛に皮肉を言はれたくはなかつた。それにしても押毛は何といふ皮肉な、意地の惡い男であらう。いはゞ彼は先刻押毛の意見に反對したかたきをみごとに打たれたやうなものである。さうだ、押毛は表沙汰にすることを厭ひ、自分はそれに反對したのだ。だから、どこまでも自分は夫人に事情を告げ、夫人の同意を得て、村井社長の死因を明かにしなければならない。かう思ふと、彼は急に元氣づいて、兩足の輕くなるのを覺えた。

けれども離れの一番奥にある病室の障子の前に立ちどまつたとき、さすがに彼は一寸躊躇せざるを得なかつた。彼は手巾を取り出して、額ににじみ出た汗をぬぐひ、ほつと太息をついた。

と、その時、細い聲が室の中から流れた。

『誰？』それは間違ひもなく夫人の聲である。

『僕です、中澤です』と、保は思はず大聲で答へた。

『あ、中澤さん』かういつて起き上らうとする音がしたので、保は、手早く障子をあけた。その時すでに、夫人は半身を起して左の手で支へ、兩眼を光らせて、保のはいつてくるのを待ちまうけて居た。

『中澤さん、良人がどうかしましたか』

いきなり、かうたづねられて、保はすつかり面喰つた。

『實は、實は……』言葉が彼の意志に從はなかつた。

『あゝ』と夫人は崩れるやうに肱をつき、『わかつて居ます。良人は死んだのでせう？　ね？　死んだのでせう？』

『本當に、本當に……』

夫人は保の答を待たずに突然枕に兩手を置き、顏を伏せて身體を搖つた。その時はげしい咳嗽が起つて、半白の珠に結んだ髪の毛がはげしく、上下に躍つた。

保は思はず傍にひざまづいて、その背中をさすつた。

『中澤さん』と夫人の聲は濕つて居た。『良人は殺されたのです。たしかに殺されたのです』

保はぎよつとした。

『かうなることはわかつて居たのです。良人は人手にかゝつたのです』

保はこゝだと思つて、

『ですから、今、あちらでは警察へ屆けようかといつて居るのです』

『警察？』と夫人はむくりと顏を上げた。『警察へ屆けるのですか』

『でも、誰かゞ社長を殺したとすると、警察へ屆けなければなりません』

『あゝ！』と夫人は絶望的の叫びを發した。『仕方がありません、仕方がありません』

かういつて再び夫人は、兩手に顏を埋めた。

保は、何といつて慰めてよいかに迷つた。

『では、早速、その手續をしませう』

かう言つて立ち上らうとすると、夫人は、

『中澤さん。一寸』と呼びとめた。『あなたはきつと、富子と結婚して下さるでせうねえ』

保は思はず顏を紅くした。

『富子はかはいさうな女です。一人娘で、賴るべき兄弟も何もありません。どうぞ、いつ迄も連れ添つてやつて下さい』

『御心配なさつて下さいますな。僕は誓つて……』彼はそれ以上言ふことが出來なかつた。さうしてふと、氣づいて、

『時に、富子さんはどこに居るのですか』

この言葉をきくと、夫人の顔に、急に緊張の色があらはれた。

『え？　富子に御逢ひにならなかつたのですか』

『逢ひません。今晩一度も顔を見ません』

『すると、富子はまだ、良人の死んだことを知らないのですか』

『無論さうだと思ひます。僕は富子さんが、用事でも出來て、何處かへ行つたことゝ思つて居ました』

『いゝえ、六時頃までこゝに居ました』かう言つて夫人は暫らく考へてゐたが、『中澤さん、あなたは今夜、還暦祝のあとであなたと富子の結婚の披露をすることをきいて居ましたか』

中澤ははッと思つた。

『えゝ、昨日、富子さんに内密に聞きました』

夫人は又もや暫らく考へて居たが、急にヒステリツクな聲を出した。

『中澤さん、ことによると富子は……』

あまりに調子のはづれた聲に、中澤は思はず、

『えッ！』と叫んだ。

『……若し、何處を搜しても居ませんでしたら、きつと誰かに誘拐はれたのです……』

かう言つて夫人は、又もやうつ伏して泣き入つた。

第五章　刑事の出張

十二疊の座敷では、保が去つてから、再び沈默が續いて、東圓寺住職のかすかに唱へる念佛の聲が人々の氣分を重たくしたが、やがて押毛は親戚や會社の人々に向つて言つた。

『かうして皆さんに立つて居て頂いても御氣の毒ですから、一先づ別室へ退いて、何か召し上がつて頂くことにしませうか。實はお料理の用意がとくに出來て居るさうです』

『この際、とてもゆるゝ御馳走になつて居る氣は致しません』と白髯の老人が言つた。

『それよりも、序といつては誠に變な言ひ草ですが、これからこゝでお通夜をさせて貰ひたいと思ひます。どうです、皆さん？』

これにはもとより誰も異議がなかつた。そこで押毛は再び室を出て女中のお竹をよんで來て、人々に座蒲團を出させた。住職は伴僧に命じて、佛間へ香具を取りに行かしめ、お通夜にふさはしい準備

をせしめた。

一しきり一座はごて〳〵した。と、そこへ中澤保が離れ座敷から小走りに歸つて來た。先刻眞紅な顏をして出て行つたにも拘らず、今は全く反對に血の氣の失せた顏をして居たので、それを見た押毛は、

『どうした、君？』

とたづねた。

『富子さんが居ないのです』と、保は吐き出すやうに、誰に言ふともなく言つた。

『何？　富子さんが居ない？』と、叫んだのは、フロックコートの殿山醫師であつた。

『何もさう驚くには及ばないではないかね』と、押毛は落つき拂つて言つた。『令孃はきつと、どこかの室に居られるか、或は庭へでも出て居られるのだらう。君、一つ搜しに行つて來たまへ。それはさうと、警察へ屆けてもよいと夫人は仰しやつたかね？』

保は首を縱に掉り、『僕これから、富子さんを搜しに行つて來ます』といつて、今來た反對の方へ去つた。

押毛はこの時、四十あまりの禿頭の紳士に向つて言つた。

『久野さん誠に御面倒ですが、これから門前署へ電話をかけて、刑事の出張を賴んで下さいませんか。私はこれから、臺所へ行つて何か食べ物の用意をさせます。だいぶ時間も經つて、皆さんはお腹がすいたでせうから』

久野といふのはその名を義雄といつて、村井商事會社の支配人であつた。彼は、昔流にいふならば『溫厚篤實の君子』であつて、先刻から、押毛が采配をふつてゐるのを少しも不愉快な顏をせずに見て居たが、今かうして押毛に、いはゞ命令されても不服どころか、却つて、手助けの出來るのを喜ぶかのやうにそゝくさと立ち上がつて玄關脇の電話室に急いだ。

令孃の搜索に當つて中澤保は、とりあへず令孃の居間の襖をあけてその中へはいつた。令孃の居間は玄關を隔てゝ應接室と反對の側にある書生部屋の隣にあつて、中庭を隔てゝ表門に面して居た。室の中には電燈が寂しく輝いて、主のない机や本箱をつめたく照して居た。中澤にとつては、かねてこの室は世界のどの室よりもなつかしいものであつたが、今夜は何となくぞく〳〵するやうな感じを與へられた。これまで時々、富子は押入れの中にかくれて居て突然、襖をあけて『バァ』といひながら中澤をびつくりさせては興がつて居たが、今夜こそ中澤はその『バァ』をどんなに希つたか知れなかつた。

彼は思はず、低聲で、

『富子さん、富子さん』

と二聲呼んで見た。けれども、もとより答へはなかつた。彼はつか〳〵と机のそばに走り寄り、若しや自分に宛てた手紙でもありはしないかと、恐る〳〵机の抽斗をあけて見たが、別にそれらしいものはなかつた。彼が失望して富子の室を出ようとすると、恰度そこへ女中のお霜が通りかゝつた。

『お霜さん、富子さんを知らない？』

お霜はお竹よりも年が若くてうぶであるだけ、村井氏の死に少からぬ心の打撃を受けたらしく、それがよく顔付にあらはれて居た。

『お孃さんが見えませぬのですつてね。をかしいと思ひますわ』

『お竹さんは知らないだらうか』

『知らないと言つて居ましたわ』

『若しや庭の方にでも居ないだらうか』

『もうとつくに庭からお歸りになつた筈ですわ』

『え？　それでは富子さんは庭に出て居たのかい？』

『えゝ、二時間ほど前、裏庭でお孃さまにお目にかゝりました』

『その時、富子さんは何とか言つた？』と、保はせきこんでたづねた。

『いゝえ、別に、たゞ氣分が悪いから、戸外へ出たと仰しやつてゝ、何だか泣いていらつしやつたやうですわ。もつとも暗かつたからよくわかりませんでしたけれど』

保はこれをきくなり、お霜と別れて玄關に出て、靴をはいて中庭に降り、それから建物をぐるりとまはつて裏庭に來た、曇つて居た空がいつの間にか晴れて、陰曆九月十四日の月が中天に懸つて居た八幡山の森が黑雲のやうに前方にはびこつて、肌にしみるやうな夜風が、木の葉をさら〳〵となめた。

保は庭石づたひに、裏庭を横切つて高塀のほとりを歩いたが、もとより富子の姿は發見されなかつた。

『若し、何處を搜しても居なかつたら、きつと誰かに誘拐はれたのです』といつた夫人の言葉が先刻から保の頭を占領した。富子は果して誰かに誘拐されたのであらうか、夫人はどうしてさうした推定をしたのであらうか、あの時夫人に立ち入つた質問をすることが出來なかつたけれども、又質問しても到底言はないであらう、けれど夫人はたしかに何人かに疑ひを持つて居るにちがひなかつた。

誰であらう？　然し、夫人が誰に疑ひを持つて居ようとも、保は、押毛以外の人に疑ひを持つことが出來なかつた、押毛の先刻來の態度は一つ〳〵、彼の疑ひを增さしめたのであつた。

『よし、若し、眞に令孃が押毛のために誘拐されたのであるならば、自分はどこまでも、押毛と戰つて、令孃を奪ひ返さう』

かう決心するなり、保はくるりと後ろをむいてすた〳〵表の入口に歸つて來た。と、恰度その時、門前に自動車がとまつて、中から一人の脊廣服を着たでつぷり肥た男が降りてつか〳〵と門内にはいつて來た。男は保の顏を見るなり、中折れ帽を取つて、

『私は、鹿島恒吉といふ門前署の刑事です、只今、電話で、お招きがあつたから、やつて來ました』

保は刑事の姿を見るなり、アメリカの巡査を思ひ出した。彼は日本人には珍しい體格で、どことなくゆつたりとしたところがあつて、その上一種の滑稽味を帶んだ、髭のない顏の持主であつたから、保は、なつかしいやうな嬉しいやうな感じを起し、叮嚀に自分を紹介してから刑事を案内して、家の中にはいつた。

奥座敷へ來ると、伴僧の焚いた香の煙が靜かにたゞよつて、本當のお通夜の氣分が、室一ぱいに充ちて居た。坐つて居た人々は刑事の入來ときいて膝をなほして急に緊張したが、刑事は興へられた座蒲團の上に無雜作に坐つて中央の死體をながめながら、

『やあ、本當に村井さんは死にましたなあ。先刻、電話がかゝつた時は冗談ではないかと思ひこゝへ來るまで、十分信ぜられなかつたのですが。こりや、やつぱり冗談ではありませんな。昨日の朝でしたか、例の死亡廣告のことでこちらへお伺ひしたら、葬式の眞似事をするのだといつて居られたが、何ですか、葬式の眞似事をして本當に死んだのですか』

かういつて、鹿島刑事は、嚴然として正面に坐つて居る住職に向つてたづねた。

『仰せのとほりです』と住職は聊かまごついたやうな風をして答へた。

『一たい、どんな風にして死なれましたか、どなたか、一つ前後の事情を委しく話して下さいませぬか』

人々が一齊に久野支配人の方を向いたので、支配人は一同を代表して、事の次第を順序正しく述べ立てた。先づ模擬葬式の後に還暦祝ひがあるときいて親戚の者會社の者一同が午後六時半頃に集まつた事、七時に松華によつてこの室に案内されると、村井氏はすでにこゝにある棺の中にはいつて居た事、それから住職と伴僧の讀經が始まると、それまで眼をあいて居た村井氏が眼をつむつた事、讀經が終つてリンが三つ鳴らされると、松華が蓋をした事、然し中から合圖がなかつたので蓋をあけて見ると村井氏の樣子が變つて居た事、それから離れ座敷に居た殿山醫師を呼んで、死體を吊り出して檢査してもらふと、白い衣と緋の衣の下から羽織袴の盛裝があらはれた事、懷の中から烏打帽子と麻裏草履その他のものがあらはれた事、死體はもはや蘇生の見込がなく、而も死因がわからぬから、電話で刑事を呼んだ事、――これ等を比較的簡單に物語つた。

刑事は肥滿した人に特別な、ひゆう〳〵いふやうな呼吸をして、時々手帳に鉛筆で何事をか書き入れながら、默つてきいて居たが、支配人の話が終るなり、

『恰度お醫者さんが來て見えたのは好都合です。どうです、村井さんの死因はやつぱりわかりませんか。』と、醫師に向つてたづねた。

『よくわかりません。』

『お醫者さんにわからなければ我々にもわかる道理がない』と刑事は眞面目顔で言つた。『では當然、解剖といふことになりますがその前に出來るだけ事情を明かにして置く必要がありますから、御迷惑でも、皆さんは私の質問に答へて頂きたいと思ひます』

かういつて刑事は、麻裏草履と鳥打帽子とを取りあげ、更に言葉を續けた。

『いまの御話ですと、模擬葬式の後に還曆の祝ひがあるといふ手筈だつたらしいのですが、この麻裏草履と鳥打帽子は一たい何の意味があるのですか』

この時醫師がつと立ち上がつて死體のそばにより、袴のあたりや敷蒲團の下を頻にさがしにかゝつたので、刑事は不審をいだいて、『どうなさつたのです。何を御捜しになるのです』とたづねた。

『先刻、草履と帽子と一しよに、丸藥のケースを取り出して置いたのですが、それが今見えないのです』と言ひ乍ら、なほあたりを捜したが、ケースはどこにも見つからなかつた。

『をかしいなあ』と醫師はいぶかしげに言つた。

『どういふ丸藥です？』と刑事はたづねた。

『私が處方して、村井さんが持藥として居られた、動脈硬化豫防の丸藥で、たしかに、シャツのポケットから取り出して、こゝへ置いたのです。どなたか御存じありませんか』

然し、誰も知つて居ると答へるものはなかつた。

『無いものは仕方がありません。そのうちにどこかから出て來るでせう』かう言ひながらも、刑事はせはしく手帳に書きこみながら、暫く考へて又言つた。

『それで、模擬葬式と還曆祝ひがすんでから、どんなことが行はれる筈になつて居たのか御存じありませぬか』

先刻から保は、自分と富子との結婚式の祝ひがある筈だつたといふことを言はうか言ふまいかと迷つて居たが、早晩知れることであるからと思つて、その事を刑事につげた。

保の說明をきくなり、ケースの捜索を續けて居た殿山醫師は險惡な顏付をして保を見つめたが、つと立つて自分の席へかへつた。

『いよ〳〵、草履と帽子の意味がわからない』と、刑事は保の說明をきいて言つた『あなたはそれ以上何か行はれる筈だつたか知りませんか』

『存じません』

『ふむ、それにしても結婚式を行ふ人が脊廣服であるとは、をかしいですなあ、殿山さんのやうにフ

ロックコートでも着て居られるなら兎も角』

殿山醫師は苦笑したが、保は笑はなかつた。

『然し、このまんまで來ればいゝといふことでした』

『誰がさういひました』

『令孃の富子さんです』

『なる程、さうすれば、令孃にきけば何もかもわかりますな』

『ところが令孃が居なくなつたのです』

『え？』

『夕方まで居て、それから何處へ行つたか知れなくなつたのです』と、保は聲を顫はせて言つた。

『そりやをかしいですな。今夜は色々なものが見えなくなりますな。丸藥のケースがなくなつたり、令孃が……』

皆まで言はぬうちに人々が輕く笑ひ出したので、刑事は口を噤み、眼をつぶつて、じつと考へこんだ。

『令孃が本當に居なくなつたとしたら捨てゝ置けぬが、そのうちには歸つて來られるでせう。それにしても、何だかかう狐にばかされたやうな、いはゞ魔法にでもかけられたやうなことですなあ』かう

いつて刑事は魔法といふ言葉から、思ひついたと見え、急に松華の方を向いてたづねた。

『松華さん、あなたは一たいどうしてこゝへ來て居るのか。村井さんの親戚ででもあるのか』

『いえ、雇はれたので御座います』と、松華は傍に坐つて居る二人の少女弟子を顧み、更に棺桶の方を見ながら答へた。『この不思議のトランクのやうに見える棺桶は、私たちが舞臺でつかふのとはちがつて、たゞ折疊みが出來る仕掛になつて居るだけです。今晩村井さんは、禮服の上に、緋の衣をかけ、更にその上に白の衣をかけて、棺の中に御はいりになりました。御經さまがしまへて、リンが三つなると、それを合圖にすぐ私が蓋をする。村井さんは棺の中で白の衣をおとりになつて、中から蓋を御たゝきになる。すると私が蓋をあける。それと同時に村井さんが、緋の衣もまとつて立ちあがられる。弟子たちが棺を疊みにかゝると、村井さんがあとへ退かれる。その時私が村井さんの緋の衣に手をかけると、そのまゝ村井さんが拔け出して、衣ばかり私の手に殘るのですが、皆さんの目には、まだ村井さんが其處におるでになるやうに見えます。それから私がその衣を手に疊んでしまひますから、いはゞ村井さんの姿が、皆さんの目の前で煙のやうに消える——といふ趣向を行ふ手筈だつたので御座います』

『ふむ、なるほどそれは珍しい趣向でしたな。然し村井さんのやうな素人が加はつて、そんなに手際よく出來るものかな？』

『出來ますとも。實は今日私は四時頃に伺つて、村井さんに練習をしてもらつたのです』

この時住職が口を出した『その練習を愚僧も拜見したが、村井さんは忽然と消えることができました』

『何でしたら一つあなたを消して見ませうか』と、松華が言つた。

『いや、煙のやうに消えては妻子が困るから遠慮することにしよう』といつて人々を笑はせ、急に眞面目顔になつて續けた。

『冗談は扨措いて、無論消えたやうに見える村井さんはどこかその邊に居られる筈でせうな?』

『隣りの室の廊下においでになるのです』

『それから、村井さんはどうなさるつもりだつたのですか』

『さあ、それから先のことは少しも存じません。私はたゞそこまでやればよいといふことでした』

『住職も御存じありませぬか』

『愚僧も一かう』

『これはいよ〳〵益々をかしいですな。では還暦祝のすまぬうちに姿を消されるといふ譯でしたな。然し、あとで還暦の御祝や、結婚の御祝があるとすると、無論、再び姿をあらはされるつもりだつたでせうが、それにしても、麻裏草履や烏打帽子や、懷中時計や財布の用意がしてあるところを見ると、

一旦は外出せられるつもりであつたかも知れませんな』

かういつて刑事は再びぢつと考へこんだが、やがてまたひとりごとのやうに言つた。『それに、肝腎の令孃が居られなくてはさつぱり事情を明かにすることが出來ません。うむ、さうだ、ことによると令孃と打合せでもしてあつて、どこかへ落ち合ふといふやうな趣向だつたかも知れん。何にしても、こりや、一度、夫人に御たづねして見るのが早道だらう』

かういつてから、刑事が夫人のありかをたづねると、殿山醫師は遮つて言つた。

『今晩、夫人はいつもより氣分が惡く、それに、先刻、こちらから、突然の不幸のおしらせをしたので、きつと悲しんでおゐでになるにちがひありません。ですから、今晩は夫人に御たづねにはならぬ方がよいと思ひます。それに夕方、私は夫人と話しましたけれど、夫人も今晩のことは、やはり委しいことを御存じないやうでした』

保は醫師のこの言葉をきいて、はじめて、醫師がまだ村井氏の死をきいた夫人を見舞はないことを知つた。さうして、急に夫人のあはれな姿を眼の前に浮べ、醫師に夫人の病床を見舞ふやうに忠告しようかと思つたが、その時刑事の聲が彼の心を遮つた。

『殿山さんは今晩いつ頃おいでになりましたか』

『六時半頃に來るつもりでしたが、五時半頃に電話がかゝつて、夫人が少しいつもより氣分が惡いか

らとの事に、すぐ御伺ひ致しました』

刑事はそれから住職の方をむいた。『先刻のお言葉ですと、住職は四時頃におるでになりましたか』

『さうです。伴僧と共にその頃にまゐりました』

『何か村井さんの様子に變つたところはありませぬでしたか』

『氣がつきませぬでした。たゞもう一生けんめいに奇術を練習されました』

『その外、別に變つた人が出入りは致しませんでしたか』

『どうだい、了諦？』と、住職は伴僧を顧みてたづねた。

『ちつとも氣がつきませぬでした』と、伴僧は相も變らず、おづ〳〵しながら言つた。

刑事は何やら手帳の中に書きこんで、暫くの間默つて鉛筆をなめた。

『何が何だかさつぱりわからん』と、彼は吐き出すやうに言つた。『こりや、どうしても、死體を解剖して死因を明かにしなければ、どうも見當がつかん』

保は先刻から刑事の態度をもどかしく思ふと同時に、支配人や他の社員が口を噤んで居るのに少からず焦燥を覺えた。といふのは、彼はこの事件の一切の祕密は、押毛を訊問すればわかると思つたからで、人々が押毛の名を口にしないのを不思議に思つた。

押毛は一たいどうしたであらう。先刻から姿を見せぬのは何故であらう。彼はつひに辛抱がし切れ

ず、支配人に向つてたづねようとすると、又もや、刑事の言葉が彼の心を遮つた。

『いよ〳〵、これは檢事局に通知しなければならぬが、時に松華さん、あなたを雇ひに行つたのは村井さん自身だつたかね？』

『いゝえ、會社の押毛といふ方です』と松華ははつきり答へた。

『おゝさうか。それぢや、その人にきけば、今晩の趣向がわかるかも知れんな。その人はどこに居るだらうか』

『今までこゝに見えましたが、食物の用意をさせるとて、臺所へ行つて居られます』

この時二人の女中が、お茶と餅菓子とを運んで來た。

『押毛さんはどうなさつたね？』と、刑事はお竹にたづねた。

『あの、急用が出來たといつて、二十分ほど前に御歸りになりました』

人々は顔を見合はし、保ははッと思つた。

『逃げたな』と保は思はず叫んだ。

『何？』と刑事がとがめた。

『僕は、押毛といふ人物をどうも怪しいと思つて居たのです』

『それは又どういふ譯で？』と刑事も聊かせきこんでたづねた。

『一方ならぬ社長の信任をうけて、萬事わがもの顔に振舞つて居ました。けれども、僕は彼が必ず何か大きな陰謀をいだいて居ると思つて居ました』

『それは、然したゞあなたの推定に過ぎないのでせう。どうです久野さん』

『もとよりさうとは言ひ得ませんが、社長が會社の事は勿論、內輪のことまで相談なさつて居たことは事實です』

『その人はいつ會社へ雇はれて來ましたか』

『たしか八月の末頃だと思ひます』

『それまで何をして居た人ですか』

『それは村井さんより外誰も知らないのです』

『今どこに住つて居ますか？』

『聞天館といふ公園前の宿屋に下宿して居ります』

『恐れ入りますが、一寸電話をかけて、下宿へかへつたかどうかきいて下さいませんか』

支配人は立ち上つて電話をかけに行つたが、暫らくして、あわたゞしく歸つて來た。

『どうでした？』と刑事。

『宿へきゝましたところ、主人が出て申すに、つい今し方押毛さんから電話がかゝつて、急用が出來

て、當分は歸れないからそのつもりで居てくれとの事でしたと申しました』

『はて』と刑事は言つた。『事件は何だか面倒になつたやうですなあ』

第六章　教室の事變

その日、醫科大學法醫學教室の研究室では、小窪教授が木乃伊製造に忙がしかつた。

木乃伊の製造！　それは別に目新しいことではないが、教授は年來それに力をいれて研究を續けて來た。然し、教授の製らうとする木乃伊は、古代のエジプト人が、バルサムや松脂やその他の樹脂をもつて製造した、あの乾燥した褐色の肉塊とは聊かその趣を異にして居た。卽ち教授は、人間の死んだ時そのまゝの姿、否、その人間の健康時そのまゝの姿を、死體によつて永遠に保たしめる方法を企てたのである。自動的に動きこそせざれ、そのまゝにして置けば生きて居る人間と少しも變らぬ木乃伊を製造しようと、たえず研究を續けて來たのである。

かくの如き研究が、一たい人間の世界にどんな影響を及ぼすものであるのか、換言すれば人生にとつて、利益があるのか又は無いのか、もとより教授以外に誰も知る由がなかつた。恐らく教授自身もそんなことは一かう無頓着に研究の歩を進めて居るにちがひなかつた。すべて學者なるものは、多くは自分の興味に從つて研究を進めるだけであつて、研究した結果が世の中を益するとかせぬとかは、

學者にとつて第二義のものである。若し世間が、人生と直接關係のない研究に沒頭して居るの故をもつて學者をわらふならば、それは世間が大笊棒であることを自證するに過ぎないのである。

小窪教授の木乃伊製造の研究も、教授の好奇心から選まれた題目に過ぎなかつた。けれども研究そのものは可なりの苦心と獨創とを要した。死體の腐敗を防いだり、死蠟を作つたりすることは譯のないことであるけれども、死んだときそのまゝの柔かさに肉體のあらゆる部分を保つて、永久に變色變形させぬといふことは決して容易なことではなかつた。けれども教授は多年の苦心の結果、昨今、漸くその研究の完成に近づきつゝあるのである。ことに死後最も早く變化し易い眼球を生前の儘にたもつことは、最もその苦心を要したところであつて、昨今は、一旦變化しかけた眼球でも、藥液の注射によつてある程度まで、生前の姿にもどすことが出來るやうになつた。

その朝、教授は、千種刑務所で黎明に死刑を受けた女囚の死體を貰ひ受けたので、木乃伊製造に取りかゝつたのである。最も理想的な、いはゞ生きたまんまの木乃伊を作るには、死刑を受けた死體が一ばん適當であつた。何となれば例へば病死した死體は、病氣のためにその肉體が變化を受けて木乃伊もまた病的な相貌を有するものしか出來難いからである。だから教授は、この引とり人のない女囚の死體を貰つて、少からず悅に入るのであつた。

臺上に横はつて居る女は、漆黑の髪と雪白の肉をもつた二十五六の美人であつた。彼女は多くの男

を毒殺したために、死刑を受けたのであるが、かうして死體となつて、罪のない顏をして横はつて居るところは恩怨共にない教授に向つて、美しい繪を見るやうな感じしか與へなかつた。

先刻から教授は藥液の注射に忙がしかつたが、最後に眼球への注射を行つて、黑の研究室衣に包まれた身體を、ほつと一息つきながら伸ばすと、その折、扉を叩くものがあつて、『おはいり』の教授の聲に、つか〳〵とはいつて來たのは、助手の肥後君であつた。

『先生、意外な事件が發生しました』

『意外な事件とは？』と、教授は注射器を下に置いてたづねた。

『たゞ今、村井喜七郎氏が頓死されて、死因に疑はしいところがあるから、解剖に送るといふ檢事局からの電話でした』

これをきいた教授はさすがに少しく、いつもの冷靜な態度を崩した。

『え？　あの村井さんが？』

『さうです。先日死亡廣告を出された村井さんが、昨晩何でも葬式の眞似をして、棺の中で眞實に死なれたさうです』

『それは意外だ！』と教授は顏色を變へて言つた。

『けれども、先生は、あの死亡廣告が悲劇に終ると仰しやつたではありませんか』

『それは、さう言つた』

『いよ〳〵、悲劇に終つたではありませんか』

教授は何思つたか、腕を拱み、眼をつぶつた。

『先生に犯罪方程式を教へて頂いた翌日、第三回の死亡廣告が出ましたので、村井さんが槍玉にあがるとは皮肉だ、と先生と話し合ひましたがこんなに早く犯罪方程式を應用すべき事件が起らうとはまつたく意外でした』

『然し』と教授は肥後君をみつめて言つた。『まだ君、犯罪が行はれたとはきまらぬぢやないか。でもでも、をかしいなあ』

かう言つて再び教授は考へこんだ。

『まあいゝ』と、教授は夢からさめたやうな顔をして言つた。『事情をきけばわかるだらう。死體が運ばれて來たら、解剖室へ入れて、いつもの通り明日の朝九時に始めると、檢事局と警察の人へ告げて置いてくれたまへ』

小窪教授は、習慣として、今日運ばれて來た死體は明日解剖することにして居た。教授の考へによると、解剖の際に先入見を持つといふことはよくないけれど、あらかじめ死體が生じた前後の事情をよく研究して置くことは、解剖の際の觀察をたすけるもので、その方が從來の經驗上遙に、精確な鑑

定を行ふことが出來るといふのであつた。

それ故、村井氏の死體も、當然、明日の朝、解剖されることになつたのである。

その日の午後、教授は自室に肥後君を呼んで言つた。

『君、今まで、門前署の鹿島刑事に、村井氏の死の前後の事情をきかせてもらつて居たよ』

かう言つて教授は、鉛筆で書いたノートを見ながら、刑事の語つたところを殘らず肥後君に傳へた

それは第五章に記載した事柄であつて、鹿島刑事は、あれからすぐ檢事の出張を乞ひ、間もなく檢事が來て、やはり死體解剖によつて取調べを發展せしめるより外はないといふことにきまつたのであるが、令孃はたうとう朝になるも歸つて來なかつたといふのであつた。

『かういふ譯であるから、これだけの事情では村井氏の死因が何であるかは、ちよつと推定が出來にくいだらう？』

肥後君は暫く考へて居たが、やがて言つた。

『自殺といふことは考へられませぬから、自然死か他殺かの二つになりますが、僕はどうも他殺と考へたくなります』

『無論誰でもさう考へる。さう考へたればこそ、その筋の人も解剖でそれをたしかめようとしたのだ。だが、解剖する前に一應死體を見て置かうか』

それから教授は肥後君を伴つて解剖室に入り、解剖臺上に横はる死體の白布を取り除いた。

其處には生前の姿と大差ない村井氏の肉體があつた。

『大へん榮養がよろしいですねえ』と肥後君が言つた。

『六十歳とは思へぬほど皮膚が艶々して居る。どうだね、望診だけでは死因を鑑定することが出來ぬかね？』

肥後君は解剖臺のまはりを二三度まはつて死體を前後左右から觀察したが、

『どうもよくわかりません』

『無論さうだらう、たとひある程度まで推定を下したところが、解剖した結果の精確さには及ぶべくもない』と教授はぢつと死體の顏面を見つめて言つた。

『早く解剖して見たいと思ひます』

『急ぐことはない。それよりも明日の朝まで、先刻話した材料によつて、よく考へることだよ。すべてどんな複雜な事件でも、その核心をつかむと、比較的容易に解決が出來るものだ』

再び死體を白布で蔽つて、教授は助手と教授室にかへつた。

『どうだね、若し村井氏が他殺ときまつたら、犯人の探偵をして見ないかね』と教授は言つた。

『無論やつて見たいです。それこそ、犯罪方程式を應用することが出來ますから』

教授は苦笑した。『犯罪方程式か。犯罪方程式もいゝが、差し當り、君が素人探偵として活動する承認を受けなければならない。鹿島刑事の話によると、令孃と結婚する筈の中澤君が、令孃を探し出すために是非捜索を手傳はせてくれと賴んださうだ。刑事は快く承諾を與へたといつて居たよ。鹿島刑事は、ほんやりしたやうなところがあるが、どうして、なか〳〵しつかりしたものだよ。さうしてその度量が實に大きいから、君が探偵に加はりたいといふなら喜んで承知してくれるだらう。君も探偵小説ばかり讀んで居ないで、一度は實際の探偵に從事し、さうして如何に小説の世界と現實の世界がちがつたものであるかを味ひたまへ』

肥後君の顏はうれしさうに輝いた。『やつて見ます。ことに先生の教を受けることが出來るのですから、なほ更愉快です』

『いや』と教授は遮つた。『折角の仕事を他人に教へて貰つてやつては面白くないよ。先づ自分自身の考へを中心として活動することだね』

『出來るだけやります』

あくる日の午前八時半頃、檢事局や警察の人々が解剖に立合ふべく控室に集まつた。教授は早朝から、昨日の女囚の死體に、引き續き必要な處置を施して居たが、九時少し前になつて、助手の肥後君がはいつて來た。

「先生、解剖室の鍵を貸して下さい。小使が昨晩から、解剖室の鍵を失つたといひますから』

教授はそれをきいて怪訝な顔をしたが、默つて、ズボンのポケットから鍵を出して、肥後君に渡した。

肥後君は、鍵を受取つて、手でひねりまはし乍ら、上機嫌で去つたが、程なく顔色をかへて走つて來た。

『先生ー』といつたきり、あとが言へなかつた。

教授は、肥後君のたゞならぬ姿を見て、驚いてたづねた。

『どうしたんだ君、しつかりしたまへ』

『解剖室の……』

『え？』

『村井さんの死體が……』

『？』

『どこへ行つたかなくなりました』

第七章　死因の説明

肥後君の狼狽に反して、教授は村井氏の死體紛失ときいても、前日肥後君から村井氏の突然の死をきいた程には驚かなかつた。それのみならず教授は、恰もそれが、必然起るべき事變であると思つて居たかのやうな態度をもつて、女囚の死體に必要な處置を施しつゝあつた手を靜かに休めて、肥後君の顔を、一種の輕い笑ひをさへ浮べてながめるのであつた。

『まあ君、そんなに興奮したまふな』と言つたまゝ、教授は急にその場を離れようともしなかつた。

然し、肥後君にして見れば、どうして、これが興奮しないで置かれよう。鑑定死體が紛失するといふことは、肥後君の見聞の範圍では、まさしく前代未聞のことであつた。解剖を終つてからの紛失ならばまだしも、解剖前の死體が紛失したとあつては、法醫學教室の名譽を毀損するばかりでなく、刑事上の責任問題も生ずる譯である。況んや村井氏の死に纏はる一切の疑問が、その解決の鍵を失はねばならぬかと思へば、事は甚だ重大である。

『君、他の室を搜して見たか？』

教授のこの言葉に肥後君の熱した頭は、さツと冷たくなつた。さうして、自分が解剖室から驀地に教授のところへ驅けて來たことを恥ざるを得なかつた。が、肥後君の理性は直にその一時的興奮を抑制した。

『然し、先生、僕は毎朝一度必ず、教授室以外の各室を見まはりますから、若し教授室に死體がありー

ませんでしたら紛失したと見ねばなりません』

『僕の室にも無論ないよ。兎に角、解剖室へ行かう』

二人は連立つて解剖室へ來た。中央の解剖臺上には、昨日あつた村井氏の死體が搔き消したごとくなくなつて居た。たゞ死體の上に掛けてあつた白布が、皺くちやにされて、ぞろりと横はつて居るだけだつた。室の隅の小臺の上に、村井氏の纏つて來た衣服が置かれてあつたが、それはその儘になつて居た。

教授は入口の扉に近いところに立つて、手を組んだまゝ、暫らくの間、じつと考へて居た。

『どうしませうか？』と、肥後君は、教授を促すやうにたづねた。

『どうするつて君、死體がなくては解剖は出來ぬよ』と一種の皮肉な調子をまじへて教授は答へた。

肥後君は、かやうな重大な場合に、皮肉な心持ちになり得る教授の理性を心にくゝ思つた。さうして、教授が、ことによつたら、死體の行方を知つて居るのではあるまいかと疑つても見た。

『死體は果して盜まれたのでせうか』と、肥後君は、さぐるやうな眼をもつて、教授の顔を見つめながらたづねた。

『無論、盜まれたのだらう』と、教授はやはり腕組をしたまゝ答へた。

『すると、村井さんを殺した犯人が盜んだのでせうか』

『いや、そんなに性急に判斷してはなるまい』かういつて、はじめて、教授は組んだ腕をはなした。

『死體が失へた以上、死體を見つけ出さねばならない。これから僕は、檢事局や警察の人たちに事情を話して、一旦引あげて貰ふから、君は僕の室で待つて居てくれたまへ』

肥後君は、立合人たちへの死體紛失の報告を自分に命令されはしないかと、內心びく〳〵して居たところであつたから、教授のこの言葉をきくなり、ほつとして、逃るやうに歩いて、教授室にはいつた。

窓を除く四壁の悉くが、本棚になつて、大小の洋書がぎつしり詰つて居た。肥後君は每度のことながら、珍しさうに近よつて、書物の背革に刻されてある金文字を多大の興味を持つて讀んだ。專門の書籍はいふ迄もなく、文學美術に關するものも可なりに澤山あつた。英、佛、獨は勿論、ロシア語ギリシヤ語の書籍もまじつて居た。

ふと頭をあげると書棚の一つに、キヤビネ型の寫眞が額に入れて、書籍の前に立てかけられてあつた。それは小窪教授と今一人の青年との七分身像であつて、何でも教授が先年世界各國を視察されたとき、アメリカで懇意になり、彼地で色々世話になられた日本人だといふことであつた。肥後君はその寫眞を常になく興味をもつてながめ、頭髪も髭も今とちがつて黑かつた教授の、今よりも一層皮肉に見える顏を見て、教授がアメリカでどんな生活をしたのか知りたく思つた。教授と一しよに寫つて

居る青年も一種の皮肉を帶んだ顏付をして居て、髭のない上唇を輕くねぢらせて居た。

肥後君がいつの間にか教室の事變を忘れ、寫眞を前にして、とりとめのない想像に耽つて居ると、やがて廊下に跫音と話し聲が聞えて教授がはいつて來た。見ると教授は、一人の肥つた背廣服の男を伴つて居た。それは肥後君もよく知つて居る門前署の鹿島刑事であつた。

『どうです、肥後さん。大へんなことが起つたではありませんか』と、鹿島刑事は、その實、大へんなことが起つたとも思つて居ないやうな、例のごとき、にこ〳〵顏をして言つた。

が、この言葉は肥後君の今迄の空想を微塵に碎いて、現實の怖ろしい事變の記憶を甦らせた。

『まつたくです。どうしたらよいでせう』

『さあ、それはやはり、小窪先生の御指圖を願はねばなりませんなあ』

『いや〳〵、死體の行方を搜すのは鹿島君の役目だ』と、教授は意地惡さうな顏をして刑事を見つめた。

『どう致しまして、こんなに色々なものがなくなつては、とても私一人の手におへませんよ』

と刑事は禿かゝつた頭を右手で撫て答へた。『この事件は實に奇妙な事件ですなあ。先づ丸藥のケースがなくなる。令孃がなくなる。次に肝腎の押毛といふ人物がなくなる。それから最後に村井さんの死體がなくなるといふ次第です。いや、うつかりして居ると、こんどは、私のこの大きな身體までがな

くなるかも知れません。はゝゝゝゝ』かういつてから急に眞面目顏になつて續けた。『それにしても、死體がなくなつては死因がわからず、死因がわからなくては、この事件にどこから手をつけてよいかさつぱり見當がつきませんなあ』

『死因はわかつて居るよ』と、教授はきつぱり言ひ放つた。

『え？　わかつて居ますか、ではもう解剖をなさつたのですか』と、刑事は熱心にたづねた。

『まあ、其處へ腰かけたまへ』と教授は二人に椅子を與へ、自分も机の前の廻轉椅子に腰を下して言葉を續けた。『死因は死體を一目見てわかつたよ。肥後君はまだ經驗が淺いからわからなかつたらしいが、あれは、立派な青酸中毒だよ』

『え、青酸中毒ですつて、でも……』と、肥後君が言ひかけると教授は遮つた。

『前後の事情が青酸中毒らしくないと言ふのだらう。さうだ。青酸中毒なら、青酸を服んだ瞬間に死ぬからねえ、然るに村井氏は棺の中へはいつて後も生きて居たばかりでなく、棺の中ではもとより、何物も服みはしなかつたのだ。といふと、鹿島君には或は不思議に思はれるかも知れぬが、肥後君ならば、青酸がこの場合如何なる形で與へられたか、すぐ推定が出來るだらう』

『出來ます』と肥後君は言下に答へた。『消化に一定時間を要する物質で青酸を包んで服めば、服んでから一定の時間を經なければ死ません』

『その通りだよ』と、教授は兩眼を輝かして言つた。『恐らく村井さんの場合にも、同じやうな事が行はれたにちがひない。青酸をさやうな物質で包むといふことは通常不可能だから、恐らく青酸加里か或は青酸加里と酒石酸ぐらゐが別々に包まれて居たのだらう。まつたく、青酸中毒以外には、衆人環視の場で、誰人にも氣づかれず、生から死へ移ることはあり得ない』

『そのやうに毒藥をある物質でつゝむといふのは、一たいどんな風にするのですか』と鹿島刑事がたづねた。

『あ、さうだ、君にはわからぬのも無理はない。つまり、青酸加里を中心に入れて、普通の丸藥を作ればよいのだ』

『それでは、通夜の場でなくなつたケースに、毒の丸藥がはいつて居たのでせうかな?』と、刑事は聊か興奮の色を見せて訊ねた。

『それはまだ何ともいへないだらう』

『さういふ丸藥は素人でも手に入れることが出來ますか』と、刑事は熱心にたづねた。

『そりや君、素人だつて手に入れることが出來なくはないよ。そら、君も知つて居るだらう。昨日の朝、千種刑務所で死刑に處せられた雲井龍子を。彼女の死體を教室へ貰ひ受けて今別室にあるのだが彼女が毒殺に用ひた毒藥は、やはり、青酸加里と酒石酸の丸藥だつたよ』

『あの雲井龍子がこの教室へ來ましたか』と、刑事はいよ〳〵熱心な口調になつた。『彼女の使用した毒藥は、世間の者が眞似をするといけないといふ理由で、わざと發表されませんでしたが、さうですか、さういふ丸藥を使つたのですか。何しろ彼女は何の動機もなくて、數人の男を殺したのですから、警察でも久しくわからなかつたといふことですな。たしか彼女には兄が一人あつて、これも彼女に劣らぬ惡人だといふことですが、何處へ行つたか行方不明になつて居るさうです』

教授は何思つたか、極めて嚴肅な顏をして言つた。『惡人、惡人といふけれども、人間には本來、善惡の區別はないよ。同じ行爲でも、時代とその周圍の狀態如何によつて、善とも判斷され、又惡とも判斷されるのだ。だから、善惡に對する考へは昔の人と今の人とで、明かにちがつて居るばかりでなく、同じ時代でも、各人が場合によつてその解釋を異にして居る。早い話が、個人を殺すことを極惡と考へながら、戰爭で澤山の人を殺すことは、それほどに思はない。雲井龍子もローマ時代に西洋に生れたならば、かの、ロークスタのやうに國家にとつて至勳の女となつたかも知れない。怖ろしいものは殺人行爲ではなくて、各人の持つて居る殺人意志だ。見たまへ、刃物を持ち得ないものは、舌や筆をもつて人を殺さうと計畫するではないか。だからこの世に惡人はめつたにないよ。つまりみんなが惡人なのだから』

肥後君は、鑑定死體を盜まれながら、少しも心を惑亂せしめないで、このやうな冷靜な議論をなし

得る教授の態度に、驚異の念を起さゞるを得なかつた。鹿島刑事はと見ると、教授の言葉に耳を傾けて居るやうでもあり、又何か頻に考へて居るやうでもあつた。實際家たる鹿島刑事は、恐らく、教授の理論をきくよりも、如何にしてこの事件の解決に着手すべきかを考へて居るのであらう。すると、果して鹿島刑事は、ポケットから手帳を取り出しにかゝつた。

然し、教授は依然として話を續けた。『ね、肥後君、君は探偵小説が好きだが、君に限らず一般の人が探偵小説を好む理由は、つまり、各人に具はつて居る殺人意志を和げる爲だよ。舊式な言葉で言ふならば、探偵小説によつて殺人慾を滿足させようとするのだ。だから探偵小説の中でも、殺人を取扱つたものが最も多く讀まれるのだ。從つて探偵小説の愛好者は實際の所謂惡事を行はない。換言すれば所謂善人なのだ。ね、鹿島君、さうぢやないか』

刑事は呼びかけられて、はッと我にかへつたらしかつた。『さうでせうなあ。探偵小説愛好者は恐らく皆善人でせう。その證據に、探偵小説を愛讀する人が實際の探偵に從事すると、多くは見當はづれのことをしますし、又、反對に、犯罪を計畫しても、手ぬかりばかりするやうです。犯罪映畫を見て犯罪を行ふ少年などは皆へマばかりして居りますよ。少年に限らず大人でもさうだらうと思ひますが』

『どうだ肥後君、隨分手きびしい言葉ぢやないか』かういつて教授は肥後君の方を向き、肥後君が返

事をしない前に更に鹿島刑事の方を向いて言つた。『實は鹿島君、肥後君が今度の事件の捜索を手傳はせて貰ひたいと言つて居るのだ。差支のない限り、面倒を見てやつて下さらぬか』

刑事は頭を掻いて笑ひながら言つた。『いや、さうと知ればあんなことを言ふのではなかつた。肥後さん、今の言葉は取消しますよ。差支などちつともありません。喜んで御手傳ひを願ひます。中澤保さんも富子さんの行方を捜したいとの事でしたから、その方面で御手傳ひを願ふことにしました。中澤さんといへば、もう彼此こちらへ來ることになつて居ります。お互によく相談して事件の眞相をさぐることにしませうか』

肥後君は輕く腰をかゞめて、鹿島刑事の好意を目謝した。

『そこで』と刑事は續けた。『いよ〳〵村井さんの死が青酸の中毒ときまれば、過失によつて丸藥をのんだか、或は、自殺のつもりで故意にのんだか、或は他人にのまされたか、三つの事情のうちのどれか一つでありますから、村井さんの死の前後の事情を明かにして、このうちのどれであるかをきめねばなりませんな、模擬葬式の當夜取調べたところによると、どうも自殺とは考へられませぬから、過失か他殺でなくてはなりますまい』

『丸藥のケースの紛失といひ、死體の紛失といひ、當然他殺と考へて然るべきではありませんか』と肥後君は言つた。

『なるほど、あなたもさう御考へになるのですな？　毒を村井氏の常用丸藥の中へ投じた犯人が、發覺をふせぐために、ケースと死體をかくして死因を不明ならしめたといふことは、まことに、ありえ得べきことです。然し、村井氏の死因が小窪先生によつて、このやうに容易に鑑別されたのですから、若しケースを果して犯人がかくしたものと假定し、又、死體も同一犯人が盗んだものとすれば、この犯人は隨分無駄なことをしたものと謂ふべきですな』

『ケースと死體を同日に談ずるのは少し大膽過ぎる』と、小窪教授は、皮肉な笑ひを浮べて言つた。

『ケースはポケットの中へはいるけれど、死體は稍嵩が大きいからね』

『まつたくです。死體は袂の中へははいりません』と、刑事も笑つて言つた。『ですけれど、死體は寶石などとちがつて、大金を出して買ふ人もめつたにありますまいから、よほど重大な理由がなくては盗まないと思ひます。單なる惡戯や冗談にしては、少し大膽過ぎて居ると思ひますが』

『然し、こんどの事件は、惡戯や冗談が重なつて居るではありませんか』と、肥後君は口を出した。

『死亡廣告といひ模擬葬式といひ、奇術師の出現といひ……』

『けれど、村井氏の死なれたことだけは冗談ではないやうですよ』と、刑事は肥後君の言葉を遮つたが、俄に頓狂な聲を出した。『それとも村井氏は冗談に死んで、今頃は生かへつて、どこかに隱れて居られるのかな』

この言葉に教授も肥後君も笑つた。と、その時、小使がはいつて來て、

『中澤保といふ人が鹿島さんに逢ひたいといつて、只今來られました』といつた。

『かまはぬから、此處へ來て頂け』と、教授は小使に命じた。

第八章　脅迫狀

小使に案内されてはいつて來た中澤保は、何となく落つかぬ樣子をして居た。彼は一昨夜來の心勞のために、十分な睡眠をとらなかつたと見えて、上眼瞼が心臟患者のそれのやうに輕く腫れて、幾分か頰がこけて見えた。

三人に目禮するなり、彼はいきなり鹿島刑事に話しかけようとしたので、刑事は、立ち上つて教授と肥後君を紹介し、二人の前では、どんなことを話してもよいことゝ、肥後君が探偵に從事されることになつたから何事もお互に相談して行動したいといふことを話し、最後に、村井氏は青酸中毒の爲に死なれたことはわかつたけれど、村井氏の死體が、解剖されぬ前に、昨晩中にどこかへ紛失したことを告げた。

『えゝつ、社長の死體が盗まれたのですか。いよ〳〵彼奴の仕業だな』と、顏色を變へて吐き出すやうに保は言つた。

その聲といひ、態度といひ、常軌を逸した興奮の模樣が見えたので、小窪教授は眼をまるくして保の顏を見つめた。

『中澤さんは、會社員の押毛治六といふ人を、昨日も御話しましたとほり、今度の事件の中心人物とみとめて居るのですよ』と、刑事は教授に說明するやうに言つて保の方を向いた。『然し何事も性急に判斷するのは當を得て居らぬと思ひますなあ。押毛が果してさうであるとしてもその證據をつきとめる迄は先入見を持つてはなりませんよ』

『證據はこゝにあります』

中澤は聲を顫はせながら、ポケットから、一枚の葉書を取り出した。

『これを御覽下さい。この葉書は今朝こちらへ出かけに受取りました。その文句を讀んで下さい』

かういつて保が葉書を差出すと、鹿島刑事は手早く取り上げて、先づ表面の消印をながめ、次に裏面の文句を讀み上げた。

『中澤君。君はなか〳〵芝居が上手だね。富子さんをかくして置きながら、よくも巧に知らぬ振りが出來たものだ。この葉書がついてから五時間以內に富子さんを家に歸らせたまへ。さもないと君を生かしては置かぬよ』

『ふむ』と刑事は言ひ乍ら、もう一度表面を見た。『名古屋市中央郵便局の消印ですなあ、昨晩出したものだ』

『どうです。このやうな脅迫狀を僕に寄越すものは押毛より他にないと思ひます。自分が富子さんを誘拐して置きながら、僕が富子さんを隱したやうに書いて、あべこべに僕を脅迫するといふのは、實にづう〳〵しいと思ひます。然しこの葉書によつて、押毛が名古屋市內に富子さんを監禁してゐることは明かです』

刑事はじつと文句を見つめながら考へて居たが、

『それでは、これは押毛の筆蹟ですか』とたづねた。

『無論、さうだとは斷言出來ません。自分で書くにしても、わざと手をかへませうし、又、他人に書かせたのかもわかりません』

『けれども、若し、押毛が富子さんを誘拐してこの脅迫狀を書いたとすれば、五時間以內に富子さんを家に歸らせたまへ、さもないと君を生かして置かぬといふやうな文句は書くまいと思ひますが』と刑事は反對した。

『そこが、押毛の狡猾なところです。卽ち、かういふおどし文句を書いて、僕が富子さんを搜索するのを止めさせようとするのです』と、中澤はあくまでも押毛に對する疑惑を捨てようとしなかつた。

『けれども、富子さんの搜索はあなた一人がやるのではありませんから、單にあなたに手をひかせる

ために、このやうな文句を書いたものとは思はれませんなあ。これは一應、考へを飜して、あなたが富子さんをかくしたものと信じて居る人間の發した脅迫狀と見てはどうでせうかな。先生、先生はどう御考へになりますか？』

『さうだねえ』と、小窪教授は眉を寄せて考へながら言つた。『押毛に疑ひをかける前にもつとよく押毛の人物を研究する必要があると思ふねえ』

『實は』と中澤は、先刻肥後君が與へた椅子にはじめて腰を下して言つた。『昨日の夕方、御見舞のために僕は村井家へ行つて、夫人に御目にかゝつたのですが、その時の夫人の御話によつて、ます〳〵押毛を怪しいと思つたのです』

『それはどんな話でしたか』と、刑事は熱心にたづねた。

『一昨日の晩からのことを一應順序正しく申し上げませう』と、中澤は語り始めた。『模擬葬式が終つて、社長が變死されたとわかつた時、それまで何も知らぬ振をして居つた押毛は、お醫者さんの來て居ることをちやんと知つて居て、奇術師に命じて離座敷へ呼びにやりました。それから醫師が來て、愈々變死がたしかめられると、押毛は僕が富子さんと婚約中であることを大勢の前で語つて、僕に向つて夫人へ知らせて來いと命じました。僕は面喰らつてその場をのがれ、離座敷へ行きますと、夫人は早くも僕が社長の死を告げに來たと察して、良人はたしかに殺されたのですと言はれました。それ

から僕が富子さんの居ないことを告げると夫人はます〳〵驚いて、若し何處を捜しても居なければ、富子は誰かに誘拐はれたのですと言はれました。僕は驚いて、すぐさま富子さんの室へ行つて、置手紙でもしてありはしないかと思つて捜しましたが、何も見つかりませぬでした。その時女中が通りあはせて、晩方富子さんが裏庭で泣いて居たと申しましたから、早速裏庭へ出て見ましたが、もとより富子さんは居りませんでした。で、失望して歸つて來ると、ちやうど、玄關であなたに御目にかゝりました』

かう言つて保が鹿島刑事の方を向くと、刑事は輕くうなづいた。教授と肥後君とは、熱心に保の話に耳を傾けた。

保は更に語り續けた。『それから鹿島さんの取調べが始まつて、先づ第一に、丸藥のケースのなくなつたことがわかりました。模擬葬式からお通夜に移るときに、多分ごて〳〵したでせうから、その時紛失したのだらうと思ひますが、その混雜の際無論押毛もその場に居た筈です。さうしてその後間もなく、當の押毛が逃てしまひました。朝になつて僕は一先づ歸宅して布團の中にはいりましたが、中寢つくことが出來ませんでした。だん〳〵心を靜めて考へて見ると夫人の言はれた言葉が、はつきり記憶の表面にうかび出て來ました。さうだ、ことによると夫人は社長を殺した人間を知つて居られるかも知れん。又富子さんを誘拐したのが誰である事をも知つてをられるだらう。これはもう一度夫

人に逢つて、よく事情をたづねて見よう、それが自分の執るべき最初の方法だ。かう思つて一安心すると、いつの間にかうと〳〵と眠つて眼が覺めると、日の暮近くでした。急いで食事をすまして、村井家を訪ね、夫人に逢つてたづねますと、夫人の言はれるには、最近社長が度々夫人に向つて、自分はことによると、殺されるかも知れない。若し自分が死ななければ、富子は人に誘拐はれてしまふかも知れぬと言はれたさうです。で、夫人が誰に殺されるのです。誰に富子をとられるのですときいても、どうしても話されなかつたさうです。でも夫人は社長に絶對に反抗なさらぬ習慣でしたから、心配しながらもそのまゝ暮たのださうです。ところが、先日あのやうに、死亡廣告が出て、それを機會に社長は模擬葬式をやり、そのあとで還暦祝ひをするのだと言ひ出されたので、夫人は涙を流して歎願し、どうか、この際そんな不吉なことはやめてくれと言はれたさうですけれども、社長の性質として、一旦言ひ出したことはやり遂げずには置かれず、還暦祝ひのあとで富子と中澤の結婚披露をするのだと打ち明けられたので、富子さんの結婚は一日も早いがよいと思つて、夫人は、とにも角にも承知なさつたのださうです。ところが連日の心配で、當日、急に病氣が惡くなつて、御醫者さんを迎へねばならなくなり、模擬葬式の間は、とても恐ろしくてならぬから、御醫者さんに傍に居てもらつたのださうです。ところが、七時半ごろ、奇術師があわてゝ醫師を迎へに來たので、夫人ははッと思つて心を痛めて居るところへ、僕が社長の死を告げに行くと、早くも夫人は、社長の平素の言葉が實現

したと悟られたのださうです』

こゝまで語つて保は一息つき、更に語氣を強めて言つた。『そこで、僕は夫人に向つて一たい社長はいつ頃から、殺されるかも知れぬなどといふことを言ひ出されましたかと訊ねると何でも九月になつてからだとの答へでした。押毛は八月の末に會社に雇はれて來ましたから、つまり、押毛があらはれてから、社長は自分が殺されるかも知れぬと言つたり、自分が死なゝければ富子さんは人に誘拐はれると言つたりしはじめたのです、これでも、押毛が、この事件の中心でないと言へますか』

保は興奮のあまり著しくその頰を紅くして、三人の顏を順次にながめた。鹿島刑事は話の途中に手帳を出して何やら書こんだが、教授はその顏面筋をぴりゝともさせずぢつと聞いて居た。たゞ肥後君は、年が若いだけ、保の興奮を幾分か感受した。

『いかにも、押毛が、今回の事件に重大な關係を持つて居ることは明かですなあ』と、鹿島刑事は言つた。『だから一刻も早く押毛のありかをつきとめねばなりませんよ。實をいふと、私も、押毛の搜索が何よりも大切だと思つて二三の部下に命じて昨日から搜させて居るのですけれども先刻こちらへ來るまでには、まだ何の手がかりも得られませぬでした。然し、たつた一つだけ押毛の動靜についてわかつたことがあるのです。それは、一昨夜、會社の久野支配人に、押毛の下宿して居る聞天館の主人が、たつた今、押毛さんから電話がかゝつて當分歸れないと告げたといふことでしたので、押毛がど

こから下宿へ電話をかけたかを交換局で探索させましたら、名古屋停車場前の自働電話だとわかりました』

『えッ、それでは押毛は、富子さんを連て汽車で高飛びしたのでせうか』と、中澤は顔色をかへて叫んだ。

『強ち、さうとは限りますまい。ことに、この脅迫狀を押毛の書いたものだとすると、汽車で高飛びしたとは考へられぬではありませんか』と、刑事は落つき拂つて言つた。

保は聊か判斷に迷つた。停車場前の自働電話を使つたといふことは、汽車に乘つたと考へねばならぬし、汽車に乘つたとすれば脅迫狀を送つたことがよく理解出來なくなる。して見ると押毛は、やはり、汽車で高飛びする風を裝つて、市内に潜伏して居るのだらう。いやどこまでも、づう〳〵しい男だと、結局は、押毛に對する彼の疑惑を深めるだけであつた。で、そのことを語ると、刑事は、

『あなたはよほど、押毛に對して敵意を持つて居ますなあ』と感心したやうな顔付をして言つた。

『中澤さん』と、この時教授ははじめて口を切つた。『とに角、その脅迫狀の文句には警戒しなければいけませんよ。眞實か眞實でないかを判斷するときには、あらゆる、先入見を排しなければならぬ。今回の事件はあなたの考へて居るほど簡單でないかも知れぬ。あなたの推察によると、押毛が村井氏を殺したことになつて居ります。ところがです。村井氏は僕の結論によりますと、毒を中心に含んだ

丸藥を、模擬葬式の行はれる少し前にのんだことになるのです。村井氏は、腦溢血豫防の丸藥を恐らく日に三回宛のんだのでせうから、若し他殺であるとすると犯人は模擬葬式の行はれる少し前に毒を含んだ丸藥をケースの中に入れたと考へねばならない。何となれば、若し二日も三日も前に毒の丸藥を入れて置いたとすれば、村井氏は、もつと早く死んで居られねばなりませんから、ところが押毛は、昨日、鹿島君の話したところによると、模擬葬式のはじまる以前には村井家に居なかつた樣子です。して見ると、押毛が毒の丸藥を投じたとは一寸考へにくゝなるのです』

この教授の說明は、保のみならず他の二人をも驚かした。

『では、押毛は誰かを手先として、毒の丸藥を投じさせたのでせうか』と、保はせき込んで言つた。

『さ、そんなに氣短に結論してはいけません。若し、押毛が村井氏を殺さうとしたのだつたら押毛が手先を使つたといはねばならぬが、さもなくて別の人間が獨立に毒を投じたのかもわからない。けれどもこれは他殺だつたらといふ假定の上の議論に過ぎませんよ。若し假に村井氏が自殺したとすれば一番簡單に解釋がつくではないですか』

言はれて見れば如何にもそのとほりであるけれども、保は容易に自殺說を承認することが出來なかつた。

『自殺する人が、還曆祝ひの用意をさせたり又、麻裏草履や烏打帽子を懷に入れて居る筈はないと

思ひます。尤も、僕と富子さんの結婚披露をするといふのに、奇術師によつて姿を消してもらふといふことは理解が出來ませぬけれど』

『そこですよ。この事件には不可解なことが澤山あるのですよ』と、教授は力をこめて言つた。

『今のところでは、自殺だか他殺だか、或は又過失死だか、さつぱりわからぬのですよ。嚴密にいへば、死體を解剖しないのだから、毒の丸藥說も單なる推定にとゞまるが、青酸中毒による死であることだけは、最もプロバブルだと僕は思つて居ます。しかし、如何に事件が複雜して居ても、眞實は唯一つきりだから、だん〳〵搜索の歩を進めて行けば、必ず一本の大道に到達するでせうが、くれ〴〵もこの、脅迫狀には警戒しなさい』

『警戒します』と保はまだ、奥齒に物のはさまつたやうな態度で答へた。『然し、僕は決して富子さんを隱して居ないのですから、どうにも仕方がありません。たとひ、どんなことが起つても、僕は全力を盡して戰ひ、かならず富子さんを搜し出さずには置きません』

『では、どういふ手段で富子さんを搜し出さうとしますか』と刑事は言つた。

保はこの質問にはたと當惑した。事實、彼には富子を搜し出す計畫が立つて居なかつたからである。

『それは、僕が御たづねしたいと思つて居たところです』と、保は歎願するやうな眼をして言つた。

『さうですなあ』と刑事は考へながら言つた。『押毛の行方を部下に搜させてありますから、押毛の當夜の行動がわかれば、それから、富子さんの行方もわかるかも知れませんよ。で、差當り、あなたはこれから村井家へ行つて、死骸の紛失したことを夫人に告げて下さいませぬか。はなはだ厭な役ですが、やつぱりこの役はあなたでなくてはいけません。私はこれから、東圓寺へ行つて、埋葬の用意を中止してもらひ、それから村井家へ立寄り、ことによると夫人に御目にかゝつて、二三質問させて貰ひます。それがすむと、一しよに門前署へ來て頂きませう。この脅迫狀は私が預からせて頂きます。時に』と、刑事は肥後君の方を向いた。『肥後さんにはさし當り死體の行方を搜して頂きませうか。さうして夕方に門前署へ來て頂きませうか』

『いよ〳〵擔任事項がきまつたね』と、教授はにこ〳〵して言つた。『しつかりやつて吳れたまへ。大いに諸君の成功を祈つて居るよ』

第九章　遺言狀

鹿島刑事と中澤保とは打ちつれ立て法醫學教室を辭し、次いで醫科大學の門を出た。すぐ眼の前の鶴舞公園の中には秋の日光を思ふ存分浴びた子供等が、つい近所に不思議な事件が起つたとも知らず嘻々として遊び戯れて足た。刑事は石門の前で保と別れ、中央線の鐵橋の下をくゞつて老松町をさし

て進んだが、沿道の如何なる物も眼に止まらず、たゞひたすらに事件についての考へをめぐらすのであつた。

鹿島刑事は從來の探偵に最も重んぜられた推理といふことをあまり重要視しなかつた。推理は必要であるけれども、それは平凡人が常識によつて行ふ推理で澤山である。たゞ熱心に根氣よく事件に頭をつきこんで居さへすれば事件は自然に展開して解決の光を見る。といふのが鹿島刑事の主張するところであつた。もとより刑事は、その主張を一度も口に出したことはなく、又、自分の思つてゐることを、はつきり言葉にあらはし得るやうな理論家でもなく、小窪教授の所謂『全人格をもつて活動する』タイプの實際的探偵であつた。

刑事は歩きながら、この事件に關係する出來事の主要なるものを順次に心の中で數へあげた。即ち、村井氏が押毛の入社以後、度々夫人に向つて、『俺は殺されるかも知れぬ。俺が死なねば富子は人に誘拐はれる』といつた事、次に誰の手によつて出されたともわからぬ死亡廣告の事、次に押毛が奇術師を雇ひに行つて、模擬葬式を行ふ最中に村井氏が毒死した事、次に通夜の場で丸藥のケースが紛失した事、次に富子が裏庭で泣いて居てから行方不明になつた事、次に押毛が姿を晦ました事、次に村井氏の死體が法醫學教室から紛失した事、次に富子と結婚すべき筈であつた中澤保のところへ脅迫狀が來た事、かう數へあげてさてこの中から一本の筋道を捜し出さうとすると、刑事ははたと行き詰らざる

を得なかつた。さうしてこれだけの材料だけで事件を判斷するのはもとより危險であると思つた。だが、これ等の材料を通覽して感得されるのは、今回の事件を一つの大きなジョークと見れば見られぬことがないといふことであつた。而も、そのジョークは村井氏の死といふ悲劇に終つたのであるからこの事件の背後には、ある恐ろしい事情が横たはつて居ると考へられるのであつた。何となれば、ジョークをその表面として居る悲劇はつねに、たゞの悲劇よりも十倍も百倍も怖ろしいものであるからである。といつて、今のところ、刑事には、事件の背後に潜んで居る悲劇的事情の片鱗をも認め得なかつた。村井氏の死は一つの悲劇であるけれども、その悲劇を發生せしめた原動力たる悲劇的事情に至つては、その寸毫も明かになつて居なかつた。換言すれば、村井氏の死が自殺であるにしろ、他殺であるにしろ、その動機となる悲劇的事情は少しもわかつて居なかつたのである。

いつの間にか刑事は黑塗の板塀に沿つて歩いて居た。氣がつくとそれは目的地たる東圓寺であつて、塀のむかうに、大きな銀杏の樹が二本、巨大な傘のやうにつゝ立つて、そのむかうに聳ゆる本堂の屋根には、多數の鳩が飛び交して居た。

門をはいると、つき當りが本堂で、その、向つて左手が庫裡の玄關になつて居た。可なり廣い境內には誰一人居らず、あたりはひつそり閑として居たので、來訪をつける刑事の聲が、秋の空氣に、けたゝましく響した。

出て來たのは、一昨夜通夜の場で見たことのある伴僧卽ち東圓寺の役僧たる山場了諦であつた。

『和上はいま裏の墓地に見えますから、墓地へ御案內致しませう』

かう言つて了諦は、其處にあつた下駄をはいて刑事の先になり、本堂の橫をとほつて、裏の墓地に來た。石塔の立ちならぶ間に、ところ〴〵尾花がさびしく招いて、彼處此處に枯れ殘つた手向の華が見ぐるしくちゞこまつて居た。

見ると一ばん奧の、塀の近いところに、住職の友田覺遵師は數人の人夫を指揮して土を堀らせて居たが、刑事の姿を見るなり、つか〳〵とこちらへ歩いて來て、

『やあ、鹿島さん、御苦勞で御座いますな』と挨拶した。

『早速ですが御院主、實は村井さんの死骸が法醫學教室から盜まれたのです』

『え、死骸が盜まれましたつて？』といつたのは、傍に居た了諦であつた。彼はこの意外の報告をきいて何となくそは〳〵し出したので、住職は彼に向つて人夫の監督を命じ、彼が立ち去つてから、聲を低さくして言つた。

『それは大變な事、して、いつ盜まれましたか』

『多分昨晚中に盜まれたこと、思ひます』

『死骸のやうな大きなものさへ盜む人間があるとは。——それでは村井さんの解剖は——』

『無論出來ませんでしたが、原因は……』

といひかけて口を噤み、暫らく考へてから聲をひそめ、

『毒にあたつて死なれたのです』

と思ひ切つて告げた。

『ふむ、毒にあたつて？　それではあの、村井さんが持藥として居られた丸藥の中へ、毒がまぜてあつたのではありませんか？』と、住職は、その田螺のやうな眼を力一ぱい開いて、刑事の顏をのぞきこんだ。

刑事は住職の推定の當を得て居るのに聊か驚いて、住職の顏から何ものかを讀まうとしたが、すぐ、冷靜にかへつてたづねた。

『多分さうだらうと小窪先生は仰しやいましたよ。御院主にも何か御心當りがありますか』

『いえ、なに』といつた友田師の聲はたしかに狼狽の響が伴つて居た。『たゞふと、さうではないかと思つたばかりで』

この時、了諦がつか〳〵近寄つて來て言つた。

『和上、人夫頭が一寸御いでを願ひたいと申して居ります』

住職が去つても了諦は其處に居殘つて居た。彼は住職が土掘人夫と話しかけたのを見るなり刑事の

方をむいて、住職に憚るやうに低聲で言つた。

『刑事さん。一昨夜、あなたが御調のとき、和上は何も知らぬやうに言つて居られましたが、葬式の前々日、村井さんがこちらへ來られたとき、葬式の當夜の計畫を二人でいろ〳〵密談された樣子です』

刑事は了諦の顏をじろりとながめた。恐らく住職に口留でもされたのであらう。それを刑事に話すために、たしかに興奮して居るらしかつた彼の眼は、刑事の視線に逢つて、つと傍の方をながめた。

と、その時住職がこちらへ歩いて來たので、了諦は逃げるやうに、以前のところへ去つた。

『村井さんの埋葬の用意でしたら、一時中止なさつてはどうでせうか』と刑事は住職に言つた。

『それを今、愚僧も人夫たちに話したところでした。いや、どうも村井さんは、重ね〴〵御氣の毒な目にあはれます。まるで、生前に姿をかくす計畫が失敗に終つたので、死後に姿をかくして見せようとて、さういふことをなさつたのでないかと思はれるくらゐです』

『村井さんはそれほど、冗談が御好きでしたか』

『何事でも人の意表に出づることが大好きでした』

『それについて』と刑事は急にあらたまつて言つた。『御院主に御きゝ申したいことがあります。何でも、葬式の前々日に、村井さんがこちらへ見えたさうですが、その時、當夜の計畫について何か御院主に密談されたやうなことはありませぬか』

住職はチラと了諦の居る方に眼をやつて、暫らく考へてから答へた。

『實は內密の相談を受けましたよ。だが、それを御話するまへに一寸念を押して置かなければなりませんぢや』

『どんなことですか』

『村井さんが果して殺されなさつたかどうかといふことです』

『それはまだ確定しません』

『それでは一寸申し上げかねるが……』

『とは又何故です』

住職は返事をしなかつた。刑事はさぐるやうな眼付で、住職の、自分に劣らぬ偉大な體格を見つめながら言つた。

『中毒死ときまつても、過失死か自殺か他殺かは、取調をすゝめなくてはわかりません。けれども、今はそのいづれであるかを決めねばならぬ重大な時機であります。若し他殺ときまれば一刻も早く犯人を搜し出して、村井さんの靈を安んじなくてはなりませんからなあ。どういふ理由があるかは存じませんが、佛のために、今回の事件に關係したことは、腹藏なく話して頂きたいと思ひますが』

刑事のこの言葉に住職はたしかに動かされたらしかつた。

『それでは、故人の意志にそむくことになりますけれど、話しませう模擬葬式の當夜の計畫について
は、一昨夜、あなたが御調になつた以上に、愚僧にも話されなかつたのです。卽ち、模擬葬式の後に
還曆祝ひをやり世間を驚かすために奇術師をやとつて來て忽然として姿を消すといふのでした』
『あ一寸と』刑事は口を挾んだ。『その時令孃の結婚式のことは御話がありませぬでしたか』
『その話は愚僧にも申されず、愚僧ははじめて通夜の場で知つたことです』
『それからどんなことを村井さんは言ひましたか』
『それからが頗る妙な話でした。村井さんの言はれるには、一旦姿を消してから、再ぶあらはれるの
ですが、それがその晩あらはれるか、一日二日たつてあらはれるかわ
からない。又、どういふ姿になつてあらはれるか、それも今は申し上げられない。わざと申し上げぬ
のではない自分にもまだはつきりしたことはわからない。兎に角世間を驚かすに足るあらはれ方をす
る。と、まあざつとかういつた話しでした』
『ところが』住職は刑事が口を出さぬ先に語りつゞけた。『それからの村井さんの言葉が愈よもつて奇
怪なのでした。卽ちこんどのこの計畫は奇拔であるかはりに生命の危いことにも出逢はねばならぬか
も知れない。ことによると自分は殺されるやうなことにならぬとも限らない。萬々一自分が殺された
ならば、自宅の金庫の中に自分の遺言狀が入れてあるから、和上の手で金庫を開いてもらひたい。然

し、自分が殺されたときまらぬうちは決して金庫に手を觸れてもらひたくはない。どうか拙者の今申
し上げたことはかたく守つて頂きたい。かう言つて懷の紙入から封筒に入れたものを取り出し、こゝ
に金庫の符合を書いた紙と金庫の鍵とが入れてあるから、これを和上に御預けして置くといつて、渡
して行かれたのです』
刑事はこの村井氏の奇怪な言葉を傳へ聞いて、不思議な驚きを感じ、すぐに言葉を發し得なかつた。
住職は疊みかけて言つた。『そこで愚僧は何か重大な理由があるにちがひないと思つて色々たづねま
したが、それ以上はどうしても返答されなかつたので、とに角村井氏の賴みをきいたのです。先夜あな
たが皆さんの前で愚僧に御たづねになつたとき、このことを話さうかと思つて見ましたが、殺された
ときまつたらといふ村井さんの言葉があつたので、わざと默つて居たのです。はじめ愚僧は村井さん
が棺の中で死なれたのを見て、さては自殺するつもりであつて、あゝなるのが豫定の計畫だつたかと
思ひましたが、草履や鳥打帽子を懷中して居られたところを見ると、どうやら村井さんが愚僧に言は
れたのが本當で、あの場合に死ぬつもりは毛頭なかつたやうに思はれます』
『いや、よく御話し下さいました』と、刑事はうれしさうな表情をして言つた。『どうやら少しは事情
がはつきりして來ました。けれども、どういふ理由で村井さんが殺されるかも知れぬといはれたの
か、今の御話ではわかりません。それは恐らく金庫の中の遺言狀に書かれて居ると思ひます。で、誠

に恐れ入りますけれど、村井さんの預けて行かれた封筒を渡して頂けませんでせうか。これからすぐ村井家へ行つて開いて見たいと思ひますから』

『承知しました』と、住職は快くうなづいた。『本來ならば、愚僧が立會ふべきでありますが誓ひの破りついでにあなたに御願ひ致しませう。あとで、遺言狀の內容をきかせて頂けばよろしいです。然し、愚僧は法律のことを、少しも存ぜぬが、遺言狀を開くには、親戚の者とか又は裁判官とかの立會を乞はねばならぬことはありませんか』

『さうですなあ』と、刑事は幾分か困つた顏をした。『自筆か又は秘密の遺言狀でありますと、その封は監督判事立合の上でなくては、開いたが最後無效になりますけれど、公證役場で出來た遺言狀ならば、金庫の中にはその謄本があるでせうから、遺言狀の內容を知るには却つて便利です。都合によつては裁判所へ行つてもよいと思ひます』

『兎に角それでは、預かり物を居間へ行つて取つて來ますから、玄關の方で御待ち下さい』

刑事が玄關へ來ると、程なく住職は、白色小型の西洋封筒をもつてあらはれ刑事に手渡した。

東圓寺の門を出るなり刑事は宙をとぶやうに歩いて、八幡山下の村井邸をたづねた。玄關のベルを押すと女中のお竹が出たので、中澤さんを呼んでくれといふと、すぐ奧に走つて行つた。暫くして中澤は刑事を出迎へに來たが、その顏には、たしかに憂色が浮んで居た。

『どうかなさつたのですか』と刑事は靴をぬいであがりながら、心配さうにたづねた。

『夫人は今朝から高熱を發せられたのです。』と中澤はいよ／＼顏を曇らせた。

『それはいけませんなあ。殿山さんに來てもらひましたか』

『先刻女中が電話をかけたら留守ださうで、歸られ次第に行つて頂くと、書生が返事をしたさうです』

『それぢや、村井さんの死體の紛失したことは夫人に御話しなさいませぬでしたらう』

『いえ、僕が御目にかゝると、解剖の結果はどうだつたと頻に御たづねになるので、止むを得ず一伍一什を告げました。けれども、僕の心配したほどに、それをきいて悲しまれなかつたのです』

『何しろ御氣の毒なことですが、無理もありませんなあ。それぢや今日私が夫人に御目にかゝることは差控へて置きませう』

『さうして下さい、頻にさびしがつて、僕に傍に居てくれと言はれますから、御醫者さんの來るまで居て上げようと思ひます』

この時、村井家の親戚の人らしい男が、奧の方から廊下を歩いて來たので、刑事は保と應接室にはいつて對座し、低さい聲で言つた。

『實は、東圓寺住職に逢つて、非常に有力な解決の鍵をもらつて來ましたよ』

『解決の鍵とは？』

刑事が白い封筒をポケットから出して、テーブルの上に輕く投げると、金屬性の音が起つた。

『何ですかこれは？』保は驚いてたづねた。

『村井家の金庫の鍵です』

『どうしてこれが解決の鍵ですか』と保は一層怪訝さうな顔をした。

そこで刑事は住職から聞いた話を殘らず保に傳へた。保は、ます〳〵不審に堪へぬといつたやうな顔をしてきいて居たが刑事が語り終るなり、

『遺言狀があるところを見ると社長は自殺されたのでせうか』

『然し、村井さんは人に殺されることを覺悟されて居たやうですな。夫人に御話しになつたばかりでなく、住職にも話されたのですから』

『殺されると知つて居たら、それを防ぐ方法があつただらうではありませんか。殺されると知つて平然と殺されるといふことはをかしいではありませんか。それはやはり自殺と同じことではありませんか。が、さうなると押毛の行動がわからなくなる』

押毛を犯人と考へて居る保にとつて、村井氏の自殺を結論しなければならぬのは、一種の心のヂレンマであつた。刑事はその心を察して言つた。

『先刻も住職が言つて居られましたが、棺の中で死ぬことは村井さんの豫定して居られなかつたこと

と考へた方が至當のやうです。兎に角これから、その遺言狀を拜見しようではありませんか。さうすれば、恐らく委細がわかるでせう』

保は刑事と共に立ち上つて言つた。『金庫を開くことになると、一應夫人に御話するのが本當ですがまた御心配をかけて病氣を重らせるといけませんから、やめて置きませう。又、親戚の人に立合つて頂くことも、搜索の都合上よくないかと思ひます』

『無論、私たち二人して開きませう。金庫が何處にあるか御承知ですか』

『知つて居ます。このすぐ隣の書齋にあります』

保は刑事を案内して洋式の書齋にはいつた。書齋といつても、書物は小さな書棚の上に書物がほんの申譯にあるだけで、中央に大きなデスクが置かれ、廻轉椅子を隔てゝ、壁の前の金庫と向ひあつて居た。

刑事はデスクの上に立てゝあつた一枚の手札形の寫眞を指して言つた。

『これは誰の寫眞ですか』

保はそれを見て不快な表情をした。

『それが押毛ですよ』

『さうですか。この人ですか』と刑事は取りあげた。『なるほど皮肉な顔をした男ですなあ。かうして

机の上に置かれてあるところを見るとよほど村井さんの信用が厚かつたのでせう。この寫眞は捜索の都合上貰つて置きます。實は昨日、會社の方へ押毛の寫眞を貰ひにやりましたが誰も持つて居られないので、やむを得ず、人相をきいて部下に押毛を捜させて居た譯です』

かう言つて刑事は、押毛の寫眞をそのニッケル製の枠からはづしてポケットに入れ、金庫の前にしやがんだ。さうして、白い封筒の中にあつた紙片を取り出して、そのコムビネーションを讀んだが、それがOBIGEと書かれてあるのに苦笑した。彼はこの文字に從つて調節し、それから鍵を取つて金庫を開いた。

中澤保は先刻から、どんな遺言が見られるかと、背筋の暑くなるほど緊張して居たが、ビシリといふ金庫のあく音がしたとき、どきりと心臓が躍動した。

金庫の中は中央の棚で仕切られて居て、下には寶石類のケースが澤山置かれてあつたが、上の段には唯一個の大型の封筒が置かれてあるだけであつた。刑事は別に興奮した樣子もなく、封筒を取り出したが、見るとその表面には『公正證書謄本』と書かれてあつた。

『これは好都合だ』と刑事は言つた。『これなら裁判官の立合を要しないで、遺言の内容がわかります』

かういつてその封を開くと、美濃紙の赤罫の證書が出た。

刑事は、早く遺言の箇條が見たかつたと見え、第一面に書かれてある遺言者及び證人二名の姓名を讀まぬ先に、中を開いて遺言の箇條を見た。そこには次のやうな文言が記されてあつた。

第一條　遺言者村井喜七郎ハ、若シ不幸ニシテ死亡セシトキ、財産ヲ二分シテソレ〴〵妻浪子及ビ娘富子ノ名義ニ書キ替ヘ富子ヲ家督相續人トシテ指定シ、中澤保ヲソノ配偶者タラシメテ村井商事會社ヲ經營セシムベキ旨陳述シアリ。

第二條　遺言者村井喜七郎ハ此遺言執行者トシテ名古屋市中區老松町三丁目東圓寺住職友田覺遵ヲ指定スル旨陳述シアリ

主要なものはたゞこれだけであつて、あとは東區吳服町四丁目の公證人加藤末造の手續上の文言が書かれてあるに過ぎなかつた。

刑事も中澤も豫期した事情の書かれてないのに失望したが、中澤はさすがに富子との結婚が指定されてあることを喜ばずには居られなかつた。

やがて刑事ははじめて完全に冷靜になつて、第一面を見たが、その時あッと輕い叫び聲を發した。其處には次のやうに書かれてあつた。

名古屋市中區御器所町北丸屋十一番地村井商事會社々長
遺言者　村井喜七郎　慶應二年十一月二十日生

名古屋市東區本町三丁目七番地吳服商
證人　谷村英三　明治三年十月四日生

名古屋市西區新柳町二丁目三番地藥種商
證人　市川長兵衛　文久二年十月十日生

刑事の發した叫び聲に、富子との結婚の夢想からさめた保は、何事が書かれてあるかとのぞきこんだ。刑事は食指をもつて、證人二名の姓名を無言で示した。

保はそれを讀んで、

『はて』といつた。

彼はまだ心が上の空なのである。

『聞いたやうな名ですねえ』と保は口ごもりながら言つた。

刑事はとがめるやうな顏をした。

『聞いたやうなとは少し迂濶ですなあ。谷村さんと市川さんは、村井さんと同じやうに死亡廣告を出された人々でありませんか』と、刑事はさすがに聲を顫はせて言つた。

第十章　死亡廣告主

鹿島刑事の言葉をきくなり、中澤保は愕然として我に返つた。さうして死亡廣告を出された三人の名がづらりと並んで居る有樣を見て、一種の言ふに言へぬ氣味の惡い感じを起した。遺言者とその二人の證人が生前に死亡廣告を出されたといふことは抑々何を意味するであらうか。死亡廣告を出されたこれ等三人は。果して廣告主の誰であるかを知つて居るのであらうか、それとも全く知らないのであらうか、谷村氏と市川氏が死亡廣告の鎗玉に上つたことを知つたならば、村井氏は當然自分の遺言狀の證人の名を聯想すべきである。さうすれば、第三番目に自分が死亡廣告を出されたとき鹿島刑事にその事を話して然るべきである。それだのに鹿島刑事にも話さなかつたらしいところを見ると、三つの死亡廣告は村井氏がその持まへの惡戲氣をもつて出したものであらうか。或は、それとも鹿島刑事は村井氏から何事かを聞いて知つて居るのであらうか。數秒の間にこれだけのことを考へた保は、つと顏をあげて刑事の顏を眺めたが、その時刑事も彼の顏を見て、さぐる樣な眼付でたづねた。

『村井さんはあなたにもしや死亡廣告の出し主を御話しになりはしませぬでしたか』

『聞きませぬでした。僕は今、あなたに、社長がそれについて御話しになりはしなかつたかと、たづねようと思つたところです』

『私もきゝませぬでしたよ。けれど谷村さんか市川さんか、どちらかにきいて見たら、廣告主はわかるかも知れませぬなあ』

『こちらではS新聞もN新聞も御取りになつて居るでせうなあ?』と言つた。

『たしか、兩方とも御取りになつて居ると思ひます。あの三つの廣告を御覽になりたいのですか』

刑事がうなづくと、保は書齋を來て行つたが、凡そ五分ほど過ぎてから、手に數葉の新聞紙を携へて歸つて來た。

『お竹さんが捜してくれて、三つともすぐ見つかりました』かう言つて保が問題の死亡廣告を示すと刑事は、それと罫紙とを見較べて言つた。

『なるほど、谷村さんも市川さんも、それ〴〵誕生日に死んだことになつて居りますなあ。たゞ村井さんだけがさうでないけれど、その代り、十一月二十日の誕生日に因んだのか、十月二十日が葬式の日附になつて居ります』かういつてから、ぢつと考へ、更に言葉を續けた。『やつぱり、この廣告主はこの遺言狀の内容を知つて居ると考へるべきですなあ』

『無論さうでせう』　保は力をこめて言つた。『さうして僕はやつぱり押毛がその廣告主であると思ひます。この遺言狀の内容を知つて居るものは押毛より外にないと思ひます』

刑事は押毛に對する保の反感の相も變らず執拗なことを心の中で苦笑しながらも、保の言ふことにある程度まで同意せざるを得なかつた。

『さうかも知れませんなあ。が、委細は谷村さんか市川さんに逢へばわかると思ひます。今まで谷村さんも市川さんも、少しも廣告主に心當りがないやうに言つて居られましたが、この遺言狀を見せれば、きつと、委しいことを話してくれるにちがひありません。では、一寸電話を拜借して谷村さんか市川さんかに、都合をきいてこれから訪問することにしませう』

刑事はそれから電話をかけて出て行つたが、程なく歸つて來て言つた。

『谷村さんは留守ですが、市川さんは在宅ださうで、御待ちして居るとの返事でした。では、これから、私は市川さんの御宅まで行つて來ます。それでは、あなたは御醫者さんの來られるまで此處に居て、それから、手があいたら、門前署へ來て下さいますか、一しよに押毛の家宅捜索をしたいと思ひますから』

かう言つて刑事は、遺言狀の謄本を折つてポケットに入れ、金庫の扉を閉ぢて歸り支度をした。保は鹿島刑事を玄關まで送り出した。刑事は靴をはいて立ち上つたが、何思つたかその時ポケットから

銀側の大きな懐中時計を出して時刻を見た。

『おや、もう一時過ぎましたなあ』かう言つて、一寸考へ、ポケットに手を入れながら、『時にあなたが今朝、この脅迫狀を御受け取りになつたのは何時でしたか』といつて、皺のついた例のハガキを取り出した。

『たしか、九時頃でした』と保は刑事の心を量りかねて、怪訝さうな顔をして答へた。

刑事はハガキの裏面に眼をやつて言つた。『この葉書がついてから、五時間以内に富子さんを家に歸らせたまへ、さもないと君を生かしては置かぬよ、とありますなあ、もう一時間足らずで五時間になりますよ、何事が起るかも知れませぬから、よく注意して居つて下さい』

『大丈夫です』と、保はにつこり笑つて言つた。『脅し文句などに僕は怖ぢません。どんな敵があらはれようとも、堂々と戰つてやります』

『ですが敵は、思はぬところにあるものですよ。たゞ油斷をしないやうにして下さい。ではいづれ、署の方で御目にかゝります』

刑事は途中で、洋食店に立ち寄つて腹を拵へ、電車で新柳町の市川長兵衛氏の家をたづねた。金看板がいくつも懸け並べてある店先をはいると、藥種の香がプンと鼻を打つた。一人の小僧は直ちに刑事を奥に案内し、やがて、中庭に面した六疊の座敷で、刑事は主人の長兵衛氏と對座した。

『また、例の死亡廣告のことで御伺ひしましたが、今日はきつと、委しいことが聞かせて頂けるものです』

かう言つて、刑事が、ポケットから、村井氏の遺言狀謄本を出すと、長兵衛氏は、暫らくそれをのぞきこむやうにして見て居たが、やがて、その禿頭を右手でつるりと一撫して言つた。

『やあ、いよ〳〵それが出て來ましたか』と、いひながら、煙管に煙草をこめ、せはしく煙草盆で火をつけて、とりあへず一ぷく吸つた。『それが出た以上、今迄申し上げなかつたことを御話しなければなりません。けれども、誰が廣告をしたのかは、今でもわからないです』

『どうか、それではこの遺言狀の出來た當時のことを御話し下さい』と、刑事は相手の顔を、さぐるやうに見つめて言つた。

『さあ、いつでございましたか、はつきりした日は覺えて居りませんが、たしか九月のはじめであつたと思ひます。尤も、その謄本の日附を見て下されば分かりますが、私も都合があつて遺言狀を拵へて置きたいと思つて、吳服町の公證役場へまゐりました。なに九月五日とありますか。さうです、その日です。すると谷村さんと村井さんも、お互に知り合ひの中で、色々話して居るうち、遺言狀には證人が二名要るから、それ〴〵證人になり合はうではないかと、話がきまつて、私の遺言狀には、村井さんと谷村さんが證人になつて下さるし、谷村さんの遺言狀には村井さんと私とが證人になり、村

井さんの遺言狀には、谷村さんと私とが證人になりました。

その日はそれから色々の話をして別れましたが、さて、あの死亡廣告です。最初谷村さんの廣告がS新聞に出たのを見たとき、もちろん、谷村さんは本當に死なれたこと丶思つて、遺言狀が、こんなに早く役に立たうとは谷村さんも考へては居られなかつただらうと、他人ごとならず私も氣味が惡くなりました。ところが、後になつて、あれは誰かゞ惡戯をしたのだと知れたときには、當の谷村さんの驚きはさることながら、私もまたびつくりしました。早速、谷村さんを御訪ねして、誰が廣告を出したか、心當りはないのかと訊きましたが、少しも心當りはないとの事でした。

すると、こんどは私の死亡廣告が出ました。いや、度々申しますが、實に氣味の惡い思ひをしました。が、その時ふと心に思ひ當つたのは、公證役場の一件です。谷村さんが見舞に來て下さつた時、私はひそかに、若や村井さんの惡戯ではあるまいかと言ひました。すると谷村さんの言はれるには、實は私もさう思つた、自分だけ出されたときは、さうとは氣がつかなかつたがあなたも同じ惡戯をされたと知つて、はじめて、惡戯好きの村井さんの仕業でないかと思つた。殊に自分たちの誕生日が死んだ日附になつて居るので、一層その感を深うすると の事でしたけれども、その事を警察へ告げては、お互に遺言狀を作つたことが世間へ知れ、又村井さんだとはつきりわかりもせぬに、それを言ふことは村井さんに迷惑をかけることになるし、それに死亡廣告を出されたとて、別に大した損害も受けな

いし、警察の方で、遺言狀を拵へた當時の事情がわかつた時には話すことにして、それまでは、一切話し出すまいと二人で申し合せたことでした。ですから、あなたのみならずこちらの管轄のお方が谷村さんの方へ御行きになつても私のところへ見えましても、このことだけは申し上げなかつたので御座います。警察のお方どころか、家族の者にも私は一切內密にして居りました。

ところがです。最後に村井さんがN新聞に死亡廣告を出されなさつたと知つたときは、色々の意味でびつくり致しました。さうして村井さんが私たちの廣告主ではないかと疑つたことを恥かしく思ひましました。いくら村井さんでも、自分で自分の死亡廣告を出されるやうなことは、よもやあるまいと思つたからです。これは、多分私たちの遺言狀を作つた當時のことを知つて居るものが、惡戯に廣告をしたのだらうと思ひました。けれども前に申し上げたやうな理由で必要に迫られたときまでは御話は致すまいと決心しました。

すると、昨日の夕刊で、村井さんが、死亡廣告を出されたのを却つてよい機會として模擬葬式を行ひ、そのあとで還曆の祝をなさるつもりであつたのに、棺の中で死なれたといふことを讀み、何だか本當にはならぬやうな氣がしました。でも新聞に出た以上、まさか、嘘ではあるまいと思ひ、御氣の毒に思ひながら、早晩遺言狀があらはれるにちがひないから、その時にはきつと私の方へも御たづねがあるだらうと覺悟して居りました。先刻あなたから電話がかゝつてまゐりました時には、多分村井

さんの遺言狀の謄本が見つかつたのだらうと、内々推察して居たので御座います』

鹿島刑事は長兵衞老人の語るところをぢつときいて居たが、この時少し笑を含んで、

『まさか、あなたがた三人は、お互に申し合せて、自分でそれ〴〵死亡廣告を御出しになつたのではありますまいなあ？』

とたづねた。

『どう致しまして』と長兵衞老人は却つて眞面目顏になつて答へた。『そんな緣起の惡いことを致しますものか、村井さんは惡戯好きなお方ですけれども今申し上たやうに、自分で御出しになるやうなことは、萬々あるまいかと思ひます。ことに村井さんが御死になつて、若しそれが新聞に書いてあるやうに人手の所爲だとすると、誰かにたくまれなさつたのではないかと思ひます』かう言つて更に聲を小さくして言つた。『やつぱり、村井さんは殺されなさつたので御座いますか』

『まだ、はつきりしたことはわかりません。實は村井さんの死體が、解剖される前に、何處かへ消えてなくなりましたから』と、刑事は無頓着に言ひながらも、自分の言葉が相手にどんな影響を與へるかを見落すまいとつとめた。

『え、あの死體が消えて？』と市川氏はさすがに驚いて言つたが、『まさか』と、疑ふやうに刑事の顏を見て言つた。

『本當ですよ』と刑事は事もなげに言つた。『事件は大へん複雜になつて來たのです。だから當時のことを何事も隱さずに話して貰はねばなりません』

『何でも御話致します』

『それでは御たづねしますが、公證役場で、あなたがた三人が御逢ひになつた時、村井さんは一人で來て居られましたか、それとも誰かと一しよでしたか』

『村井さんは、他の男の人と二人連でした』と長兵衞老人は言下に答へた。

『その男はいくつ位ゐでどんな風をして居りましたか』

『さうですなあ、三十少し過ぎぐらゐで、立派な八字髭をはやして、眼鏡をかけ、洋服を着たなかなか風采の堂々たる人でした』

刑事はポケットから、さつき村井家の書齋から借て來た押毛の寫眞を取出し、そのまゝ市川氏の前へ出して、

『この人に見覺えはありませぬか』とたづねた。

市川氏は寫眞を一目見るなり言つた。『今御話したのがこの人です。』

『村井さんはこの男を何といつて紹介されましたか』

『何でも會社に勤めて居る人だといふことで、名前をきゝましたけれど忘れました』

『その時、何か特別な話は出ませぬでしたか』

『と仰しやると？』

『村井さんの遺言の動機について、何か御聞にはなりませぬでしたか』

『いえ、別に。もちろん、遺言狀の内容は公證人から讀んで聞かされましたけれど、どういふことがつたか、今はもうちつとも覺えて居りません』

『それでは、その時、何か特別な世間話しでもなさつたことはありませぬか』

『證書の出來る間、色々のことを話ましたよ』と老人は、當時のことを思ひ出さうとするやうに、小首を傾けながら言つた。『ことにこの人は、いかにも快活に色々のことを喋舌りました。さうですさうです。その時、私と谷村さんとが、どうも近頃は不景氣で困ると話し合つて居ましたら、その人の言ふには、世間の不景氣をなほすことは、なか〳〵むづかしいけれど、個人々々の店を繁昌させるのは譯のないことだ、わたしなら、どんな不景氣な店でも、一朝にして繁昌にして見せるなどと、大氣焰でした。私も谷村さんも、それでは是非一つ、私たちの店を繁昌させて貰ひたいものだと冗談半分に賴みました。今になつて考へて見ると、死亡廣告が出たために世間の注意をひいて、谷村さんの家でも、私のところでも、店が大ぶ繁昌して來ましたから、或はこの人が、死亡廣告を出したのかとも思はれぬではありませんが、若し三つとも死亡廣告を一人の手で出したとすれば、村井さんは別に私

どものやうな店を持つて居られるのではありませんから、あながちこの人だと推定することも出來ません』

『ふむ』と鹿島刑事は寫眞をポケットに入れてから、ぢつと眼をつぶつて考へながら言つた。『いや、よく御話し下さいました。尤も、お話しをきいても、やつぱり誰が死亡廣告を出したかは相變らずわかりませぬが、これで、村井さんの遺言狀に谷村さんとあなたとが證人になつて居られる理由はよくわかりました。で、その時、公證役場には、あなたがたの他に誰も居りませんでしたか』

『公證人と二人の書記と私どもの他には、誰も居らなかつたやうです』

これ以上市川氏にたづねても、村井氏が、何故に遺言狀を書くに至つたか、どういふ理由で、『自分は殺されるかも知れぬ』と言つたかは到底わかるまいと思つて、鹿島刑事は、やがて市川氏の許を辭して廣小路通りへ出た。彼はその足で、本町通の谷村吳服店へ行かうかとも思つたが、先刻村井家から電話をかけた時には留守だといふことであつたし、たとひ谷村氏に逢つたところが、今の市川氏の話以上のことはわかりさうにもないから、刑事は本町通を南へ歩きながら、更にこの事件について深く考へて見た。

疑問の死亡廣告は、どうやら押毛が出したものであるらしいが、若し押毛が出したとすれば無論それは村井氏と相談の上でなくてはならない。先日死亡廣告の件で村井氏をたづねた時、村井氏は如何

にも、寢耳に水のやうに言つて居たが、惡戯好きの氏としては、無論當然な態度といふべきであらう。

で、村井氏が承知の上死亡廣告を出したとすれば、模擬葬式も還暦祝ひも、或はその後に行はるべき『奇怪な出現』云々のことも、死亡廣告を出されてから考へたのではなくて、ずつと前から豫定した行動であるといはなければならない。すると、どうしても、何が故に、さうした數々のことを企てたかといふ疑問に逢着せざるを得ない。單純なジョークとしてはあまりにも根が深過ぎるやうに思はれる。きつとそこに重大な、いはゞ恐ろしい原因が横たはつて居るにちがひない。

然るに、その重大な原因は、今迄の探索ではその片鱗をも窺ふことが出來ないのである。村井氏を除いて、その重大な原因を知つて居さうなのは、たゞ押毛一人であるのに、その押毛は姿をかくして居ない。押毛は果して、中澤の想像するやうに、村井氏の死に關係を持つて居るであらうか、最前市川氏から聞いたことを參照すると今回の計畫はすべて、押毛と村井氏との合議の上で出來たやうに思はれるから、押毛が村井氏の死に關係があるとは考へにくいといはねばならない。

こゝに至つて問題はたゞ一つの點に集まつて來る。それは何であるかといふに、押毛は果して惡人であるか否かといふことである。押毛の素性は村井氏以外に誰一人知つて居るものはないやうであるから、押毛の性格を知るのは甚だ困難といはねばならない。たゞ、講ずべき道は押毛の家宅搜索であつて、今のところ、其處にわづかに希望をつなぎ得るばかりである。

かう考へた刑事は、一刻も早く押毛の家宅搜索に行きたいと思つたが、中澤と約束がしてあるから、一先づ門前署へ歸つて彼を待ち合せ、二人で出かけやうと決心した。

中澤といへば、脅迫狀に示された五時間が過ぎても果して何事も起らなかつたのであらうか、あの脅迫狀には果して何の意味もないのであらうか。と、考へて何となく氣がかりになつた刑事は、立ちどまつて、懷中時計を出してながめた。

『おや、もう四時だ』

思はず呟いて、刑事は歩を早めた。中澤が無事であつてくれゝばよいが。かう思ふと、自分が中澤を村井家に殘して來たことが頻に後悔された。あの時、自分も醫者の來るまで待つて居て、中澤を連れ立つて來ればよかつたと思つた。さうして、中澤の生一本な性質と、うぶな風采を思ふにつけても、何だか氣の毒なことをして來たやうな感じがして、言ふに言へぬ不安の念が胸一ぱいに廣がつた。後には心配でたまらなくなつて、たうとう刑事は走り出してしまつたのである。

事件が片付いてから、この時のことを回想するたびに、刑事は『蟲の知らせ』といふことが世の中にはたしかにあるものだと思つた。彼は走りながら、自分のこの心配が杞憂に終つて、今頃は門前署に中澤が來て、待つて居てくれゝばよいがとしきりに希望した。

ところが、その希望は裏切られた。中澤は署には來て居なかつた。鹿島刑事は胸を躍らせながら、村井家へ電話をかけると、女中のお竹が出て、あれから三十分ほど過ぎると、お醫者さんが見え、中澤はそれから、村井夫人の藥劑を取りに、お醫者さんについて、一しよに自動車で出かけたまゝ、まだ歸つて來ないといふのであつた。

そこで刑事は、すぐさま殿山醫師のところへ電話をかけた。ところが、先方には誰も居ないと見えていつ迄呼び出してもらつても、電話口へは出て來なかつた。で、今度は村井商事會社へ電話をかけたが、もはや社員はみんな歸つてしまつて、宿直の人の話によると、中澤はその日一度も、社へ顏を出さなかつたとの事であつた。中澤の下宿には電話はなし、また中澤が下宿へ歸る譯はないから、この上何處を搜してよいかわからなかつた。

『なに、そんなに心配するには及ばぬだらう。そのうちにはきつと、こちらへ訪ねて來るだらう』

かう考へて、鹿島刑事が自分の控席につくと、その時、部下の下出刑事が外から歸つて來た。

『どうだ、押毛の行方はわかつたかね』と鹿島刑事は云つた。

『まださつぱりわかりませぬよ。何しろ人相をよく知らぬので、たとひ途中で逢つても見のがしてしまひます』

鹿島刑事はポケットから押毛の寫眞を取り出して云つた。

『これが押毛の寫眞だよ。これを複寫して、みんなに一枚づつ持たしてくれたまへ』

下出刑事は寫眞をとりあげて、じつと見て居たが、やがて云つた。

『この男ですか。私の想像した人相は、やつぱり少し、ちがつて居ました。特徵の多い顏ですから、これならもう見ちがひはありますまい』

かういつて下出刑事が押毛の寫眞をもつて去ると、入れ違ひに給仕が來て、

『たゞ今、醫科大學の肥後といふ方が御目にかゝり度いと云つて來られました』と、告げた。

第十一章　死體の行方

『御別れしてからすぐ搜索に取りかゝりましたが、探偵といふ仕事は、まるで雲をつかむやうなものだといふことが、はじめてよくわかりました』

二階の一室へ案內された肥後君は、鹿島刑事に向つて、村井氏の死體の行方について自分が搜索をした顚末を語りはじめた。刑事はこの言葉に對して何か云はうとしたが、そのまゝ默つて肥後君の物語に耳を傾けようとした。保の安危を氣づかふ心が、まだどこかに殘つて居て、彼の心を重たくして居たのである、西に傾いた秋の日は、斑點の多い壁に當つて、街をとほる豆腐屋の喇叭の聲と共に、暮近い寂しさを漂はせた。

『死體を盜んだ者はどうやら、病院につとめて居る男らしいのですが、それが誰であるかはとんと要領を得ないのです』

『でも、それ迄わかれば大手柄ではありませぬか。どうかその經路をくはしく話して下さい』と、刑事は急に興味を覺えたらしく、その顏を輝かせて言つた。

『僕は先づ、教室の小使が、昨夜から解剖室の鍵を失つたといふ點から搜索をはじめました。小使は二人居りまして　代る代る宿直をするのですが、ゆうべは木村といふのが番をしました。解剖室の鍵はズボンのポケットに入れて持つて居たさうですが、はじめ僕がどうして鍵をなくしたのかとたづねても言ひませぬでした。けれど段々問ひつめて行くと、妙なことを白狀しました。何でもゆうべの九時過ぎに、小使がもう寢ようとしますと、白い手術衣を着た病院の醫員らしい男が、ぶらりとはいつて來たさうです。御承知のとほりこちらの大學では病院と基礎醫學の教室とは廊下續きになつて居るので、醫員たちはよく基礎醫學の教室を訪ねに來ますから、それはちつとも珍しいことではありません。

その男の顏を木村は今迄一度も見たことがないさうですから、勿論名前などは知らず、況んや何科に勤務して居るかをちつとも知らなかつたけれど、いかにも舊知のやうに話しかけたので機嫌よく挨拶をすると、その男は、

『小窪先生は見えないか』とたづねたさうです。

『もう、とつくに御歸りになりました』と、木村が答へると、

『さうか』といつたまゝ、別に歸らうともせず、小使室の椅子に腰をかけたさうです。

それからその男は快活な聲で色々な話をしかけ、しかもなかなか話上手なので、木村も思はず釣りこまれて、長い間お相手をして居ると、しまひにその男は、

『一ぱいやらうぢやないか』といひ出したさうです。

木村も、好きなお酒のことですから、すぐそれに贊成して、その男の命令で、電話をかけ、附近の料理屋から、御馳走を取り寄せて疊の上で食べたのださうです。

それから、だん〳〵醉がまはつて、木村はいつの間にか眠つてしまつたさうですが、ふと寒くなつて氣がついて見ると、時計は二時を過ぎて居て、あたりには誰も居らず、枕元には杯や皿が散らばつて居りました。

多分例の醫員は途中で歸つて行つたのであらうと思つて、あたりを取り片附けようとすると猛烈に頭が痛んだので、そのまゝ床をとつて再び眠つてしまつたのですが、解剖室の鍵をなくしたことは、僕が今朝九時になつてそれを借りに行くまで氣がつかなかつたさうです。

僕は多分その醫員が、木村に酒をのませ、ひそかにその中に麻醉藥を投じて彼を熟睡させ、彼のポ

ケットから鍵を奪つて解剖室をあけ、村井さんの死體を盗み出したのだらうと推定してさて、その醫員は果して病院のものか、又は外部のものが醫員の風を裝つて來たのかを知らうと思ひましたが、小使相手ではさつぱりわかりません。何でもその男は帽子をかぶらずに來たさうですから、院内のものだといへばいひ得るのですけれど、死體を盗み出さうとする計畫である以上、院内のものらしく見えるやうに裝つたと考へることは想像するに難くありません。

木村といくら話し合つても、それ以上のことはわかりませんでしたから、こんどは、果して村井さんの死體が大學の構外へ持ち出されたか、それとも、まだ構内にあるかを調べようと思ひました。醫科大學といふところは死體が一つや二つ殖えたり減つたりしても別に怪しまれないのが常ですから、死體を隱すには屈强な場所であります。それと同時に、病院といふところは、死體を、怪しまれずに、運び出したり運び入れたりするに都合のよいところであります。

で、僕は先づ門衞のところへ行つて、昨夜、いくつ死體が運び出されたかをたづねました。いや、御笑ひになつてはいけません。病院は元來病氣を治すところでありますけれども、最近は少しく解釋を異にして來まして、比較的上手に死なせる所といふ意味を持つに至りました。ですから、大きい病院になりますと、大てい一晩に二つや三つの死亡があるのであります。

で、門衞に聞いて見ましたところ、幸にゆうべ番をした男が居まして、前後三回死體が運び出されたといふのでした。その運び出された時間をきいて見ますと、(といつて肥後君は手帳を出してながめ)十時頃と十二時頃と三時頃とだつたさうです。醫員がついて來て、死亡者だといへば、別に一々取調べないで門をあけることになつて居ますから、ゆうべも、いつもの通りに振舞つたとのことでした。さうして夜分のことであるから、醫員の顏も覺えて居らねば、かつぎ出した人夫がどんな風をして居るかもさつぱり覺えて居ないとの事でしたが、これはまことに無理もないことです。

そこで、僕は、その三つの死體が、どの科から送られたものであるかをしらべました。その結果、内科と婦人科に一つづつ死亡があつたばかりで、その他には、どの科にも死亡がないとの事でした。かう言つてしまへば簡單ですが、この取調べには相當に時間を費しました。さうして、内科の死體が運び出されたのは十時頃、婦人科の死體が運び出されたのは、三時頃だといふこともわかりました。で、殘る問題は、十二時頃に運び出されたのが、どの科の死體かといふことになりますが、これを村井さんの死體だとすれば、恰度うまく說明がつく譯であります。

そこでもう一度、門衞に逢つて、十二時頃に運び出された死體にはどんな人がついて居たかときゝますと、門衞は、暫く考へて居りましたが、

『十時のときと三時のときには、女の人がついて居ましたが、十二時のときは、男の人だけでした』

と、申しました。

『人夫の數は？』

『二人でした。それに醫員と、もう一人若い人がついて居ました』

『醫員は一しよに、門外へついて出たか、それとも、門から引きかへしたかね？』

『何でも一しよについて出られたやうに思ひます』

これで、いよ〳〵その醫員といふのが、教室の木村に御馳走を振舞つた男らしく思はれて來ました。で、その醫員に見覺えがなかつたかとき丶ますと、何しろ、暗い門燈の光りで見たのだからわからなかつたとの答へでした。

これだけのことが知れてから、僕は再び教室へ戻つて小使の木村に、ゆうべ訪ねて來た男の風采や、男の語つたことについて色々たづねましたが、やつぱりとんと要領を得ませぬでした。

そこで僕は、この男と小使とが一しよに酒をのんだ室にはいつて、何か手がかりになるやうなものはないかと隅から隅へ調べましたが、さすがに用心深いその男は、何の手がかりも殘して置きませぬでした。杯や茶碗はすでに料理屋の男衆が持つて歸つたあとですから、その男の指紋を採るわけには行かず、又、たとひ指紋を採つたところが、早速にその指紋の持主を知る手段とはなりませんから、折角、こ丶まで調べあげても、結局は佛作つて魂を入れぬことになつただけでした。

それから僕は、それ以上探偵の歩を進めることが出來なくなりましたので、小窪先生の意見をたづ

ねようと教授室へ行きましたが、先生は不在でした。研究室や解剖室を搜しましたけれど、やつぱり先生の姿は見えませんでした。小使にきいて見ると、先生はたしかに教室内に見える筈だとの事でしたから、再び教授室に行つて見ると、なるほど隅の方に先生の帽子がか丶つて居ました。で、手洗にでもお行きになつたかも知れぬと思つて待つて居ましたが、なか〳〵御見えになりませんでした。

その時ふと、僕は書棚の一隅に、卒業生の記念寫眞帖が數册積んであることを見つけました。これはい丶ものが見つかつた、ことによつたら、件の男はこの大學の卒業生であるかも知れない。さうすれば卒業生の寫眞帖の中からその男を見つけ出すことが出來るかも知れない。かう思つて早速そのうちの二三册をもつて行つて木村に見せましたが、その時はじめて、探偵小説に書かれてあるやうなことは現實ではあり得ないと思ひました。探偵小説ならば、澤山の寫眞を見て、『あつた、あつた、これです』とその中の一つを指すのが普通ですが、どうして、なか〳〵澤山の寫眞の中から、記憶の中の人をさがすことは至難なことです。ことに木村は年をとつて居ますので、どの顏も同じやうに見えるらしく、それに、たとひ卒業生であるとしてもその男がいつ卒業したのかわかりもせず、或はまつたく、別な人間が醫員を裝つて居たのかも知れませぬから、僕はたうとう諦めてしまひました。

それから、僕は、死體が門外に運び出された後、どの方角へ持つて行かれたのかを調べねばならぬと考へましたが、これは到底僕の手では出來ないこと丶思ひ、とにも角にもこれだけのことを報告し

ようと、遂に小窪先生にはお逢ひしないで、とりあへずこちらへやつて來たのです』

鹿島刑事は肥後君の語る間、時々にこり〳〵として、熱心に聞いて居たが、この時うれしさうな顔をして言つた。

『いや、よく調べて下さいました。たしかにその男が死體を盗んだと見做してもよいですなあ。そこで殘る問題は、その醫員風をしたのが誰だかといふことになります。小使が人相をはつきり語り得ないのは無理もないけれど、人相といふものは、こちらから導いてき〻出さねば、たとひ知つて居ても言へぬものです。例へば眼鏡をかけて居なかつたか、黑子が顔になかつたか、金歯をはめて居なかつたか、などとたづねると、存外それを覺えて居るものです。ですから、うまくき〻出したら案外よく、男の人相がわかるかも知れません。あなたが小使に御き〻になつた時、その男は丈が高かつたか低かつたか又、髭を生して居たか居なかつたかぐらゐは御答へしたでせうなあ?』

『それは言ひましたよ』と、肥後君は云つた。『丈は小柄で、短い口髭を生し、色は淺黑かつたといふことです。けれど、これだけの人相の男は、世界にザラにあるではありませんか』

この言葉をきくなり刑事は何か心に思ひ當ることがあつたと見え、

『え、それは本當ですか。何かもうそれ以上にわかつて居りませぬか』と、言葉せはしくたづねた。

肥後君は刑事の興奮にすつかり驚いてしまつた。

『それ以上は知りません。心當りでもおありですか』

刑事はそれには答へないで、疊みかけてたづねた。

『小使の木村はまだ教室に居りますか』

『居る筈です』

『電話をかけてたづねて下さいませんか』

『何をたづねるのです?』

『わたしと一しよに電話室へ來て下さい』

呆氣にとられた肥後君を刑事は引き摺るやうに階下へ連れて來て、電話室にはいり、法醫學教室へかけさせた。

『木村が出ました』と、肥後君は言つた。

『それでは、ゆうべの男は前歯に金歯をはめて居なかつたか、きいて下さい』

肥後君は木村に事情を告げて刑事の言葉を傳へ、その返事をきいて言つた。

『前歯の下歯に金を入れて居たさうです』

刑事は聲顫はせて言つた。『それでは鼻のわきに黑子がなかつたか、きいて下さい』

肥後君は言つた。『向つて右の頰の鼻に近いところにあつたさうです』

『有難う。もう切つて下さい。いや、大へんなことになりましたよ』と、鹿島刑事は平素の落つきをすつかり失つて言つた。

『どうしたのです。一たい誰なのです。何が大變なのですか』と肥後君は面喰つて叫んだ。

『ゆうべ小使のところへ行つたのは、村井さんの家へ出入りする殿山醫師です！』

第十二章　家宅捜索

この言葉をきくなり、肥後君はぎくりとした。暫くの間二人は電話室の前に立つたまゝ顔を見合はせた。

『それでは村井さんの死體を盗んだのは殿山醫師でせうか』と、肥後君は喘ぐやうに訊ねた。

『さあ、それはまだ、何とも言へません。若し、殿山醫師が死體を盗んだとすれば、村井さんの死に關係があると推定しなければなりませんが、今はその動機がちつともわかつて居りません。いや、至く私は今迄少しも殿山醫師を怪しいと思ひませんでしたよ。尤も、今になつてよく考へて見れば、いろいろ怪しいところもありますなあ。毒藥の使用といひ、丸藥のケースの紛失といひ、殿山醫師の所爲とすれば、最も自然に解釋がつきます。それに……』と、刑事は暫らく考へた。『それに先刻電話をかけたところ、殿山醫院は留守なのです。實は、殿山その人は今日村井家をたづねて、夫人を診察し、

二時頃に中澤さんと一しよに自動車で出たのですが中澤さんは藥劑をとりに行つてその儘村井家へ歸らず、又、用事がすんだらこゝへ來る約束になつて居るけれど、いまだに顔を出さぬところを見ると、どうも變だと思ふのです』

『それでは、あの中澤さんの受取つた脅迫狀は、殿山醫師の出したものでせうか』と、肥後君も心配さうな顔をして言つた。

『それを私も案じるのですよ。若しさうだとすると事態は容易ならぬものに思へます』

刑事はそれから何事をか決心したやうに、漸くもとの冷靜にかへつて言つた。

『あなたは二階の室へあがつて居て下さい。これから私は、人を走らせて、殿山醫院の樣子をさぐらせ、序に中澤さんの下宿をたづねさせて見ますから』

肥後君が二階へ上つて待つて居ると、鹿島刑事は程なくしてはいつて來た。もうその時分はあたりが薄暗くなつて居たので、刑事はスヰッチを捻つて電燈をつけ、窓ガラスを閉めて、暫らくの間、室の中を、うつむき加減にあちらこちら歩きまはつて、

『中澤さんは押毛ばかりを怪しいものと思ひこんで居ましたが、こりや少し考へをかへなければなりませんなあ』と、刑事は歩きながら言つた。

『然し』と肥後君は反對した。『押毛と殿山醫師との間に連絡があるものと考へても差支ないではあり

ませんか』

刑事は立ちどまつてぢつと考へた。『そりや、さう考へられないことはありません。實はまだ御話しませぬでしたが、教室でおわかれしてから、色々のことを知りましたよ』

かう言つて刑事は、椅子に腰を下し、今朝法醫學教室を出てから東圓寺をたづねた事、それから遺言狀を發見した事、次で市川家を訪問した事などを順序正しく語つて、最後に言つた。

『さういふ譯ですが、あの死亡廣告は村井さん承知の上で押毛が出したこと丶思はれます。さうして村井さんに摸擬葬式をやらせ、ひそかに殿山醫師に殺させたとすれば、なるほど一應筋道がたゝぬことはありません。けれども、若しさうだとすると、色々の疑問が起ります。押毛は何の爲に逃げたか、令孃は何のために姿をかくしたか、又、あの脅迫狀は何のために發せられたのか、さつぱり解釋がつきませんよ』

『さうですねえ』と、肥後君も考へながら言つた『いよ／＼事件は複雜になつて來ました。然し、小窪先生の仰しやつたやうに如何に事件が複雜して居ても、眞實はたゞ一つきりですから事件の核心をつかめば、すべてのことが、さら／＼と說明がつくと思ひます。今はまだその核心がつかめて居ないだけです』

『事件の核心をつかむことは容易ではありませんよ。事件が自然に發展して、むかうからつかませてくれない以上、こちらからつかむことは恐らく永久に出來ますまい』かういつて鹿島刑事は再び立ち上つて、室の中をあちらこちら歩いた。『この上はたゞ、押毛といふ人物が、どういふ性格であるか、彼が如何なる經歷を持つて居るかを知つて、それによつて、彼が果して、人を殺すやうな男か又はさうでないかを判斷しなければなりません。それには、押毛の家宅搜索をするより外はないです。實は今日、中澤さんと約束して一しよに出かけることになつて居たのですが、いまだに中澤さんは來ませんから、使ひのものが歸り次第、あなたと二人で聞天館へまゐりませう』

鹿島刑事は再び中澤の安危を心配しはじめたと見え、默りこくつて、せはしさうに歩きまはつた。もうその時は秋の日もとつぷり暮れて、電燈の光が、二人の姿を印象派の繪のやうに窓ガラスにうつして居た。

と、突然誰かゞ扉をあけた。刑事はそれを見るなり、少しく興奮してたづねた。

『どうだつた？』

『殿山醫院はみんなが留守で、いくら表のベルをならしても誰も出て來ませんでした』と部下の刑事は答へた。『近所できいて見ましても、誰一人消息を知つて居るものがありません。暫らく樣子をうかがつて居ましたが、誰も出入りをしませんから歸りました。それから中澤さんの下宿へ行きますと、主婦さんが出て來て今朝九時頃にお出かけになつたきりだと言ひました』

刑事は肥後君と顔を見合せ、それから部下の刑事に向つて言つた。

『それでは、これから殿山醫院をづつと見張つて居てくれないか。わしは公園前の聞天館へ行つて、用事が濟み次第そちらへ廻るよ』

『承知しました』

部下の刑事が去ると、鹿島刑事は肥後君に向つて言つた。『中澤さんの安危が氣にかゝるけれども、どうにも仕樣がありませんから、これから聞天館へまゐりませうか。時にあなたはお腹がすきはしませぬか』

『いゝえ、二時半頃に晝飯をたべたので、ちつともひもじくありません』

『それでは家宅搜索を濟ましてから、一しよに食事をしませう』

二人は連立つて階下へ來た。出かけに刑事は村井家へ電話をかけ、中澤が藥劑を持つて歸つて來たかをたづねると、まだお歸りがないので夫人も心配して居られますと、お竹は告げた。

電車に乘つて凡そ七分、二人は聞天館を訪ねて事情を話し、すぐさま押毛の部屋に案內された。案內役の主人は一昨夜以來一度も押毛から電話はかゝらず、又、押毛のところへ電話をかけてよこす者もなかつたことを告げた。

聞天館には日本式の部屋も洋式の部屋もあつたが、押毛はその洋式の部屋を借りて居た。扉には錠

が下りるやうになつて居たので、主人は鍵を出してそれをあけた。室は八疊敷ほどの大きさでリノリウムが敷かれ、その一隅にはベッドが置かれて、その傍に本箱と机と椅子とがあつた。窓ガラスのむかふは中庭になつて居るらしかつたが、電燈があかるいので、よくわからなかつた。

『押毛さんはいつからこゝへ下宿したかね？』と刑事は主人に向つてたづねた。

『たしか八月の末で御座いました』と若いに似合はず白髮の多い頭をもつた主人は答へた。

『それ迄は何處に居たのか知つてるかね？』

『誰がたづねてもそれをちつとも仰しやいませんのです。けれど、非常に快活なお方で、金ばなれがよろしいから、みんなが大切にして居ります』

刑事は肥後君とちらと眼を見合せた。

『どんな人と交際して居たかね？』

『別に親いお友達はないやうで、めつたに訪問客はありませんでした』

『時々外出はしたかね？』

『外出はよくなさいました』

『特別な人から手紙が來たやうなことはなかつただらうか』

『一二度、外國の手紙がまゐりました』

『え？　外國から？　どこの國からだか氣がつかなかつたかね？』

『よく覺えて居りませぬが、アメリカでなかつたかと思ひます』

『ふむ』といつて、刑事は室内をながめまはした。さうして肥後君を顧みて云つた。『どうもこの室内の樣子では、アメリカあたりで生活したことのある人のやうに思はれますなあ』

『僕はまだ外國で生活したことはありませんが、さう考へても差支ないやうな氣がします』

それから刑事は主人にむかつてたづねた。

『村井さんがこちらへたづねて來られたことはなかつたかね？』

『一度も見えなかつたやうです。いつも電話がかゝると、押毛さんはこちらから出向いて行かれました』

刑事はそこで主人を去らしめ、先づ押入をあけると、洋服簞笥とトランクがあつた。いづれも錠が下りて居たので、刑事はたゞその外部を檢査したが、最近日本で買つたものであるから押毛がこれまで何處に居たかを知るに由なかつた。

それから刑事は机の抽斗をあけて檢べたが、たゞ化粧道具などがはいつて居るだけで、これといふ注意をひくものはなかつた。

『手紙などはきつとトランクへ入れて居るでせう。それとも燒くか破るかしてしまつたかも知れませんなあ』

かういつて刑事は次に、磨ガラスのはまつて居る本箱の戸をあけた。中は洋書が大部分を占め、日本書や數册の雜誌がぎつしりつまつて居た。

肥後君は近寄つて暫らく眺めて居たが、

『や、みんな探偵小説ばかりだ』と、さも〳〵驚いたやうに叫んだ。

然し、刑事も驚かざるを得なかつた。

『え？　みんな探偵小説？　それぢや、中澤さんも、考へを變へなきやならん』

『何故です？』と、肥後君は、云ひながらも書物から眼をはなさなかつた。

『探偵小説の好きな人間は、實際の惡事はやりませんからなあ』

『はゝゝ』と肥後君は笑つて、それからひとりごとのやうに呟いた。『英米の探偵小説のクラシックから、新しいものも可なりにある。チエスタートンが好きだと見えて、だいぶ讀み古されて居る。十月號と十一月號の「新青年」に、十月號の「探偵趣味」がある』

かういつて、肥後君はそのうちの讀み古された一册を取り出した。さうして暫らくの間ぺ〳〵ジを繰つて居たが、やがて、

『おや！』

と叫んだ。刑事は何を發見したのかとそばへ寄ると、肥後君は無言でページの上を指た。見ると其處には、

中澤保
村井富子

と、鉛筆で落書がしてあつた。

『ふむ』と刑事は思はず唸つたが、『其處のところにはどんなことが書かれてありますか』とたづねた。

『これはチエスタートンの「ゼ、マン、フー、ニユー、ツー、マツチ」といふ探偵小說です。この落書のしてあるところは「ゼ、ツリース、オヴ、プライド」といふ短篇でして、たしか、今年の正月の「新青年」增刊號に、小酒井不木が「孔雀の樹」と題して譯しました』かう云つてから更に語氣をつよめて『いや、これで、村井さんのこんどの計畫は、押毛が主謀者だつたことがわかります』

『えゝ？　それはまたどういふ譯ですか』と、刑事は急に好奇心にかられて云つた。

肥後君は語つた。「この孔雀の樹」といふ小說の中には、英國の南部の海岸に住んで居るヴエーンといふ豪士が出て來ますが、恰度村井さんと同じ性格の人で、非常に冗談好きなのです。その廣大な領內に、むかしアフリカから持つて來たといふ孔雀の樹がありましたが、その土地の者は、その樹が一種の熱病をふりまき、人間をも取つてたべるといふ迷信を持つて居ましたので、ヴエーンは、その迷

信を何とかして打破したいと思ひ、あるときその孔雀の樹の下で一夜をあかしましたが、朝になると何處へ行つたか姿が見えなくなりました。土地の人はヴエーンが孔雀の樹に食べられてしまつたのだと信じていよ〳〵傳說を怖れましたが、その實ヴエーンは、地下の洞穴から逃て大陸へ渡り、二ヶ月過ぎて無事に歸つて來たのです。そこで色々な探偵的事情がからまつて、非常に面白い小說ですが、どうやら村井さんのやり口はこの主人公ヴエーンのそれと似て居ます。一旦姿をかくして再びあらはれるといふ所などは、この小說からヒントを得たといつてよいと思ひます』

『さうかも知れませんなあ』と、刑事は贊成した。『そこのところにその落書のしてあるところを見ると、その小說と、今度の事件とは何だか關係があるやうですなあ。然し、その樂書は一たいどういふ意味でせうか。よく人はにくい人間の名を落書するものですが、さういふ場合には、きつと、鉛筆でその名前に何か彼か、傷がつけてあります。こゝにはそんな傷はつけてありませんから、どうもこれは、中澤さんと村井令孃の結婚を希望して居るやうですなあ』

『僕もさう思ひます』

『中澤さんがこれを見たら、定めし苦笑することでせう。もうその外のところに、そんなやうな落書はありませんか』

肥後君は讀み古されて居さうな書物を一々取つてその頁を葉繰り、それから新しい書物を開いて見

たが、別にこれといふ落書はなかつた。で、最後に『新青年』を取り上げて檢査し、それから、『探偵趣味』を葉繰つた。

『あッ、こゝにも同じ落書があります』と、肥後君は、失つた寶石を見つけた時のやうな聲で云つた。

刑事がのぞきこむと、其處には『奇術師』といふ標題が書かれ、ミッドルトン作、田中早苗譯としてあつた。

『えゝ？　奇術師？　はゝあ、それでは奇術師を雇つて、忽然と姿を消すといふやうな小說ではありませんか』

『さうですねえ、これは男の奇術師が、毎夜その細君を舞臺の上で消して見せるのですが、ある夜、見事に細君が消失して大に喝采を博したけれど、その儘、細君は本當にどこかへ消えてしまつたといふ一種の怪談です』

『さすがにあなたは探偵小說通ですなあ』と、刑事は感心したやうに云つた。『さうですか、するとやつぱり押毛がこれ等の探偵小說を讀んで、今回のことを計畫したと考へてもよいやうですなあ』

『待つて下さいよ』と、この時、肥後君は云つた。『この「探偵趣味」は九月二十日發行ですから、押毛の手にはいつたのは九月の末だらうと思ひます。それだのに、姿をかくす計畫は、どうやら九月のはじめに既に出來て居たらしいから、一寸そこが變だと思ひます』

『然し、その「孔雀の樹」とかいふ小說のつて居る原書はづゝと前からあつたのでせう？　さうすれば、一旦姿をかくす計畫をして、それから偶然この雜誌を讀んで更に奇術師を雇ふことにしたと考へても差支ありますまい。いや、何にしても事件は少しづゝわかつて行くやうな氣がします』

『さうですねえ、これで押毛が、村井さんの姿をかくす計畫をした主腦者だといふことはどうやらわかりましたが、さて、一たい何のために村井さんが姿をかくさうとしたかは、まだわかつて居りません。單に世間をあつといはせるつもりか、或は又、何か重大な理由があつて、さうしなければならなかつたか……』

肥後君が皆まで云はぬうちに刑事は遮つた。『そこですよ、わたしは、はじめからそれが知りたいと思つて居たのですが、まだ少しもわかりません。今日のあなたの搜索の結果、殿山醫師が突然、事件に關係を持つて來ましたが、殿山醫師にどういふ動機があるかはまだわからず、その殿山醫師もどうやらみんなと一しよに姿をかくしたらしく、その上中澤さんまでが……』

こゝまで云つたとき刑事の顏には不安の色が漲つた。

『いや、どうももうぢつとしては居れません。家宅搜索の結果、これだけのことが知れたのは滿足だとして、これから、殿山醫院の近所まで行つて、見張らせてある刑事の報告をきゝませう』

肥後君は、刑事の語る間『探偵趣味』のページを葉繰つて、何か書いてないかを檢べ、刑事が云ひ

終つたとき、恰度最後のページに達したが、突然、何を見たのか、

『おやッ』と叫んだ。

あまりに聲が大きかつたので、刑事は思はずのぞきこんだが、欄外に書かれてある鉛筆の文字を見たとき、刑事は肥後君の驚く意味がわからなかつた。が、肥後君は二の句のつげない位驚いたのである。それもその筈、其處には横書きに左の文字が列ねられてあつた。

殺人＝犯人の心―讀者の心

第十三章　追跡

犯罪方程式！

それは先週の土曜日、肥後君が、はじめて小窪教授から聞いた、いはゞ教授の犯罪哲學を簡單に示した結晶であつた。

その犯罪方程式が、今、押毛の所持して居る雜誌の一頁に書かれてあるといふことは、そも〳〵何を意味するであらうか。

押毛は小窪教授を知つて居るのだ！

小窪教授は押毛を知つて居るのだ！

犯罪方程式を見た瞬間、肥後君の頭の中にひらめいたこの考へが、肥後君に思はずも驚きの大聲を發せしめたのは當然のことであつた。

それと同時に肥後君の頭には、百千の考へが颶風のやうに渦を卷いて發生した。

押毛が教授を知つて居るとすれば、ことによると、教授は、村井氏の今回の不思議な計畫を知つて居るかも知れない。若し教授が知つて居るとすれば、果してどの程度に知つて居るであらうか。

『世間を騒がす惡戯といふものは、必ず悲劇に終るものだよ』と、あの日、死亡廣告事件を批評した教授の言葉は今になつて見れば、概念的に言つたものではなくて、當然起るべきことを物語つたものと考へれば考へられぬことはない。して見れば、小窪教授は村井氏の死を豫期して居たのであらうか。なほ一歩進めて云ふならば、小窪教授は村井氏の死に關係があるのだらうか。

と、考へて、ぎくりとした時、傍に立つて居た鹿島刑事は、

『どうしたのです。何をびつくりしたのです。それは何です』と、肥後君の顔をのぞき込むやうにしてたづねた。

肥後君は刑事のこの言葉にはじめて、平靜な心を取り戻した。が、次の瞬間鹿島刑事に說明してよいか惡いかに迷つた。

肥後君の躊躇してゐるのを見て、刑事は追ひかけてたづねた。

『何ですか、それは、何か珍しいことなのですか』

たとひ教授が村井氏の死に關係があるとしても、まさか教授が手を下して村井氏を殺す筈はないだらうと考へた肥後君は、包まず刑事に説明しようと決心した。

『これは犯罪方程式といつて、いはゞ小窪先生が發明されたものです。それを押毛がこゝに書いて居るのは、押毛が小窪先生を知つて居ることになります』

『えゝッ』と、刑事もさすがに驚きの色を見せた。が、何か言はうとする前に肥後君は續けた。

『僕は先週の土曜日にはじめて、先生から、この方程式を教はつたのです。だから、押毛も最近先生からきいたのにちがひありません。若しさうだとすると、先生は、村井氏の今回の計畫をとくに知つて居られるかも知れません』

『ふーむ』と刑事は大きく唸つて腕を拱いた。さうして眼をつぶつて暫く考へて居たが、やがて平靜な顔になつてたづねた。

『その犯罪方程式といふのは、小窪先生が學生たちにも講義されるのではありませんか』

『そりや、無論講義されるだらうと思ひます』

『あなたは先週の土曜日にはじめてきいたと仰しやるけれど、先生はもう何年も前から學生に講義して居られるのではないでせうか』

『そりや、どうだか存じません。僕は先月からこちらの法醫學教室に御厄介になつたばかりですから然し、このあひだの先生の口振りでは、この犯罪方程式は、最近に御考へになつた樣子でした』

『ふむ』と刑事は再び考へた後言つた。『ですけれど、小窪先生が數年前からそれを講義なさつたとすると、都合がいゝやうに思はれます。といふのは、若しさうとすれば、自然殿山醫師も學生時代にそれをきいたでせうし、さうして、押毛は殿山醫師から傳へ聞いたのだらうと考へられますから』

これを聞いて肥後君はなるほどと思つた。けれども、押毛と小窪教授とが知己の仲であるといふ推定をそれによつて完全に打消すことが出來なかつた。

『すると、あなたは押毛と殿山醫師とが共謀して、村井氏を殺したとお考へになりますか』と肥後君は、袁え切らぬやうな口調でたづねた。

『さあ、そこまで私はまだ考へて居りませんよ。小窪先生が押毛と知己の仲だと考へることはあまりにも突飛ですからなあ。たゞ考へ易い方のことを申したのに過ぎません』

かういつてから刑事はポケットに手を入れて、中澤保に宛られた例の無名の脅迫狀を取り出し、その筆跡と、押毛の文字とを比較した。が、二つの筆跡は少しも似てゐなかつた。

『僞筆とすれば無論ちがふやうに書けますれど、どうも、この二つの筆跡はまつたく別人が書いたやうに思はれますなあ。何はともあれ、これから、殿山醫院の樣子をさぐつて來ようではありません

か』

肥後君は押毛と小窪教授とを結びつける有力な手がかりを發見したつもりで、しきりに、先日來の教授の言動を回想したが、鹿島刑事は、それほどの興味を持たず、その心は、ひたすらに、殿山醫院の方にいそいで居るらしかつた。

で、肥後君は手にして居た雜誌を本箱にをさめ、刑事に從つて、押毛の居間を出た。

階下に來るなり鹿島刑事は、聞天館の主人に賴んで電話を借りた。さうして、數分の後、電話室から出て來た刑事の顏には心配さうな色が浮んで來た。

『今、村井さんの御宅へ電話をかけてきゝましたが、中澤さんは相變らず歸へつて來ないさうです。ところが夫人の容態がどうもだん〳〵よくない樣ですから殿山さんへ電話をかけたけれども通ぜず、親戚の人が心配して先刻大學病院の內科の先生に來てもらつたところ、急性肺炎だから決して油斷がならぬといふことだつたさうです。さうして夫人はしきりに富子さんと中澤さんに逢ひたがつて居られるさうです』

『さうですか、急性肺炎ですか』と、肥後君も顏を曇らせた。『それぢや、誰か醫者がついてなくてはいけないでせう。僕は臨床家ではありませぬけれど、素人よりか幾分ましだと思ひますから、いつそ、これから村井さんの御宅へ伺つて居りませうか。それに、中澤さんの御話から察すると、夫人は今回

の事件に關して何だか、もつと深いことを知つておいでのやうにも思はれますから、萬一の場合に、僕等のうち誰かゞそばに居た方がよいと思ひます。尤も夫人が僕の行くのをお好みにならなければ致し方がありませんけれど、あなたの搜索の結果を承つたり、又は村井家の事情を通知するためにもその方が好都合だと思ひます。

『さうして下さるか』と、鹿島刑事はあかるい表情をとり戻して言つた『實は、いま、わしもそれをあなたに御願ひしようかと思つたところです。殿山醫師の動靜はわたしと部下のものとでさぐりますから、どうか村井さんの方をよろしく願ひます。あなたが行つて下さるなら、夫人もきつと喜ばれるでせう』

二人はやがて聞天館を出た。鐵橋の下から公園の方を見ると、十六夜の月に照された樹木の影は海底のやうに淀んで、時々走り出して來る自動車が、巨大な水棲爬蟲類のやうに思はれた『お腹がすきはしませんか。一しよに御飯を食べる約束でしたが』

『さうですねえ』と肥後君は考へた。『僕はこれから一寸教室へ立寄つて、それから村井さんの御宅に行かうと思ひます。食事は教室でゝも濟ますことにしませう』

肥後君と別れた鹿島刑事は、食事するひまももどかしく思つたので、そのまゝタクシーを雇つて小林町の殿山醫院に向けて走らせた。殿山醫院は電車通りを東へ半丁程はいつたところにあつたから

刑事は人通りの多い電車通りで降りて、それから用心深く横町へまがつた。横町は水を打つたやうに森閑として居て、軒燈の光りがぽつり〳〵とならんで居た。

刑事は街の右側をそつと歩いて行つたが、やがて殿山醫院の前まで來たので、立ちどまつて樣子を伺つた。殿山醫院は街の左側にあつて、さほど大きくない南向きの洋式二階建で、往來から四五軒はいつたところに入口があつた。玄關に通ずる石疊の左右と建物の兩側とは植込になつて居た。見ると、入口の軒燈はかすかについて居たけれど、家の中には人氣がないらしく、どこからも、光線がもれて來なかつた。たゞ正面にある二階の硝子窓の一つに、まんまるい月がさびしく映つて、蒼白い光りを刑事の顏に反射した。

突然、誰かゞ背後に近づいたので、鹿島刑事はくるりと振向いた。それは夕方張番を命じた部下の一人であつた。

『どうだつた？』と、鹿島刑事は低聲でたづねた。

『あれからずつと見張つて居りますが、誰も出入り致しません。尤も、一度、署へ歸つた間に誰か出入りしたかも知れませんけれど、こつちへ來てから二三度ベルを鳴らして見ましたが、やはり返答はありませんでした』

『殿山醫院には看護婦や女中は居ないのかい？』

『女中はこの頃まで一人居たさうですか、近頃は書生と二人きりださうです。近所の人にはあんまり評判がよくありません』

部下の話をきゝながら、醫院の方をながめて居た鹿島刑事は、何を見たのか、

『や』と輕く叫んだ。

見ると、階下の向つて右の窓の奥から、微な光線が上下に動いて映つた。それは誰かゞ懷中電燈をもつて、何か搜して居るかと思はれるやうな樣子であつた。鹿島刑事は思はずも、光線のもれて來た窓の前方に走り寄つたが、その時、もはや、件の光線は消えてしまつて、窓の奥は石炭のやうに眞黑であつた。

けれども、これによつて、殿山醫院の中には、たしかに人の居ることがわかつた。

『ベルを押して見ませうか』と鹿島刑事の後について來た部下は囁いた。

『いけない〳〵』と、刑事は頭を横にふつた。

『むかうから見られるとまづいから、あそこの家の蔭から樣子をうかゞふことにしよう』

鹿島刑事は先に立つて、恰度都合よく二三歩先にあつた細い路地にはいつた。さうして二人は、息をとゞめて殿山醫院の方をながめた。

二三分、醫院の中には何の變化も起らなかつた。まだ宵の口であるのに、運よく誰も通らなかつた

ので、二人は怪しまれずに見張りを續けることが出來た。

と、その時、殿山醫院の入口の扉が徐々にあいて、中から帽子をかぶつた一人の女が首だけを出してそーつとのぞいた。それは恐らく、表の樣子をうかゞつたのであらう。さうして誰も居ないと見屆けるなり、ひらりと扉を開いて、ぽんと閉め、急ぎ足で街の方へ歩んで來た。

はじめ、女が首を出したときはそれが誰であるかを見わけることが出來なかつたが、その洋裝を見輕い歩調をながめた時、鹿島刑事は思はずも、

『あッ』と叫んだ。

『どうしたのです、誰です』と部下はたづねた。

『奇術師の松華だよ』と刑事は聲を顫はせた。

『あ、さうです、〳〵』　部下も興奮して言つた。

『かうしては居られない。わしはこれから松華の跡をつけるから、お前はこゝに番をして居て若し又誰か出て來たら、そのあとをつけてくれ』

言ひ置いて刑事は小走りに松華の跡を追つた。その時松華はすでに電車通りへ出て、むかう側に渡らうとして居た。刑事は、彼女を見失ふまいと、大急ぎでついて行つたが、やがて彼女は北を向いてどし〳〵歩いたかと思ふと、後ろから走つて來た電車に近づいてひよいと飛乘りをした。

刑事ははッと思つた。いくら走つても自分の身體ではとても電車に追付くことが出來ない。電車はどん〳〵と走つて行く、見る〳〵自分と松華との距離は遠ざかつて行く、刑事はその時はげしい焦燥を感じたが、ちやうど運よく後ろから一臺の空のタクシーが走つて來たので、それを呼びとめるなり運轉手に事情を話して飛び乘つた。距離はだん〳〵せばめられた。自動車の中から前方をすかして見ると、松華が車掌臺に立つて居る姿さへ見え出して來た、彼女はどうやらつけられて居るといふことを知らないらしかつた。

やがて電車が榮町の角でとまると、松華は笹島行の電車に乘換るために、日本銀行支店前の安全地帶へ行つた。鹿島刑事は自動車をとゞめさせて、彼女の乘るのを待つて居ると、程なく電車が來たので、再び追跡が始まつた。自動車は殆ど電車とすれ〳〵に走つた。その時分運轉手は、もはや誰をつけるべきかを知つて居たので刑事ははじめて、クッションに身を埋めながら思考の餘裕を得た。

松華が殿山醫院から出て來たことは、一たい何を意味するであらうか。彼女もまた村井氏の死に多少の關係を持つて居るのであらうか。小窪教授の說によると、毒の丸藥は、村井氏が棺桶の中にはいる少し前に與へられたといふのであるから、彼女が與へたといふ可能性は十分にある。然し、若しさうであるとしても、彼女に村井氏を殺す動機はありさうにないから、押毛か又は殿山醫師の手先となつたと考へなければならない、ところが今、彼女は殿山醫院から出て來たのであるから、彼女は殿山

醫師の手先となつたのかも知れない。

然し、と、刑事は考へ續けた。先刻彼女は懐中電燈をもつて、たしかに醫院の中を捜して居た樣子である。若し、その想像が當つて居るとすれば、殿山醫師に賴まれて何かを取りに來たか、或は誰か他の人に賴まれて殿山醫院の樣子をさぐりに來たと考へなければならない。彼女は身輕な女であるから留守の家へしのび込むことは比較的容易な筈である。して見ると彼女は今、捜索の結果をその人に報告しに行くのであるかも知れない。いづれにしても、松華の行先をつきとめることは今回の事件に一段の光明を與へるであらう。

かう考へると、刑事の胸は躍つた。が、その時、自動車がとまつたので、何處であるかと見ると、それは名古屋停車場前であつた。氣がつくと松華は、電車を降りるなり。停車場へは行かないで左に折れて、すた〳〵と明治橋の方へ歩いて行つた。で、刑事も急いで自動車を降り賃銀を拂つて彼女のあとをつけた。

彼女は明治橋を上つて西の方へずん〳〵進んだ。

『はてな、中村遊廓へでも行くのかな、何しに行くのだらう』

かう思つて刑事がついて行くと、先方に一臺のタクシーが道ばたに止まつて居たが、やがて彼女はつか〳〵とそれに近づいたかと思ふと、あッといふ間に飛乘つて、自動車は走り出した。そのあたり

にはもう他にタクシーがなかつたので刑事は思はず走り出したが、中村行電車の起始點まで走つたとき、自動車は群集の中へ沒してしまつた。その時電車がむかふからやつて來たので、それが引き返すのに乘つて、兎に角、自動車の跡をつけて見ようと決心したものゝもはや絶望だと思つた。

殘念なことをした。あの時、そのまゝ自動車に乘つて彼女の跡をつければよかつたのにと、今さら後悔しても及ばなかつた。それにしても彼女は何のために遊廓の方へ行くのであらう。彼女の宿はこの邊ではないから、たしかに用事をもつてこちらへ來たのにちがひない。

然らば誰がこの邊に居るのであらうか、かう思つて立つて居ると、電車がついて、澤山の人が降りた。刑事は見るともなく、一人々々を見まもつて居たが、やがて、誰か知つた人を見つけたと見え、つか〳〵とその傍へよつた。

『おい下出君』と、鹿島刑事は肩をたゝいて云つた。

それは押毛の捜索に當つて居る下出刑事であつた。

『おや、どうしてこちらへ來られたのですか、然し恰度いゝところでした。これから署へ歸つてお目にかゝらうと思つたのです』

『押毛の居どころはわかつたかね？』と、鹿島刑事は人通りの少ないところへ下出刑事を引張つて來てたづねた。

『押毛は中村遊廓にかくれて居るらしいのです』と、下出刑事はいつた。

『えッ』と鹿島刑事は驚いた。『實は今、わしは奇術師の松華のあとをつけてこゝまで來たのだが、松華が自動車に乘つたので、はぐれてしまつたよ。して見ると、松華は押毛の手先をつとめて居るのかも知れん。で、どうして、それがわかつたかね』

『實は一昨晩、おそく遊廓のそばの床屋で、濃い八の字髭を剃り落した男があるといふことを聞き出して來たものがあつたのです。そこで夕方御借りした寫眞をもつて、いまその理髪師をたづねたところ、たしかに寫眞の男に間違ひないといふのです。ですから、押毛はことによると遊廓のどこかにかくれて居るかもしれんと思つて、みんなに告げて捜させて居ります』

『それはいゝことがわかつた。一昨晩停車場前の自働電話から、押毛が下宿へ電話をかけたといふのだから、それから、中村遊廓へ行つたと考へるのは無理のない推定だ』

『やつぱり富子さんも一しよに居るのでせうか』

『さあ、そこだよ、なるほど、女を隠す場所としては遊廓は屈竟のところだ。先刻、押毛の家宅捜索をしたら、押毛は大の探偵小説好きだとわかつたので、それくらゐの智慧は出さうに思ふ』

『だが、遊廓へ富子さんをかくしたとなると、無理に連れて行つたのではなささうですねえ。それとも、富子さんを遊廓へ賣り飛ばしたのでせうか』

『まさかそんなことはあるまい。どうもわしには押毛が惡人だとは思はれなくなつた。若し富子さんを遊廓へかくしたのだとするならば、それはやつぱり、富子さんを保護するためにちがひい』

『で、今お話しの松華は、押毛をたづねて來たのでせうか』

『さあ、それはまだたしかなことはわからぬよ。さうだ、松華が遊廓へ入りこめば、すぐに知れるだらう。これから二人で遊廓へ行つて松華の行先をつきとめようぢやないか』

鹿島、下出兩刑事は間もなく遊廓行きの電車に乘込んだ。

第十四章　二通の手紙

さて讀者諸君。こゝで筆者は、鹿島、下出兩刑事の捜索の結果を記す前に、この事件捜索を分擔した中澤保のその後の動靜を記さねばならない。といふのは、恐らく諸君はそれを希望して居られると思ふからである。諸君はもはや、中澤がある苦境に陷つて居るにちがひないと想像して居られるだらうが、事實はそのとほりであつて、鹿島、下出兩刑事が遊廓行きの電車に乘り込んだ時刻には、彼は何處ともわからぬ一室に、監禁されて居るのであつた。

で、筆者は、彼がどうしてかやうな運命に陷つたかを順序正しく記載しようと思ふ。

村井家の玄關で彼が鹿島刑事に脅迫狀の注意をされたのは午後一時少し過ぎだつた。彼は刑事を送

り出してから、彼が刑事に宣言したやうに、どんな敵があらはれようとも、堂々と戰はうと決心した然し、彼はその敵が誰であるかを正しく知ることが出來なかつた。といふのは彼は自分の敵は押毛より外にないと思つて居たからである。

二時に殿山醫師が村井夫人の診察に來たとき、保は醫師に向つて事件探索の經過や、村井氏の死體紛失のことなどを語つた。さうして診察がすんで、醫師から一しよに藥を取りに來てくれませぬかといはれたとき、彼は喜んで同意しながら、自動車に乘りこんだ、道々彼は村井夫人の病氣が重いといふことを聞かされたので、その心は沈み勝ちであつたが、數時間の後に受けるべき怖ろしい自己の運命については、その豫感だも持ち得なかつたのである。

殿山醫院に着くなり、中澤は二十五六の書生らしい男に奥の一室に案内された。そこは診察室でもなければ又應接室の體裁も具へて居らなかつた。むしろ洋式の食堂とでも言ふのが至當であらう。中央に粗末な食卓らしいものが置かれ、そのそばに二三脚の古びた椅子がならべられてあつた。

保はその椅子に腰かけて殿山醫師の來るのを待つて居た。しかし醫師はなか〳〵姿をあらはさなかつた。多分藥劑の調合に暇を取るのであらうと思つたが、內心は、早く藥劑をこしらへてもらつて村井家へ屆け、鹿島刑事とともに押毛の家宅搜索に行きたいものだといら〳〵した。

凡そ三十分ほど過ぎてから、

『御待たせしました』といつて殿山醫師がはいつて來た。保は醫師が藥瓶か又は散藥の紙包を持つて來ただらうと思つたのに、意外にも、その手には何にも持つて居なかつた。

『御藥は出來ましたでせうか』と保は不審さうにたづねた。

『出來て居ます。然し、一寸その前に、あなたに御たづねしたいことがあります』と、醫師は極めて眞面目な顏をして言つた。

『何ですか』

殿山醫師は保のまんむかへに、テーブルをはさんで腰かけた。

『あなたは村井さんの死をどう考へておいでになりますか』

突然、あらたまつた口調で質問されたので、保が聊か面喰つた。

『どう考へるつて、村井社長は誰かに殺されなさつたと思ひます』

『誰に殺されたのでせうか』

『それはもとより存じませぬが、丸藥のケースを盜み、死體を盜んだものが犯人だらうと思ひます』

『ふむ』と殿山醫師は、ちらとその金の下齒を見せて言つた。『それは一たい誰でせうか』

『僕は知りません』

『けれども推定はして居られるでせう？』

『して居ます』
『誰ですか』
『押毛だと思ひます』
『あなたは模擬葬式の晩にもさう言つて居られたやうですが、そりや少し推定がちがひはしませんか』
『何故です?』
『何故といつて、それは私よりも、あなたの方がよく知つて居られる筈です』
保は、醫師の、意味ありげなこの言葉に一種の威壓を感じた。
『どういふことですか。あなたの仰しやることはよくわかりません』と、保は醫師の顏をぢつと眺めて言つた。
醫師は皮肉な微笑をもらした。
『それぢや、おたずねしますが、富子さんは今何處に居りますか』
『僕は知りませんよ。知らなければこそ、鹿島刑事に賴んで、富子さんの搜索を手傳はせてもらふことにしたのです』
『あなたはそれを本氣で云つて居るのですか』と醫師は少しく險惡な表情になつて云つた。

『をかしいことを云ひますねえ。僕は富子さんをどうしても搜し出さねばならぬ身體です。本氣も狂氣もないぢやありませぬか』と、保は幾分か興奮した口調になつて云つた。
『ふん』と醫師はせゝら笑つた。左の頰にある黑子が醫師のその笑ひ顏を一層にくらしげにした。『盜人たけゞくしいとはよく云つたものだ!』
『えゝ?』と保はいきまいた。『もう一ぺん云つて御覽なさい。失禮なー』
『何度でも云ふとも。盜人たけゞくしいとは君のことだよ』
『なに?』
『君は、今朝受取つた脅迫狀を誰が出したかまだ知らぬのか』
『え?』と、さすがに保はびつくりした。
『よく、そんなにづうゝしくして居れたものだ。早く富子さんを出したまへ』
『ぢや、ぢや、あの脅迫狀は……』
『あたりまへよ、僕が出したんだ』
今が今まで、あの脅迫狀は押毛の細工とばかり思つて居たのであるから、殿山醫師のこの言葉は、保にとつて全く寢耳に水であつた。彼は極度に驚くと同時にはげしく醫師の態度に憤慨した。
『だつて、知らなきあ、知らぬぢやないか』と、保は聲を顫はせて云つた。

『君は中々頑固だねえ』と、醫師は少しく言葉を和らげて云つた。『君が何と云はうが、こつちには立派な證據があるから駄目だよ』

『どんな證據だ？』と、保はせきこんで云つた。

『見たければ見せてやらう』

かう言つて殿山醫師は、ポケットに手をやつたかと思ふと、一本の封書を取り出して、中澤の前へポンと投げ出した。

見るとそれは富子が常に用ひて居る桃色の西洋封筒であつたから、中澤は、はッと思つて、顫へる手先で取り上げた。

封筒の表にはペンで『母上樣御許に』と書かれ、裏には『富子』と書かれてあつた。間違ひもなくそれは富子自身の筆跡であつた。

『讀んで見たまへ』と、醫師は命ずるやうに言つた。

中澤は手早く内容を取り出して、同じく桃色のレターペーパーを開いた。其處にはペンで、次の文句が走り書きされてあつた。

母上樣！　事情あつて私は當分姿をかくします。けれど、私は中澤さんと一しよに居るのですから、決して……心配しないで下さい。どうか、お父さまにも、よろしく傳へておいて下さい。急ぎますからこれで……

十月二十日午後六時半

富子

隨分あわてゝ書いたものらしかつたが、それは疑ひもなく富子の筆跡であつた。

然し、手紙の内容は、保にとつて全く意外なことであつた。十月二十日午後六時半といへば村井氏の模擬葬式の始まるまさに三十分前である。模擬葬式の後に行はれる結婚披露を富子は非常にたのしみに〳〵て居たのであるから、富子が姿をかくす決心をしたのは、全く突然の事情によらねばならない。それは果してどんな事情であつたであらうか。

それにしても富子が母親にこれだけの手紙を書いて置きながら、自分宛に手紙を書かなかつたのはどういふ譯であらうか。この手紙によると、富子は自分と一しよに姿をかくすつもりであつたらしいのに、自分に一言の通知をもしなかつたのはどうしたことか。又、この手紙があるにも拘らず、村井夫人が、富子の安否を氣づかつたのはどういふ譯であらうか。さうしてこの手紙のことを自分に告げなかつたのは何故だつたか。

『どうだ君？』

促すやうに言ひ放つた醫師の言葉に、保ははッと我に返つた。

『君はこの手紙を夫人が見られない先に横取したな？』と、保は思はずきゝ返した。

『そんなことはどうでもいゝよ』と、醫師は嘲笑つた。『君はこれでもまだ强情を張らうとするのか』

富子が自發的に姿をかくしたといふことは、今迄の保の想像を根柢から覆したのであるから、保は醫師の言葉に答へるひまもなく、なほも考へに耽らうとした。

『言ひ譯が立たないだらう。さあ、どこに富子さんが居るのか言ひたまへ』

『知らないよ。何と言はれたつて知らない』

『どうしても君は言はないのか』

『だつて、知らぬことは言へない』

殿山醫師の眼は、獲物を見つけた肉食獸のそれのやうに輝いた。

『君はそんなに僕を甘く見て居るのか』と、醫師は半身を前へ差出して保の顏をじつとにらめた。

保はかッとした。

『君こそ人を馬鹿にして居るぢやないか、たとひ僕が富子さんの行方を知つて居たとしたところが、君は何の權利があつてそれをきかうとするのだ』

『何を？　きくべき權利があればこそきくのだ』

『君にどういふ權利があらうとも、こつちに話すべき義務はないよ。富子さんは僕と結婚すべき人だ』

『おい〳〵』と、醫師は保を遮るやうに言つた。『さういふ出鱈目はこゝでは通用しないよ』

『何が出鱈目だ？　富子さんと僕とが結婚することは、今日發見された村井社長の遺言狀にもちやんと書かれてあるよ』

醫師は憎惡にみちた眼をして、保の顏を穴のあく程ながめた。

『仕方がない』と、醫師は吐き出すやうに言つた。『どこまでも、富子さんのありかを言はなければこちらにも考へがあるよ。が、その前に君に見せて置くべきものがある』かう言つて、醫師は上衣の內ポケットから、一本の書狀を取り出した。『さあこの手紙を讀むがいゝ。これを見たら、あんまり大きな顏はして居られまい』

保は自分の前に投げられた書狀をながめた。それは日本封筒であつて、毛筆で書かれた文字は、たしかに村井社長の筆跡であつた。取りあげて見ると、村井氏より殿山醫師に宛られた親展の郵便物であつた。

保は何が書かれてあるのかと、憤怒の爲に熱した頭の中に、多少の好奇心をわかして、封筒の中から卷紙を取り出した。それには次の文句が書かれてあつた。

拜啓、時下秋冷の候、貴下益々御健勝賀し奉り候。陳者、かねて貴下と富子との御結婚は來る十一月二十日小生誕生日に行はるべき樣御約束申し上げ候が、今回、突然、何者の惡戯とも知れず、小生の死亡廣告を新聞に掲載致し候に就ては、廣告の文言にあるごとく、來る十月二十日午後七時、模擬葬式を行ひ、次で還暦祝ひを執行致すも面白き趣向と存じ候につき、貴下と富子との結婚も同夜相行ひ度く候へば、此儀御承諾相成度く願上候

かね〴〵申上候通り、結婚式の儀は全然貴下と小生との祕密に致し度く、何人にも通知致さずして突然披露に及び、親戚を始め世間一般をあッと言はせ度く存じ候へば、これ又左樣御承知置き願上候

當夜は色々珍しき趣向をこらして、來會の人々を喜ばせ度く存じ候。このことは家内にも富子にも、その間際まで告げざる計畫に候へば、くれ〴〵も御注意願ひ上げ候。從つて服裝の如きは通常服に願ひたく候へども、禮服を御着用相成り候ても苦しからず、この儀一寸申添候。

委細は萬々拜眉の上に讓り度く、右取り急ぎ貴意を得度草々敬具

十月十七日

村井喜七郎

殿山六造殿

讀み終つた保は、あまりの意外な村井氏の手紙に暫くの間呆然とした。彼ははじめ、僞造の手紙ではないかと思つて見たが、筆跡といひ文章といひ、村井氏の特徵がはつきりあらはれて居た。

殿山醫師と富子との結婚？

保は思つただけでも不快の念がこみ上て來るのであつた。それにしても社長は果してこれを本氣で書いたのであらうか。富子はこれ迄殿山醫師の名をさへめつたに口にしたことがなかつたから、殿山醫師との結婚は、富子の全然知らぬことであるにちがひない。然し、村井氏の持ち前の冗談としては少し深入りし過ぎた手紙である。村井氏がこの手紙を書いたについては、それだけの理由がなくてはならない。その理由は一たい何であるか。

而も村井氏は、模擬葬式の當夜、自分と富子との結婚披露を行ふのだと富子に告げたではないか。

保は何が何だかわからなくなつてしまつた。暫らくの間、手紙を開いたまゝ眼を俯せて考へに耽つた。

『おい君！』と醫師の意地惡さうな聲が走つた。『これでも君は、僕が富子さんの所在をきく權利がないといふのか』

『だつて……』

『だつてぢやないよ。君は自分では富子さんと結婚するつもりだつたかも知れぬが、村井さんから直

接結婚の許可を得た覺えがあるか』

言はれて保ははッとした。今迄一度も村井氏から直接富子との結婚について話をされたことはなかつたからである。模擬葬式の當夜自分たちの結婚披露が行はれるといふことも、たゞ富子の口を通じて聞いたのに過ぎなかつた。

『それ見たまへ、返事が出來ないぢやないか。僕と富子さんとの結婚は、よほど前から契約されて居たことだ。君は富子さんを籠絡して、富子さんと親密にして居たかも知れぬが村井氏が君との結婚を許す譯は全然ないよ』

『だつて村井社長の遺言狀の中に僕と富子さんと結婚すべきことが立派に書かれてある』

『遺言狀？　ふん』と、殿山醫師は鼻で笑つた。『たとひ君が見た遺言狀に何と書かれうが、この手紙は立派な證據ぢやないか。富子さんは僕のものだよ。だから正直に、どこへかくしたか言ひたまへ』

『誰が言ふものか。かうなつたらたとひ知つて居たとて云はないよ』と、保は聲を强めて云つた。

『はゝは』と醫師は笑つた『云はなきや、云はせるやうな方法を取るよ。それにしても君は往生際の惡い男だなあ。大ていの惡黨といふものは、いゝ加減のところであきらめて降參するものだよ』

『何が惡黨だ？』と保は眞蒼な顏をして云つた。

『惡黨ぢやないか、君は自分と富子さんとの結婚が到底許されないことを知つて村井氏を毒殺し、富

子さんを隱したぢやないか、知らぬと思つて居ちや駄目だよ。君はお通夜の場で、僕が死體から出した丸藥のケースを盜んだのだらう。毒殺した證據がわかるといけないと思つて、いつの間にかかくしたのだらう。さうして、押毛といふ男が居なくなつたのを幸に、富子さんを押毛が誘拐したやうに云ひふらし、その上、刑事に願つて富子さんの搜索を申し出でるなど、そのやり方は如何にも巧妙だけれど、遺憾ながらこつちには君の淺墓な計畫が見え透いて居るよ。君が村井氏を毒殺したことに就ては僕は兎や角いはない。それは警察の手に委ぬべきことだ。僕はたゞ富子さんを返してもらへばよいのだ。さあ、正直に云ひたまへ』

保は突然立ち上つた。彼は殿山醫師のあまりにも的をはづれた暴言に、舌の根がこはばつてしまふ位憤慨したのである。さうして彼は、も早相手になる要なしと認めて身を飜して歩き出さうとした。

と、その時、彼は、後ろから忍び寄つた書生のために、甘いやうな香のするハンカチーフを强く口にあてがはれた。

彼はびつくりしてもがいた。然し、書生の力は、彼の力にまさつた。それから、彼の力はだん〳〵弱つて行つて、幾分かの後彼は痲醉劑のために、ぐつたりと其の場にうづくまつてしまつた。

第十五章　意外な發見

夢の中で夢を見るやうな、四方八方から姦しい美人に話しかけられて居るやうな氣持がしたかと思ふと、中澤保の意識は、ちやうど蓮の上から雨蛙が飛んだときのやうに、ひよいと現實の闘にはねかへつた。彼は顳顬のあたりに鈍刀で皮膚をかきわけられるやうな痛みを覺えたが暫らくの間は、兩眼をつぶつたまゝで徐々に全身を動かさうとした。

が、上肢も下肢も彼の意志に從はなかつた。はッと氣がついて眼をあくと、彼は古びた部屋の疊の上に横はり彼の全身は麻繩によつてぐる〳〵巻に縛られて、口には猿轡がはめられてあつた。薄暗い電燈の光りによつて、彼は、ところ〴〵破れ穴のあいて居る襖に面して居ることに氣附いたのである。

だん〳〵意識が明瞭になるにつれて、彼の記憶も恢復した。さうして彼は殿山醫師とその相棒のために、麻醉劑を嗅がされて、何處とも知らぬ一間に監禁されて居ることを知つたのである。

凡そ何時間意識を失つて居たのか、もとより判斷がつかなかつた。電燈がついて居るところを見ると多分それは夜であらうと思つた。彼は耳をすましてあたりの物音に注意したが、別に何も聞えて來なかつた。

彼は襖に面して横になつたまゝ考へに耽つた。可なりにはげしい渇を感じたけれども、彼の頭の中に、油然として湧き起つた今回の事件の記憶は、いつの間にかその渇を忘れさせてしまつた。それどころか、彼は自分の身がこれからどんな運命に遭遇するかも知れぬといふ危惧の念さへ浮べて居るひ

まがなかつた。

彼は殿山醫師から見せられた二通の手紙によつて、自分が今回の事件に對し、根本的の誤解に陷つて居たことを知つた。富子は誰に誘拐されたのでもなく、まつたく自發的に姿をかくしたのであつた。又、富子を奪はうとするのは、押毛ではなくて殿山醫師であつた。

それにしても村井氏が殿山醫師に富子を與へると約束して置きながら、富子にそれを云はないばかりか、富子に向つて自分との結婚を許可したのは、どういふつもりであつただらうか。而も遺言狀には、明かに自分と富子との結婚を記入して居るではないか。

然し富子が、自發的に姿をかくしたものとすれば、何故に彼女は父の不慮の死に際しても姿をあらはさなかつたか。母への手紙の中に、お父さまによろしくと書かれてあつたのは、父が死なうなどとは夢にも思つて居なかつた證據であつて、人一倍父を思ふ彼女が姿を見せぬのはどうしても誰かに無理に引きとめられて居るものと考へなければならない。

然らば、彼女を引きとめて居るのは誰であらうか。殿山醫師でないことはわかつて居るからどうしても押毛より外の者を考へることが出來ない。押毛が富子と殆ど同時に姿をかくしたのはその推定の有力な根據である。けれども押毛はどうして富子の行先を知つたのであらうか、富子は自分にさへ行先を告げなかつたのであるから、押毛に告げる筈は決してない。して見ると押毛と富子はそれ〴〵別

の理由で姿をかくして居るのかも知れない。

わからない、わからない。彼は思はず口の中でつぶやいた。否、猿轡のために呟かうとしても呟き得なかつた。その時はじめて下になつて居る腕が猛烈に痛んで居ることに氣づいた。

そこで、彼は徐々に身體を動かしはじめた、腕の痛みを除くためには上體を起すのが一ばん得策である。で、彼は上體を起さうと試みたが、途中まで起き上ると、中心を失つて再びごろりとたふれけれども彼は屈しなかつた。さうして、數回の失敗の後、遂に起き上ることに成功したのである。

起き上つた彼は、當然襖に面したが、その部屋がどれ程の大きさであるかを知らうと思つて臀部を軸として、一回轉すると、意外にもその部屋に居るのは、自分一人ではないことがわかつた。

彼の方を枕として、一人の老人が白い布に包まれて戸板の上に眠つて居た。

次の瞬間彼は飛び上らんばかりにぎよつとした。

それは生きた人の眠つた姿ではなく、まさしく死んだ人であつたからである。而も、顔が倒まになつて居るから、直に斷定は出來ぬが、その頭の恰好や髪の生え具合が、たしかに村井社長のやうであつたからである。

彼は思はず立ち上らうとしたが、それは不可能であつた。で、少しづつゐざつて死人の顔を正視し得るところへ來た。見ると疑もなく、それは村井社長の死體であつた。

その刹那に彼は今回の事件の謎が解決されたやうに思つた。法醫學教室から死體を盗み出したのは殿山醫師である。從つて村井社長を殺したのも殿山醫師でなくてはならない。殿山醫師は先刻、自分が社長を殺したであらうといふ暴言を吐いたが、それは、そつくりそのまゝ殿山醫師に當はまるではないか。卽ち彼は自分が殺したといふ證據をなくするために通夜の場で丸藥のケースを奪ひ、次いで死體を奪ふの危險をさへ冒したのである。

然らば何のために殿山醫師は村井社長を殺したか、それは恐らく、富子と自分との結婚に起因して居るであらう。殿山は多分村井氏が殿山と富子との結婚を承諾しながら、富子と自分と結婚させる意志のある事を知つて、憤慨のあまり毒殺したのであらう。殿山にとつて毒藥を投ずることは極めて容易なことではないか。

さうだ、殿山は村井氏を毒殺して富子を奪はうとしたのだ。現に村井夫人は、村井氏が、度々、夫人に向つて『自分はことによると殺されるかも知れない。若し自分が死なゝければ富子は他人に誘拐はれるかも知れない』といつたことを告げたではないか。村井氏は殿山醫師を指て居たのだ。さうして、たうとう彼のために殺されたのだ。

保は今更ながら、深い同情の心をもつて村井氏の死顔をながめた。六疊ほどの部屋には二人の外何も置かれてはなかつたので、保は全身に一種のさむ氣を感じた。弱い電燈の光りに照された顔には、死

體らしく蒼白はなくて、まるで生きて眠つて居るかのやうに見えた。

細く開かれた眼球さへ、死體に特有な白濁は認められなかつた。

保は兩眼の熱くなることを禁じ得なかつた。遺言狀のことを思ふにつけても、何だか村井氏が自分のために殺されたのであるやうに思はれてならなかつた。自分といふものがなくて、富子と殿山と結婚して居たならば、恐らくかうした悲運に際會しなくても濟んだであらう。と、思ふと保の眼はますます濕つて遂にはポタリと一滴膝の上に落ちた。

それにしても殿山醫師は何のために自分を村井氏の死體の置かれてある部屋に連れて來たのであらうか。敢てわが罪跡を他人に見せようとするのはどういふ魂膽であらうか、富子の行方を自分に白狀させるための一種の威嚇手段であらうか。それとも他に深い理由があるであらうか。

彼は首をあげて部屋を見まはした。天井の板は煤け、壁は所々剝げて一口にいへばよほど汚ない室である。洋式造りの殿山醫院にこのやうな室のある譯はないから、たしかに別のところであるにちがひない。名古屋市中であらうか、それとも名古屋を離れたところであらうか。

彼はこの時はじめて自分の身の安危について考へをめぐらせた。このまゝこゝに居たら自分はどうなるであらうか、若し自分が富子の行方を告げなかつたら殿山はどうするつもりであらうか。彼は脅迫狀の中に、『生かしては置かぬ』と書いたが、果してそれは彼の眞意であらうか。村井氏の死體を盜

み出すくらゐのデスペレートな行爲をする彼のことであるから、どんな恐ろしいことをも爲かねないかも知れない。

かう思ふと保はじつとして居られないやうな氣がした。彼は何とかして立ち上らうとつとめたけれども、胴體をしばつた麻繩は脚の方までまきつけられてあつたゝめに、全然不可能なことであつた。そこで彼は少しづつゐざつて襖の方に近より、襖を足の先であけて行ようとした。が、それは出來さうなことで出來なかつた。さうして徒らに物音をたてるばかりであつた。

その物音をきゝつけたのか、或は偶然の一致であつたか、誰かゞ廊下らしいところをこちらへ歩いて來るやうな音がした。果してそれは人の足音で、足音は襖のむかふでぴたりととまりついで襖があけられた。

はいつて來たのは殿山醫師であつた。彼は保の姿を見るなり、例の金齒を見せて、物凄い笑ひをもらしたが、その顏は酒氣を帶んで居た。

『逃ようとしたつて駄目だよ。どうだ、思ひ知つたか』と、殿山醫師は吐き出すやうに云つた。

保はたゞうつむいて居るだけであつた。

『はつは、猿轡をかまされて居ては物が云へぬ譯だな。よし、お情ではづしてやらう』

かういつて醫師は保の後にまはり手拭の猿轡を解いた。保はほッとした。

『かういふ手痛い目にあつても、君はまだ富子さんの在所を白狀せぬか』

保は然し答へなかつた。

『えゝ、おい、どうだ？』と　醫師は保の肩に手をかけて強くゆすつた。

『き、君は、社長の死體を法醫學教室から盜み出したな？』

『さうよ。大學なんて野天も同じだ。醫者の姿をして行きや何でも盜み出せるよ』

『村井社長を殺したのは君だな？』と、保は眼に殺氣を帶ばせてたづねた。

『なに？　殺したのは君ぢやないか。かうして證據を盜んで貰つたんだから有難く思ふがいゝよ』

『馬鹿な』

『何が馬鹿なだ。ちつとは感謝してもいゝぢやないか。さあ、早く御云ひ！』

『知らぬよ』

『こんなにされてもまだ云へないのか』

『云はなきやどうしようといふのだ』

『云はなきや云ふまでしばつて置くだけだ』

保は最早物を云ふ勇氣がなくなつた。空腹と全身の苦痛のために眼がくらむやうな感じがして、嘔氣に似たものを催したので、靜かに眼をつぶつて觀念した。

『君は、自分が殺した死體を見ても、ちつとも怖ろしくはないのか』と醫師は幾分物やはらかな調子になつて云つた。『君は脅迫狀の文句を忘れたのか？』

保は眼をひらいた。が、答へなかつた。

『富子さんを出さなきや、あの文句どほりに君を生かしては置かぬよ』

『それ程富子さんの在所が知りたければ、自分で捜したらいゝぢやないか』と、保は無理に聲を搾つて云つた。

『本當にどこまでも反抗する氣か？』と、醫師は血相を變へて云つた。

『知らないものは云へない』と、保は平然として云つた。

『おい〳〵』と、醫師は聲をあらためた。さうして右手でポケットをたゝいた。『こゝには注射器と毒藥とがはいつて居るのだぞ。これを注射すれば君の生命は二分ともたぬよ』

保はその時殿山の眼を見て何となく怖ろしい氣がした。といふのは、酒氣のために充血した眼の中に、たしかに殺意がひらめいて居たからである。

『よくきいて置くがよい』と、醫師は續けた。『こゝは誰にも知れぬところだよ。君を殺してこゝに捨てゝ置けば、永久に發見されはしないよ。死たくなかつたら、早く白狀するがよい』

保は決心した。恐らく殿山はたとひ富子の在所を告げたとて、自分を生かしては置くまい。かうな

つた上は潔く運命の神の命ずるまゝに從はう。と、思ふと、今まではげしかつた心臟の皷動が幾分か靜まつて來た。

『たとひ白狀したつて、僕を生かして置く氣はないだらう？』と、保は自分ながら驚くほど沈着な態度で云つた。

『どうせ、君は村井社長を殺したのだから死なねばならぬ身體だ。絞首臺で死ぬよりも毒藥を注射してもらつて死んだ方がいゝだらう』

『ふん』と保は笑つた。『自分で殺して置いて、よくもそんなづう〳〵しいことが云へたものだ。君は富子さんの、戀敵として僕を殺したいのだらう』

この言葉は醫師に向つて意外に強い刺戟を與へたらしかつた。彼は物をいはずに、いきなり保を村井氏の死體の前へ引摺つて行つた。さうして、村井氏の死體の上におほひかぶせてあつた白い布をさつとめくつて、その胸部をさらけ出した。

保は醫師のこの狂氣じみた行爲を見て、何をするのかと呆氣にとられた。

『これから、君を殺す毒が如何に強い作用を持つものであるか。又、毒はどうやつて注射するものだかといふことを、この死體で實驗するのだよ。この世の思ひ出に、ようく見て置くがよい』

かう云つて醫師はポケットから注射器のはいつたニッケル製のケースと、小さな藥瓶とを取り出

した。

殿山醫師は保がどんな顏をするかとぢつと保の方へ眼をやつた。ところが、意外にも保は村井氏の死體の胸部を見たり、又顏を見たりして、遂には、自分の顏を死體の顏に近づけ恰も人形製作者が作りかけの人形の顏を檢査する樣な擧動を行つて居た。

これには殿山も聊か面喰はざるを得なかつた。

やがて保は、さも〳〵びつくりしたといふ顏付をして殿山醫師の方を振かへつた。醫師は怪訝さうな顏をして保が何を見つけたかを知らうとした。

保は少からぬ興奮を覺えたと見え、聲を顫はせて叫んだ。

『こりや、村井社長の死體ぢやない』

思ひも寄らぬ言葉に殿山醫師は手にして居た注射器のケースを、ぱたりと疊の上に落した。

『何？』と醫師は思はず叫んだ。

『村井さんは右の胸の、乳の下のところに一錢銅貨ほどの黑い痣があつた。この死體にはそれがない。それによく見ると、顏付にもどこか少しちがつたところがある』と、保は聲をからして云つた。

醫師は立ち上つて、更に死體の頭部にひざまづいた。さうして、兩手をもつて、死體の頭を持ちあげたが、それと同時に『やッ、こりや、絞殺された死體だッ』と、恐怖に充ちた大聲で叫んだ。

第十六章　教室の怪

讀者諸君は、恐らく、前章の續きを期待して居られるであらうが、暫く待つて頂くことにして、筆者は、鹿島刑事と公園の入口で別れた肥後君の行動を記さうと思ふ。

肥後君が、聞天館を出るとき、たゞちに村井家へ行かないで、先づ、法醫學教室に立寄らうと決心したのは、押毛の所持した「探偵趣味」に記された犯罪方程式が、妙に肥後君の心をかき亂したからである。鹿島刑事は押毛がそれを殿山醫師から傳へきいたかも知れないといふ說を建てたけれども、肥後君にはどうしてもさうとは思へなかつた。だから、この際一刻も早く小窪教授にあつて、教授が押毛と知己であるかどうかをたしかめたく思つたのである。若し、果して自分の想像が的中して居るならば、恐らく村井氏の死に纏る多くの疑問をある程度まで明かにすることが出來るにちがひない。教授は家庭に用のない限り毎晩九時頃までは教室に留まつて居るから、とにも角にも一度教室へ戻つて見よう。かう決心して、肥後君は公園の鐵橋をくぐるなり、道を左手に取つた。

月光に照された鶴舞公園は、肥後君が研究しつゝある「夢」のやうに美しかつた。尤も肥後君は夢の色彩について研究して居るのではなく、犯罪者の夢又は夢と犯罪との關係を檢べて居るのであつて、同君は既に學生時代から、夢について色々の文獻を讀んで居たが、名古屋へ來てからは、小窪教

授の慫慂によつて、夢の法醫學的價値、夢による探偵、寢言、譫言の分析による犯罪搜査などを主題として研究を進めて來たのである。

夢はある程度まで、夢見る人の心を象徵する。醒て居る人の言動には虛僞が多いが、夢の世界には、その人の眞の心が活躍しようとする。だから夢によつてある程度まで人の心を窺ふことが出來るのである。然し、夢は之を客觀的に分析の對象とすることが出來ない。夢を見た本人が語る以外に、その夢の內容を知ることが出來ないからである。而も、覺めて居る人の言葉の眞僞を證據立てる方法がないのであるから、夢の研究は、一面に於ていはゞ夢の如くはかないものといはねばならない。

然し、醒て居る人でも、不用意又は無意識に發する言葉の中には、眞實が含まれ易い。それと同じく、寢言又は譫言には、その人の心が極めてあらはれ易い。だから、肥後君は、夢の研究を、この方面から進めて行かうと企てたのである。

夢のやうな雰圍氣に包まれた公園の木立の蔭を歩きながら、肥後君は、先刻から、犯罪方程式について考へて居た。今回の殺人事件は果して小窪教授の犯罪方程式によつて解決し得るものであらうか。殺人イクオルス犯人の心マイナス被害者の心とは、そも何事を意味するのであるか。今回の事件の何處へどう、この方程式を當てはめるべきであらうか。

肥後君は、地上に投げられたおのが黑影を見つめて進みながら、今回の事件を回顧した。さうして、

鹿島刑事と中澤保と自分と三人の捜索の結果を綜合して、事件の二つの焦點を知ることが出來た。その一つの焦點は卽ち村井氏が押毛と相謀つて姿をかくさうとしたこと、今一つの焦點は殿山醫師が村井氏の死體を奪つたことである。殿山醫師が死體を奪つたといふことは村井氏の死に深い關係を持つて居るものといはねばならない。換言すれば、村井氏は殿山醫師に殺されたものと推定して然るべきである。而も一方に於て村井氏は、夫人に向つて、自分は殺されるかも知れぬと告げたといふのであるから、それは當然、殿山醫師に殺されることを意味して居たと認むべきであらう。

然し、と肥後君は考へ續けた。この二つの焦點を結びつける連鎖は果して、このやうに簡單なものであらうか。殺されるかも知れぬといふことがわかつて居るならば、殺されることを未然に防ぎ得た筈である。若し殿山醫師に殺されることがわかつて居たならば、殿山醫師に對して十分警戒し得た筈である。それだのに村井氏は、平氣で殿山醫師から與へられた動脈硬化豫防の丸藥をのんで居たといふではないか。

ところが、村井氏が模擬葬式の場から姿を隱さうとしたことは、殺されないための計畫と見れば見られぬこともない。單に人々をアッと云はせるためのジョークとしては、あまりにも念が入り過ぎて居る。して見ると村井氏を殺した犯人は殿山醫師の他にあるだらうか。若し、さうとすれば、殿山醫師は、何のために死體を盜んだのであらうか。

『わからない、わからない』と、肥後君は呟いた。『先刻の捜査の結果、押毛が村井氏を殺したとは、どうしても自分に考へられない。押毛は村井氏の姿をかくす計畫の主謀者であるから、むしろ村井氏を庇護すべき立場にあると考へて至當であらう。さうして、押毛が小窪教授を知つて居て、教授が、この計畫について相談を受て居るのであるから、教授もやはり、村井氏を庇護する立場にあらねばならぬ。教授の性格から見て、それが最も自然な推定であらう。いづれにしても、教授に逢ふことが出來れば、この間の消息は明かになる……』

かう思つて肥後君は歩調を早め、やがて醫科大學の正門をくゞつた。

法醫學教室は森として居た。どの窓からもあかりが洩れて居なかつたので、肥後君は頗る失望した。小使室の扉をあけると、宿直の小使が居た。彼は後藤と云つて、木村よりはずつと年が若く平素物事をはきく〳〵と行つた。

『先生は？』と、肥後君がたづねた。

『先刻まで御客さまがありましたが、それから御一緒にお出かけになりました』

『どんなお客だつた？』

『それが實に珍しい人でした』

『え、珍しいとは？』